
セルフ・ディストラクション

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セルフ・ディストラクション

【Nコード】

N1562C

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

私の前に突然現れた人たち。飄々とした灰色の存在に、ノリノリの因果の鎖、正義を振りかざす悪意。理論と持論と一般論がぶつかり合い、少しずつ真実へ近づいていく。壊れているのは世界か自分か。壊れていくのは世界か自分か。

0、血溜まりの狂気（前書き）

結構グロテスクな表現を扱っております。苦手な方はご遠慮ください。

ホラーっぽいですが、そういった内容は含まれておりません。あくまでそういう作品ですので。

理論や持論、一般論などあまりライトではない文章構成となっておりますので、そのところご注意ください。とは言え、何故か掛け合いも入れる。それが蜻蛉クオリティ。

0
、
血溜まりの狂気

狂氣と狂喜は何が違うのだろう。

時々私はそんなことを思うことがある。辞書で調べてみれば、「狂氣」とは氣が狂っていること。また、異常をきたした精神状態のことを言うらしく、「狂喜」とは異常なまでに喜ぶことだと言う。

でも、狂喜とは狂うと言つ言葉が使われているように、やはりどこか普遍的でない部分が存在するのだらうと思う。そしてそれは狂気ではないのだらうかと。

目の前の光景を私は狂気と呼ぶのか、狂喜と呼ぶのか判断に困る。目を眼球が飛び出すんじゃないかという勢いで見開きながら、嗚咽交じりの悲鳴と咆哮を撒き散らす女の子。悲鳴、と言うには少し相違が発生するかもしれない。

彼女の表情は狂喜に歪み、それを見ている私の目には狂気に写る三原色のマゼンタなんて比にならないほど赤く、ブラックなんて知れた名前で表現するには勿体無いほどのどす黒さが視界を支配し、それでも尚血なまぐさい臭いは私の嗅覚では感知できない。あれを血だと言い切るには幾分証拠が無いが、今まで生きてきた人生経験の中で判断するには十分な光景だった。

女の子は『何か』を引き裂き、捻り潰し、原型すら留めぬほどに真つ赤に染め上げる。臓器は剥き出しにならないし、肉という肉がちぎれる音もしないし、喰われる何かの悲鳴が聞こえる訳でもない。けれども女の子はそれを殺し、殺し、コロス。

そして笑う。笑ふ。ワラウ。

[illegible]

鮮血の空間に響き渡る甲高い笑い声。耳奥にだけ反響して、私の意識がもがれそうになる。体中を引っ掻き回されるような感覚が襲

い、音のツメが私の肌に突き立てられたことに気付く。

……痛い。……痛い。……痛い。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ！！！

引っ張り出されたのは『何か』のものではなく、私の臓器、肉、悲鳴。体内で逃れることなく木霊する女の子の声は、私を殺していく。

激しい耳鳴りと、胃が大波のようにうねりを上げる感覚。眼球の奥が酷く乾き、頭蓋骨の中身が振動する。その怒涛の殺意に耐え切れるわけも無く、私は膝を付いて流したくも無い涙を地に落とす。波紋が残り、自分が座っていた場所が水たまりだと知る。

これは一体どういうことだろうか。

人殺しの現場を目撃した不幸な人間？

仲が良かった友人が死んだ瞬間に居合わせた人間？

この世のものとは思えない化け物との遭遇？

そんなファンタジックな言葉で片付けられるのならそうして欲しい。

これは『狂気を喰らった可愛い子の本性』か。ギャップが激しいからこその恐怖。女の子の長い髪はきつと血のせいでボロボロになっってしまうことだろう。けれども気にしている様子は皆無に等しく、その血を天の恵みとでも言うように満遍なく浴びているようにも見えた。

ふと、女の子の声がピタツと止まった。

苦痛から解放された私は、汗だくになりながらも女の子を見る。

女の子も私を見た。潰れた眼球をぐるりと向けて、不敵な笑みを漏らしながら。

「あなたはこんなに殺して、どうしたいの？」

恐れを隠すために並べた言葉はこれだった。女の子は先ほどの凶行とは打って変わって、落ち着いた声で答えた。

「ねえ、私はこんなに殺して、どうしたいの？」

泣いていた。こぼれた涙も限りなく紅い。場違いじゃないのかと、私は咄嗟に怒りたくなったが、そのあどけない表情に言葉を飲み込んだ。

それは答えじゃなかった。それは私に対する問い。

どうしようもなく分からない自分への問い。答えるのは私。問うたのは私。

寂寞とした相手の気持ちに私は戸惑う。どうしてそんな無機質で、悲しそうな瞳をするのかと。あんなに殺しておいての慟哭は、卑怯じゃないのかと。

まるで子供のようだった。血の水たまりに身を浸しているのは物心つかない子供。

だから迷い人に尋ねるように、私は聞いた。

「あなたはだあれ？」

すると、彼女は泣き止んで、笑って答えた。

不気味に口元を吊り上げて、まるで狂った口裂け女のように。

「知らない」

突き刺さったのは、言葉だっただろうか。ツンツとした痛みが胸の辺りに走ったかと思えば、そこには彼女の白い手が。きめ細かい肌を持った綺麗な腕は、私の中に食い込んで中身を引きずり出そうとしていた。

脊髄を持っていかれた。

五臓六腑を持っていかれた。

体内を這うように蠢く彼女の手は、そのうち私の脳を持っていた。

不思議と痛みは無かった。あるのは血が駆け巡る熱だろうか。

どくん、どくと脈打つ私の全てはグロテスクで、見ていて吐き気を催すものだったが、もう吐くための器官すら存在せず、かと言って息が漏れるための肺もなく、血を流すための心臓すらない。

けれども血溜まりは一つ増えて、彼女の身体を汚していく。また一人、彼女はその手で殺したのだ。血塗れの掌には私のモノが。

朦朧とする意識の中、私は彼女の顔を見た。整った顔立ちで、きっと男子生徒にもてはやされたに違いない。傷ついた黒髪は、きつと愛しい人に撫でられるためにあつたに違いない。

笑う彼女を目の前にして、急激に眠気が襲ってきた。

崩れ落ちる身体感覚と、崩れ落ちた意識のタイミングは一緒だった。

私は殺された。

1、サンドイッチ

春の日差しが暖かい昼下がりとは一変、朝は肌寒い風が吹いていた。

散る花弁はピンク色だというのに、風は青く冷たい。とんでもない場違い野郎が遊びに来たものだと思っただろう。朝方の支度には若干時間がかかったことだろう。タンスから一ヶ月前にはしまったはずの上着を出す時間の分のロスタイムだ。

かく言う私もその一人だった。遅刻する気などさらさらなかったというのに、時計は校門の閉まる時間ギリギリを指している。これが時の神の悪戯だというのならば、一分だけでも猶予をくれるとありがたいのだが、現実そう上手くいかない。

走るのははたしないから、出来る限り最大速度で早歩きする。体力には自信のあるほうだったが、無駄に疲れる移動方法を取っているために吐息が乱れてきた。吐いた息の色は白いはずも無く、無情にも額が汗ばんできたのが分かった。これでは上着を取ってきた意味が無い。

校門が見えてきた。時計の針は既に予定の時間よりも三分以上は過ぎており、案の定鉄格子式の門は閉まっていた。

私の学校は規則やこういった細かい決まりにうるさく、遅刻などは厳しく取り締まるほうだった。

「……はあ、仕方ないかな」

遅刻した場合は門についているインターホンを鳴らして先生を呼ぶ決まりになっている。自分の通う学校ながら、とんでもなく面倒な決まりだ。

しかし、大半の生徒は近くにある柵を飛び越えていくか何なりして、先生を掻い潜っている。私もそうしたい欲求に駆られたが、そ

れを殺してあえて優等生でいようとする。

ピンポン。

シンプルな軽い音が鳴り、機械の向こうから先生の声が聞こえて、私は事情を嘘偽り無く伝えて門を開けてもらった。

（これでいい。私のイメージは他の人と違って正直者になるんだもの）

一時限目の授業はほとんど出られなかった。これは失策だった。

教室に入った途端、遅刻してきた私を先生が睨む。敵意や邪魔者扱いのような軽蔑の目では無かったが、私にとってはそれが酷く気分を損ねる要因となっていた。

私は学校ではあまり類を見ない優等生だった。成績優秀、運動神経抜群、容姿端麗：かは自分のことなので分からないが、そこまで酷い外見ではないことは自負している。それなりの御洒落はするし、友人付き合いも悪くないはずだ。

かと言って、これは神童のような天才的なものとは違う。私は自ら努力によって得た地位であり、能力である。

そうすることにより、私は悦を手に入れることが出来る。両親に褒められて、友人に尊敬され、先生から好評を貰う。誰しもが望むことを私は実践しているだけの話だが、これを完遂できている人物は、少なくとも私のクラスにはいない。

何故なら、私はそれを遂行するために様々な努力をするからだ。

毎朝のランニングは欠かさない。早寝早起きは勿論のこと、自主学習など毎日の日課であり、予習復習は至極是当然の行い。親孝行のためにも、余った時間はバイトに費やす。非常に充実した生活と

言えるだろう。不満は無い。

……キーンコーンカーンコーン。

四時限目の終わりを告げるチャイムが鳴った。一斉に教科書類を鞆に入れる布擦れの音が聞こえる。何かがぶつんつ、と途切れたように生徒たちの話し声が立ちこめ、先ほどの静寂はどこへ行ったのかと万人が問いそうだ。

私の周りにも数人の友人が集まってきた。

「お弁当食べよー」

「机寄せて。ほらほら」

「私購買行ってくるから、先食べてて！ごめんねっ」

一人の生徒が教室から駆け出して行ったのを私は見送った。

途端に私の頬の筋肉が緩む。これは自発的なものであり、意図的なものではなかった。笑顔は人間関係を滑稽にするための最低材料なのだ。嫌う人間もいるそうだが、それならばそれで状況を考えて表情を作る。目の前にいる友人たちは、前者で満足してくれる人たちだ。

私も茶色の皮製の鞆から弁当箱を……手に取った感覚がいつになっても来ない。

がさごそといつまでたっても探りを入れている私に不信感を覚えたのか、一人の友人が心配そうな顔をして聞いてきた。

「どうしたの？お弁当、忘れて来ちゃったの？」

否定したい所だったが、どうやら図星だ。私は苦笑いしてそうみたい、と頷いた。

「ちょっと私も購買部に行ってくる。ごめんね」

そう言ってから私はスカートを押さえて席を立つ。皆口を揃えていいよ、と言ってくれた。が、きつと何かしら不満を感じているに違いないと私は思った。

足を出来るだけ早めて購買部に向かう。ここからは一番遠い場所に設置されており、階段を上り下りするのが非常に面倒くさい。

ふと、横を一人の生徒が横切った。

「先輩こんにちは」

「ええ、こんにちは」

この急いでいるときに呼び止める憎たらしい生徒だったが、そんな内を微塵も感じさせない笑みを浮かべて挨拶を返した。向こうからわざわざ挨拶してきてくれたのだ、それをぞんざいに扱うことなど無礼にもほどがあるだろう。

だが、不思議なことに今日はかなりの生徒に挨拶をかけられた。

「こんにちは先輩」

「お弁当忘れたんですか？」

「どうしたんです？こんなところで」

「先輩が購買部なんて珍しいですね？」

その内焦燥が私を満たしてきた。このままでは確実に購買部の食品が売り切れる。行った事はあまり無いが、生徒に人気があることは私も知っているのだ。

それなのに……。何故こういう時に限って……。

先に買いに行った友人が廊下の向こう側から走ってやってきた。手には三つほどのパンが抱えられている。

そして私を見ると、首をかしげて声を上げた。

「あれ？購買に行くの？早く行かないと売り切れるから急いだほう

「がいいよ」

心配してくれるのは有り難かったが、何分時間が無い。そういつた気遣いをする前に、私を引き留めないという選択肢を取って欲しかった。

その後も何かの嫌がらせなのではないかという数の生徒に声をかけられ、内心苛立ちながらも笑みは崩さず丁寧に接する。

そんな地獄のような廊下をなんとか突破して私は購買部にたどり着いた。

人気があると聞いていたのにも関わらず、そこにはちらほらと男子生徒がたむろしていただけで、テレビで見るような満員電車驚愕の混み具合は存在していなかった。

ちらりと一瞥だけでメニューを確認し、私は購買部の優しそうなおばあさんに声をかける。

「すみません。この苺サンドとツナサンドを一つ」

人気のありそうなメニューだ。しかし以外にもガラスの向こうには、売れ残り確定だろうサンドイッチが静かに佇んでいる。買う人物が少ないのか他に人気商品があるのかは知らないが、最悪ショーケースの端に追いやられた青汁ジュースよりは売れているようだった。

「あら珍しいじゃない、あなたが購買利用するなんて。はい、三百円ね」

言われた分の小銭を彼女の皺だらけの掌に乗せた。私の手から硬貨三枚分の重量が消え去った代わり、サンドイッチ四枚分の重量が加算された。重くはないが、幾分か持つのに苦労する。財布をポケットにしまうのに少しだけ手こずった。

と、その時、一足遅れて女の子がこちらに走ってきた。顔は知らないが、童顔に分類されるその子が慌てる姿はなかなか微笑ましい。ショーケースに突撃しそうな勢いで急ブレーキをかけて止まり、購買のおばあさんに息を切らせて言う。

「い、苺サンドとツナサンド一つ！」

「はいはい。三百円ね」

随分と慣れた会話の流れのように感じる。傍から見ていると、おばあさんは先ほどの私に対する態度とは明らかに違うし、女の子のほうも何やらおばあさんと親しげに会話している。恐らく常連客なのだろうと推測できる。

そのまま傍観していると、女の子が瞬間冷凍でもされたかのように固まった。その手には財布……でもあつたら内容が容易に想像できるのだが、何も無い手を女の子は見つめている。

「おばあさん。交渉しようじゃありませんか」

唐突にそう切り出していた。

「何だい、交渉って。値切りならお断りだよ」

「何をう！！そんな卑怯なこととはしませんよっ。これを見てくださいな！」

そう言って勢い良く差し出した掌。……掌。

もはやだから何だと激しいツツコミを入れたくなるような光景。だがどうやらおばあさんにはその意味が分かったらしい。

「ダメ」

「何でっ！？」

「ツケておいて欲しいんだろう？生憎うちの購買ではやってないんだよねえ、そういうの」

「し、しかしですね。私の掌を見てください。この不吉な手相を……じゃなくて財布忘れてきちゃったんですよおおお！！因果ですよ因果！！」

若干五月蠅い少女だと第一印象は決め付けた。

その後も猛獣のごとく食って掛かる女の子をおばあさんは新聞を広げてあしらっていた。流石に諦めてきたのか、段々と女の子の勢いが萎れていく。

私は自分の持っているものに目をやった。苺サンドとツナサンド。まさに彼女の欲しいものと完全一致する。

（少しくらいなら分けてあげてもいいかな……）

これは人物関係の高感度の上昇には関わらないイベントだろうけれども、あまりに必死になっている女の子を見ると良心が痛む。このままでは恐らく彼女の昼飯はないだろう。

そう思っ、差し出そうと一步を踏み出した、その私の横を誰かが通り過ぎた。

目を疑った。

その後姿は月の女神でも光臨したような後光を放っていてもおかしくないほどの美麗。男子生徒の服装が不似合いで、その無造作に流れる灰色の髪の毛が一層ギャップを増していた。私の学校では髪の毛を染めるのは禁則事項だ。ということは、地毛なのだろうか。

あまりに整いすぎた顔立ちに悪寒さえ覚えるほど。しなやかな指先と腕は、女子と見間違えても責められない。

彼はそのまま女の子の横まで行くと、おばあさんに向かってこう言った。

「苺サンドとツナサンドを。三百円だったよね」

「あら灰田君じゃない。久しぶりねえ、どうしてたの？」

「いえいえ。僕は普通に学園生活を勤しんでいただけです。まあ、最近の仕事が多くて」

世間話を広げながら、私とこれまた全く同じものを注文していた横にいる女の子はとてつもなく険悪な表情を彼、灰田という男性に向けていた。歯軋りの音がここまで聞こえてきそうである。

そんな彼女はついに食って掛かる。

「あ、貴方嫌がらせですかあ！？私がそれを欲していることを知って……」

「ん？そうだったのかい？それは悪い……と思いながらも譲る気は無いけどね。残念、三百円を持って出直してくると良いよ、うん」

「むきいいいい！！」

涼しい顔をして、何やら非情な事を言う人間なようだ。つい頬の筋肉を緩めてしまう。

灰田と呼ばれた彼はポンツと彼女の頭に手を置くと、そのまま私のほうに歩いてきた。傍観していたのがバレたのかと、心臓が高鳴ったが、そのまま彼は通り過ぎて行った。

……と思えば、私の一步後ろで立ち止まる。

後ろ向きだが、彼が微笑したのを背中に感じた。それは、とても『良いもの』ではなかったように思える。何か品定めするような舐めまわされる感覚が、場違いにも不思議と私の脳みそがそう捉えてしまう。

小声で、彼は私の耳元に息を吹きかけるように言った。

「彼女にあげないの？それ」

見透かされた。

悪寒が背筋を走る。まるで汗だくの汚らしいジジイに犯されそうになるような、不気味で激しい嫌悪の感覚。

何故だろうか。どこにでもありそうな日常の一場面なのに、彼が言う言葉には確かな冷たさがあった。初対面の人間にそういう言葉をかけるものおかしな話だったが、それ以上に何かが彼にはあった。今度は認識できるほどの小さな微笑を漏らすと、灰田は靴音だけ残して去っていった。

私の中で騒擾ソウジョウしていった彼の後姿を振り返ることは私には出来なかった。怖かったからじゃない。ちよつとした日常の中に、彼がいたからだ。

自分で言っておいて、何を言っているのか理解が出来なかった。理解できない、という感覚で私が現実ジヤクに引き戻された。目の前で相変わらず女の子が騒いでいる。この声にすら反応できないほどの放心を私はしていたのだろうか。

一体何故……。

堂々巡りの想像が無限ループで繰り返されるような気がして、私は思考を止めた。首を振って、掻き消すように脳内を落ち着かせる。同時に私は一步を踏み出していた。

「貴方、そんなに欲しいなら、これ」

にこりと私は最大限の笑顔を持って彼女にサンドイッチを二つ渡した。とは言え、サンドイッチは包装の中に二つずつ入っているため、一つあげてしまっても私の昼食が無くなるわけじゃない。流石の私でも、自分の昼食全てを知らない生徒に明け渡すほど優しくは無い……と思う。

それを見た彼女は瞳に星を輝かせて私の手を取った。

「ほほほほっ 本当に良いんですか！？ って聞く前に貰いますけど」

半ば私から奪い取るようにして、サンドイッチをかつぱらった。
とんでもなく図々しい女の子だと、第二印象で決め付けた。

気付けば緑雨。若葉は降りしきる灰色の雲から落ちる雨に濡らされて芽吹く。

開花した花は赤く、まるで花弁の中央から噴出す鮮血のよう。
私の長い一日が幕を開けた。

2、豪雨とカレーライス

曇り空は滔々（とうとう）と雨を地に流し込み、ついには洪水警報まで出る始末となってしまうた。特別河川が近場にあるわけでもないが、洪水はやはり広域に被害が及ぶらしく、学校帰りからは外出禁止となっていた

豪雨ならまだしも、洪水となつては物理的障壁の最大級とも言うべきか、流石に危険を犯してまで出歩こうとする生徒はいない。よって欲求が発生した際に障壁によって欲求不満、フラストレーションの類が高まることは無いだろう。

傘を叩きつける水玉の音は激しく、持っている手に振動機付きの傘でも持つているかのような錯覚を覚えさせるほどの震えを作っていた。路面は鮮やかな灰色とはかけ離れた色に変色し、今や空の色よりも黒い。ザーッと排水溝に雨が流れ込む音が五月蠅かった。

私は登下校は普段は独りですることになっている。普段で、というのは、何かの誘いなどがあつた場合はそのまま付いていくこともあるということだ。

集団行動というものが私は好きではない。いや、好きではないというよりも『そうしたい』という感情が芽生えないと言つた方が適切だろうか。人と助け合つて生きていく、ということは勿論不可欠だと思っているが、私にとってはそれこそ障壁だ。一人で何でも出来ていかなくはこれからの世の中、不便が多くなるだろう。

長靴の音は一つで十分。隣に歩く音は私には必要が無い。

……なのに、何故彼は私の隣を笑つて歩いているのだろうか……。

ちらりと私よりも背が高い彼の顔を横目に見上げてみる。相変わらず直視出来ない顔の造りだ。非常に悔しい。

すると彼、灰田は私が見上げているのに気が付いたのか笑みを漏らして何？と聞いてくる。

「それは私が問いたいわ。一人で帰りたいんだけど…どうしてついできたの」

わざと突き放すような冷たい口調で言うが、対する灰田は全く気にも留めていないようだった。私から視線を外して、遠くの雲を見るように前を向いた。

「あの子に結局サンドイッチはあげたのかな？」

そんなことを聞くためにいちいちここまで付いてきたのだろうか。もしそうだとしたら、頼に一発お見舞いしてやってもいいくらいだ。

「あげたわよ。全部じゃないけど」

刹那だった。

灰田の表情が一変し、瞬き一つ無い無垢な瞳がずっとこちらに向けられた。口元は筆で一を書いたように閉ざされており、私の言葉に驚いた様子だったが、驚きの度合いが異常だった。ホラー映画のワンシーンのような静寂が辺りを包み込み、化け物と私だけの狂気の空間を作り出す。

まただ、と私は思った。

サンドイッチを彼女に渡さないのか、と聞かれたときと同じ悪寒。彼が私の日常に介在していることへの疑問と違和感が背筋に電撃となって駆け抜ける感覚。

私はその瞳まるで杭で打たれたように目が離せなかった。自発的ではなく、相手が杭を打ち込んだという意の強迫観念に良く似た硬直。

「僕は」

化け物とは思えない澄んだ声が彼の口から発せられた。瞬間、私は映画のフィルムの中から解放された。

「僕はてつきり全部あげちゃったのかと思ったよ。そうかそうか、今日じゃなかったんだね」

安心したようには見えない。むしろまるで明日ゲームソフトを買って貰えることを楽しみにしている子供のような笑顔でそう言う。今日じゃなかった、というのはどういう意味だろうか。予定表を頭の中に想像して調べてみるが、今日の欄には何も書かれていない。それにあつたとしても、サンドイッチと関係のあるような予定はどんなものかすら思い当たる節が無い。

するとそんな悩んでいる私を見て、何を思ったのか手を私の目の前で振って否定の意を示して言う。

「ああ。気にすることはないよ。すぐに分かることさ」

軽快な笑い声を上げて、私の一歩先を歩いていった。私はしかめっ面を浮かべつつも、彼の後ろに付いてく。別段彼に用があるわけではなく、私の行く道に彼がいるから、というなんともベタな理由だが、実際そうなのだからどうしろと言われてもどうしようもない。雨脚が強くなってきた。傘から伝わる振動がより一層強くなり、少しだけ傘を持つ手に疲れが溜まってきたように思える。雨音も格段に五月蠅くなり、車のフロントに突き刺さるようにして直滑降に落ちてるのが肉眼でも見えた。

そうして、視線を逸らしたのが失敗だった。

「…………え？」

気付けば私は自分のものとは思えないほど間抜けな声を漏らしていた。目の前に広がっていたのは真っ直ぐで先の見えないコンクリートの一本道。自分の瞳が合わせる遠近感がおかしくなってしまうのかと錯覚させるほどの一直線。端にある建造物など気配すら感じられないほどの永久道路の上には黒猫一匹すら見当たらない。

つまり、誰もいない。

何が起こったのかシェイク状態にある脳内で判断するのが難しかった代わり、視覚が捉えた光景を認識することがそのまま答えになるのだと理解する。

記憶の中での間違い探し。二枚の絵を見比べて私は相違点を探した。

言わずもがなというところだが、絶対的におかしい。一枚目の絵には限り無く続く一本道に一人の男子生徒がいたのに対し、数秒後に切り替わった絵には彼がいなかった。

おかしい。おかしいのだ。

絵の中の世界なら可能でも、ここは三次元であり、逃げ出す場所もなければまさか消されたなんてこともない。例え百メートルを十秒以下で走れたとしても有り得ない。

彼の笑い声は微かな響きすら残さずに雨に溶け、彼の姿は陽炎のような余韻すら残さずに消え去った。密室殺人は完了したとでも言うべきなのだろうか。

冷や汗が玉になって吹き出し、首筋を伝っていった感触が自我を取り戻し、私を現実に取り戻す。

これは日常。

必死に私は何かを否定し始めた。

これは日常で、きっと私は雨に黄昏ていた時間が思いのほか長かったのだろ。それにしらを切らした灰田が帰ったと考えれば全て納得がいく。

何も心配することはない。私はしばし放心していたのだ。理由はさしずめ灰田のあの殺人犯が殺人対象を射殺するような無機質な目のせいだ。

そう自己完結すると、それからの足取りは軽かった。「気にすることなんて何もない。きつと今日は疲れてるんだ」と自分で言っていて嫌になるような稚拙な言い訳をその場に残して、今度こそ独りで一本道を長靴の音を響かせながら帰路についた。

今だ雨は止まない。窓を叩きつける音もそろそろ風流に感じつつあるが、室内にしていると幾分雨は鬱にさせてくれる。

若葉も緑雨と言えどもここまで攻撃的に降られれば参ってしまうだろう。恵みの雨も用法容量を守らないと毒になるようだった。

私は帰宅後、自室で教科書を広げてぼーっと窓を見ていた。リズム感の無い曇り空のオーケストラは、聞くになかなか素晴らしいものだった。と感ずるのは私が暗いせいだろう。

（なんなのよ、あいつ）

全ての原因は灰田にある。これはどうやっても否定しようのない事実だ。特別虐められたわけでも無いし、何か気に障るようなことを言われたわけでもない。

ならば何故？

これも堂々巡りになりそうな自己への問いだが、端折れるものはなかった。

胸のうちに蔓延るもやもやとした気持ちに恋心だというなら可愛いものだが、残念ながら対極に位置していると言っても過言ではな

い感情だ。

その苛立ちをどうすることも出来ず、私は教科書をしまつてベッドの中に飛び込んだ。先ほどまで座っていたせいか、微かなぬくもりが残っていた。

埋めた顔の中、脳内はやはり落ち着かない。これほどに勉強が手に付かなかつた日があつただろうか。青春を謳歌する学生たちが今だけ羨ましく感じた。私の場合は物思いにふける理由が下らな過ぎる。

まず何なのだ、あの灰色の髪の毛は。灰色の地毛などこの民族でもないはず。金髪茶髪許せて赤髪、白髪だつてあるが、灰色など聞いたことが無い。もっと簡単に言うならば、アニメで言う銀髪なのだ、彼は。

自分の髪を見れば、メラニン色素が剥げて紫外線を受け傷ついた部分は確かに存在するが、灰色になど成る気配など微塵も感じさせない。

それにあの言葉。

『今日じゃなかったのか』とは、一体どういう意味だ。明日になれば何か起きるといつのか。

布団を両拳で殴りつけた。埃が舞つたような気がした。

「ご飯よー!!」

お母さんが下の階から呼ぶ声がした。ふと時計を見ると、もういい時間だった。一体帰宅してから何時間彼について考えていたのだろうか。これでは本当に恋愛事情みたいで苛立たしい。あんなものを彼氏にした日には死んでもいい。

私は一つお母さんに返事をして、階段を降りていく。手すりが付いているのだが、私の家には足の不自由な人はいない。何の意味があるのだろうか毎回思う。

食卓に着くと、テーブルの上には現代社会では失われつつある一

般家庭の料理が広がっていた。最近友人に聞けば、深夜遅くまで歩いていたりにしているために家族で食事を取ることは少ないし、朝食も一緒に取らないという。

私の場合は都合が一致しているだけなのかもしれないが、学校で過ごす昼食以外は外食だつて付き合うし、家族での行動は大体共にしている。

……というのは表で、確かに実際そうしているが、それは親に悪い印象を与えないためだ。独立はしたいが、基盤が出来るまでは協力を惜しんでもらうては困る。利用、と言つては悪いが、似たような気持ちがあるのも嘘ではない。

そんな食卓のメニューには、私の好きなカレーが大皿に盛り付けられていた。色鮮やかな野菜が食をそそり、健康面もばっちり。さらにスパイスはお母さんお手製で、私はそのなんとも言えない辛料の香りが好きだった。

異変は、家族が揃つた時に起きた。

父親がそんな私を怪訝な目で見ている。言われなくとも分かっているのだ。私だつて何が何だか分からない。

記憶を巡らしてみた。帰宅した後に間食をした覚えはないし、体形を保つためにもそれは自己禁止している。

(なら何で食欲が湧かないの…?)

カレーを目の前にして、スプーンを手にとっておきながらそれ以上の行動が出来なかった。

「どうしたんだ？今日はお前の好きな母さん特製のカレーだぞ」

「わ、分かつてるわよそんなこと。今日何か食べたっけなあ……」

「何？食欲が無いの？あんたが間食するなんて珍しいじゃない」

珍しいと言われても、本人こと私には覚えが本当に無い。

食欲が湧かないと言っても、満腹感に満たされているからというわけではなく、発熱した時のような食べたくても胃袋が寄せ付けようとしないうような感覚。鼻腔をくすぐるカレーの香りは確かに美味しそうだし、理性は食べると叫んでいるにも関わらず、本能が有り得ない反抗をしていた。

「食べないなら後でも良いけど……どうするの？」

お母さんが心配そうな目で見てくる。自分自身も心配になってきた。何か病気なんじゃないだろうかと疑いを持ってしまいが、まさか、という都合のいい言葉に片付けられた。

「ううん。食べる。水くれないかな、多分それでなんとかかなと思う」

水分を欲しているのだろうと思って、水道水を汲んできてもらった。私の家庭は別にアルカリイオン水とかをいちいち買いに行く性質ではない。健康面、味面では確かに向こうが上かもしれないが、だからと言って水道水が飲めないわけではないからだ。こたわりはあまりない。

中国ならまだしも、ここは日本で、水道水は飲めると豪語しているのだから飲んでやらなくては意味が無い。

コップになみなみと注がれた水を一気に喉に流し込んだ。……確かに若干鉄臭い。

ぶはあ、とオヤジ臭い吐息を吐いた。

すると幾分か楽になったような気がした。再びこげ茶色のカレーに目を移せば、積もるほどの食欲はやはり湧かないが、スプーンを口に運ぶことは可能になった。

食べてみればあらびつくりとも言つべきか。意外にも食が進んだ。お父さんもお母さんもその様子に安堵したのか、自分たちに用意されたカレーを各自口に運び始めた。

福神漬けが赤い。稀に黒っぽいのも混ざっていて、私はその色が好きだった。きつと濃い味なのだろうと思っているからだ。

全て食べ終わったときに、突然として満腹感が襲い、私はそこでやっと食事をしたのだと痛感することが出来たのだった。

その頃二階に置きっぱなしにされたピンクの携帯電話が振動する。
ブー、ブー、ブー、ブー。
名前『灰田』。

3、ナクナツチャツタ世界

その光景を私は見ていた。

どす黒い血まみれの少女が、怯えて声も出ないか弱い女の子の脊髄を抜き取り、五臓六腑を抉り出し、ついには手探りするように体内に手を巡らせて脳髓を刈取った光景を。

女の子は精細に作られた彫刻が壊れるような無慈悲な音を立てて崩れ落ちた。血だまりに二人の子供が沈んでいき、倒れた子の眼球が赤く、赤く、赤く……。

悲鳴は無かった。

途中会話が少し聞こえただけで、二人とも誰かに助けを求めたりもしなかったし、襲うほうもずっとケタケタ笑っているだけだ。

時折涙を流しながら。

矛盾している彼女の行為は恐ろしい。笑いながら人を殺し、殺した拳句嘆き悲しんで、悲しんだかと思いきや笑って次の獲物を狩っている。逃げ出すことすら忘れた私が見ただけでも、もう何人もの子供が血だまりに沈んでいったのを確認していた。

鳩尾の辺りが酷く苦しかった。

喉の奥からすっぱい味が舌の奥に伝わっている。少しでも気を許したら胃液を逆流させそうな緊張感を私が随時包んでいた。

アレハナンダロウ。

表現のしような無い狂気の沙汰。ホラー映画や、グロテスクなゲームはいくつか見たことがあるが、このような血祭りは見たことが無い。

突如現れて人を驚かすゾンビ。

宇宙からやってきて、人を惨殺していく恐ろしいエイリアン。

捕食欲望の赴くままに人を喰らう猛獣。

自らの快樂のためだけに殺人を犯す人。

一体どれなんだろう。内臓は取り出してもそのまま。相手は悲しんでいるから快樂じゃない。侵略が目的でやってきたわけでもないし、驚かすためだけにこれだけのことをするわけもない。

私の常識から逸脱した凶行の数々。

これを見てしまった私が罪人か。触れてはいけない世界に触れてしまったのか。

逃げ出したい。ニゲダシタイ。ニゲダシタニゲダシ……。

炯々（けいけい）とした眼光が私を貫いた。

「ひいっ!？」

思わず悲鳴を上げていた。裂帛^{れっぱく}とした声は上がらない。喉の奥に音がつかえて発声しきれなかった。代わりにがらがらとした肺の中で空気の震える音が口から漏れた。

悪魔が、化け物が、女の子の皮を被った『何か』がこちらにひたり、ひたりと冷たい足音を立てて近づいてくる。荒唐無稽だったはずの存在がひたり、ひたりと私を狙う。

左手には血濡れの臓器。右手には血濡れの臓器。左足には捻り潰された残骸。右足には捻り潰された残骸。彼女の口元には、啜った血液が涎と混じって垂れていた。

ねえ。

声になっていない問いが私に向けられた。

頭の中で反芻するように響き渡る。いらないと放り出したくても、彼女の意思が伝わってくる。

どうして殺さなくてはいけないの？

また、あの世界の悲劇を全て見尽くしたような悲しみの表情。これから当の本人がその惨劇の記録を更新しようとしているというのに、まるで他人事のような呟き。

ぐちゅぐちゅと音を立てる鳴咽の向こうに彼女の本心があつたとしても、私はそれを救うことは出来ない。自己保身で精一杯だ。

笑みが、笑みが、笑みだけが彼女の表情を支配する。そこには一点の悲しみも苦しみも無い。だが、だからと言って感情が喜というわけではなく、複雑に絡んだ喜怒哀楽が存在していた。まるで人間のように笑い、悲しみ、ふとした時には優しそうな表情を浮かべ、次の瞬間には怒っている。

今はどうだろうか。笑っている。アハハと愉快的な声を漏らして、笑っている。

アハハハハハハハハハハハハハハハ。

「来ないで……っ！」

氣付いたときには私は拒否と否定の意を込めて、そんな言葉をぶつけていた。威勢を張ったは良いが、ガタガタと震える両手両足は脳からの信号を完全無視する。動けとどれだけ反芻したところで、全部が無為に還る。

その時、ずいっと女の子が顔を寄せてきた。まるで初めて見る昆虫を観察するような好奇心の眼差し。あまりに近すぎたそれは、眼球が接触するんじゃないかと私に思わせた。相手の黒目に私の怯えた表情が写り、きっと私の瞳には彼女の狂気に歪んだ表情が写っていることだろう。

私は激しい焦燥に駆られた。

殺される。殺される。コロサレル。コロサレル。

誰が私の脳内をこんな汚らしい言葉で支配してしまったのかは知らないが、もしやった人が近くにいたのなら、早急に解除してほ

しい。こんな、こんな恐怖を味わうくらいだったら全財産をあげても良い。だから、誰か……。

切なる願いも声に出せなくては意味を持たなかった。いや、声が出たところでこの世界にいる人が私を助けてくれるなどとは思ってはいない。

だって、彼女と私しかいないのだから。

「ねえ、どうして私はあなたを殺さなければいけないの？ 教えてよ、ねえ」

優しい手つきで私の頬を撫で、愛しい人を扱うように唇を寄せてくる。血生臭い臭いが鼻につき、思わず身を引きたくなったが、下手に動けばその頬に添えられている手が凶器にも化すことを恐れて縮こまった。

「ねえ、あなたも知らないの？ どうして知らないの？ 教えてよ、ねえ」

「し、知らないわよ。だからその手を、その手を離して……お願い……」

もう問いの内容を理解しようとする余裕すらなく、とにかく私は彼女から離れたい一心でいた。けれども、それは彼女にとって不服を催すものだった。

突如として彼女の表情が喜怒哀楽で言う喜と哀から怒へと変貌する。

答えをもらえないことに不条理にも苛立ちを覚える幼児のような、どうしようもなさ。駄々をこね始める子供をあやすのは至難の業だった。

「ち、ち、違う。そうじゃないの。私はただ……」

そこまでだった。

狂気の空間はここに生成された。私は被害者。創生者は女の子。女の子は私の顔に置いていた頬をゆっくり横にずらすと、耳の穴に指を捻じ込んできた。

「あゝああああああ！?!?!」

悲鳴とも言えない喉を押しつぶすような声が私の中から発せられた。次の瞬間には喉が潰れ、空気がスースーと虚しい音を立てるだけ。

女の子の侵略は止まらない。耳奥に捻じ込んだ指は私の頭蓋の中で蠢いて顔面を引き裂こうと腕に力を入れていた。鼓膜はずたずたに引き裂かれて音を感じ取ることはもはや不可。それどころか段々と眼球付近に感覚が押し寄せてくるのを感じて、私は一層大きな悲鳴を上げた。

目の前で彼女は笑った。

まるで私の悲鳴を聞いて楽しんでいるかのように、痛みを楽しんでいるように。

女の子の腕は長かった。耳から侵入した、もう腕とは言えない何かは血みどろの体内を水泳でもしているようにどんどん泳いでいく。私の身体は既に動かない。指先一本に力を入れることすら許されず、眼球はもう無かった。どこへ行ってしまったのかと聞かれれば、きっと私の顔に付いているんじゃない？と曖昧な返事をするだろう。だってそれがある感覚すら私には無いのだから。

嗚呼。もう私の中身はなくなってしまったことだろう。五感を全て失ってしまった私にそれを確認する手段は既に無いが、そうなっ

てしまったことこそが一番の証拠になる。
今彼女の手は私のどこにあるんだろう。心臓かな、肺かな、脳みそかな、子宮かな。

無くなっちゃった。

何もかも無くなっちゃった。

あはは。無い、無い、無い、無い無い無いナイナイナイナイナイ
ナイナイナイ。

ナクナツチ。

ぐしゃり、と音を立てて世界は終わった。

私は殺された。

4、森野医院

朝の目覚めは普遍的にやってくるはずだったのだが、まず私には普遍的目覚めというものがどんなものなのかを思考する必要があるそうだった。

鳥のさえずりが目覚ましになるのか、はたまたカーテンの向こうから漏れる太陽のさんさんとした光によるものなのか、それともお隣さんがわざわざ起こしに来てくれるような漫画みたいなものなのか。

どれにも当てはまらない今日の私の目覚めは、携帯のアラームかと思いきや、メールの着信音での目覚めだった。お気に入りの曲が数秒間バイブレーターと共に鳴りだし、置いていた机の上で五月蠅い音を立てた。

「朝っぱらから、誰よ全く……」

しぶしぶ私は机の上に手を伸ばした。ベッドから勉強机までの距離は短い。手探りで二スガ塗ってあるだろう、つるつるした卓上を掌が滑る。携帯のごつごつした感触は……無い。

仕方なくベッドから身を起こして、ぼやける視界の中で射程距離を伸ばして手探りを再開した。そのうち、手に馴染んだ感覚を捉える。ピンク色の携帯を手にとって親指だけで画面を開いた。

『着信・灰田』と記されたものが三件ほど、メールが四件。全て同じ送信者からだった。

昨夜は携帯を確認しなかったため、昨日の夜中からメールと着信が溜まっていたようだ。とは言え、昨日は調子が幾分悪かった。たとえそれを確認したところで返信、もとい電話をしたかと言えば恐らくしなかっただろう。

……いや待て。

私は寝ぼけた頭で、ある重要なことに気が付いた。一気に覚醒を催すほどの事実は、若干の恐怖を私に呼び込んだ。

何故あの男が私の携帯番号とメールアドレスを知っているのだ。

無論、教えた覚えは記憶の片隅に散らばる残骸の欠片の一部分、なんていう遠い親戚の話をするような言葉を並べても見当たらない。間違いなく言った覚えはないし、携帯を見られたことすら無ければ、灰田は昨日知り合ったばかりの男なのだ。少し気味が悪い。

電話をかけ直して問いだしてやろうか迷ったが、せめてもの抵抗のつもりで無視を決め込むことにした。今日は土曜日で休日。小学校低学年までは午前授業があつたが、今では必要かも分からないゆとり教育とやらで完全休日。政府がお与えになったせつかくの休みをみすみすわけの分からない男のために費やす必要も無い。

私の1日は至って普通に始まる。洗顔、整髪といったこれこそ普遍的日常の象徴。普段はやらない朝シャンと呼ばれるものもやってみた。思いのほかすすきりする。癖になりそうだった。

朝食は簡単に、白米に味噌汁、加えて鮭でもあれば失われた日本の朝食に近づけたかもしれない。考えてみれば、日本の朝食は白米がベースだったはずなのに、多国籍文化だったか知らないが、いつからパンが普及し始めたのだろう。時折朝食に白米は当然だという意見を口にする、友人からは「えっ？」という反応が返ってくる時がある。私からすればそっちのほうが大分異常だ。

家族が私より数分遅れてリビングに降りてきた。奇異の目で私を一瞥すると、すぐに洗面所に入ってしまった。もはや声すらかけないのかと、自分のした奇行に改めて驚く。

やはりそれもあの灰田のせいだ。こんな朝早くに起こしてくれて全く迷惑だ。

洗面所から両親が戻ってきた。二人ともパジャマで、瞼を眠そうにこすっている。私の用意した朝食の前に座ると、私も同じくして

席に着いた。

「頂きます」

「頂きます」

「……」

まただった。

何故かは知らないが、一気に食欲が失せて、本来口にするべき挨拶を忘れた。

黙り込んだ私に、両親は不思議そうに聞いてきた。

「昨日からあなた少しおかしいんじゃない？何々、恋わずらい？」

お母さんがニヤニヤして乗り出してきた。昨日もそれは考えたが、有り得ない。というより有り得て欲しくない。

「ならなんなのよ。病気がしら」

「食欲が無いみたいだな。腹痛とかはあるか？」

「うつん。お腹の調子は……」

と言いかけて、考えてもみれば病気の可能性を何故考えなかったのかに気付いた。確かに腹痛は無いし、吐き気も間接痛も熱もないが、最近は病原菌渦巻く御時世だ。可能性を考えてみる価値はあるかもしれない。

「保険証渡すから、今から病院行ってきなさい。悪くなってからじゃ面倒だから」

そう言って酷く年期のありそうな保険証を手渡してきた。更新とかしてるんだろうか。

病院の名前は森野医院といって、名前の通り鬱蒼とした森林の中にある病院だ。空気が良いとかなんとかいい訳をつけて、院長が建設したらしい。ちなみにデザインも院長のものだとか。そのおかげか何か知らないが、安らぎの空間だが、そんなことで雑誌に取り上げられているくらい名の知れている病院でもある。

だが、問題が一つだけあった。

森の中というだけあって、その道のりが普通と比べると険しい。病人に対して安らぎの前の試練とでも言いたいのか、全く持って皮肉な場所に立てたものだと思う。

険しいというのは、一般的に見れば『道路が舗装されていない』ということと言うのだろうが、私にとっては何よりも『森』という存在自体が険しい。

優等生を気取りたい私にとって、最も自虐すべき弱点がある。それが『虫』だ。

六本足の昆虫だろうが、それ以外の害虫だろうが、あの小さなフォルムに収まるグロテスクさといったら、言葉にしたら四百字詰め原稿用紙十枚は書けそうなほど。無数の網状の眼球に葉脈のような羽といい、何故あんなにも醜い形に神様は想像してしまったのか、敵ながら同情したい。

そんな悪魔の形相を浮かべる未知の生命体が蠢く森林。季節は春先で、ちょうど活動を始めた虫たちが空をひらひらと舞っている頃だ。

ああもう、考えただけでも虫唾が走る。大体何なのだ、動物に分類すらされないくせして稀に毛が生えてはいるし、無駄に毒を持ち合わせているくせものはいるわ。地球上に無脊椎動物よりも速く誕生したからと言って調子に乗るのもいい加減にして欲しいものだ。世界で最も生物の種類と数が多いとされているとしても、私は屈す

るつもりは全くない。

大体虫を好いている人間の気が知れない。

ぶつぶつぶつぶ……。

頭の中で無限の愚痴をこぼしていると、目先に白い建物が現れた。清潔感漂うとは言い切れないツタの伸びた看板に『森野医院』と乱雑な筆書きで記されていた。この病院が名高いと言ってしまうのなら、大学病院には神でも住み着いていそうだ。

カランカランと引き戸の上に取り付けられた来客を知らせる鈴が鳴る。まるで風鈴のような音で、ここに来るといつも季節を間違えそうになる。

中はとんでもなく殺風景かつ自然的で、ログハウスと名付けるのが良いのではないだろうかと思う。だが、客足はちらほらと見え、伊達に雑誌で紹介されただけではないようだ。

「すみません、診察受けたいんですけど……」

「はい。では、ここに具体的な症状と質問にお答えいただいて、診察の時に持ってきてください。保険証はお持ちですか？」

私はお母さんから手渡されたそれを、看護師に渡した。その代わりに、下敷きと用紙をもらって青い椅子に座る。用紙には適当に『食欲がない、風邪っぽい』とだけ書いて、後のわけのわからないアンケートには全て『いいえ』で答えておく。

そのうち自分の名前が呼ばれた。

診察室に入ると、優しそうな女性の医師が白衣を着て、椅子をくるくると回している。カルテを見ているようだったが、私の書いた用紙に別段特筆すべき点はない。見るだけ無駄ですよと言いたくなつたが、それを喉の奥で堪えた。

診察は簡単に、聴診器を当てられて喉の奥に棒を突っ込まれただけだ。……なんだか言っていて変に思える。

喉の赤さと心臓のリズムで一体何が分かるのだろうかと思うが、

医師の判断には抵抗できないのが日本人の性だ。私もいちいち路地をうろつく不良に声をかけるほど勇気のある人間じゃない。

「多分風邪ですね。春先は体調を崩しやすいですし」

定番になった言葉だ。最近はこのが有名になりすぎたせいで、何かと理由をつける医者が多いが、この病院はまだ典型的タイプのようだ。多分、とか付け加えている点は保険なのだろうか。

「食欲が本当に全く湧かないんですけど、それはどうしたらいいんでしょうか？」

「風邪のせいで胃が弱ってるだけだと思いますよ。一応整腸薬と風邪薬出しておきますね」

診察室を出ると、昼間に差し掛かってきたせいかご老体の方々がちらほらと姿を現していた。これはどうやら嫌な病気をいただくことになる前に撤退したほうが良さそうである。

薬局と病院が一貫してあるこの施設で、三種類ほどの錠剤の説明を軽く受け流しながら聞き、私はさっさと帰宅することにした。

5、恐怖消去・痛覚残留

邪魔なものが目の前に立ち塞がったときに、私はどうやってそれを掻い潜ろうかいつも悩む。それは物質的なものでもあるけれど、精神的なものでもある。

例えば、今私の目の前にここにこと腹の立つ笑みを浮かべて待ち伏せていた男、灰田とか。

ろくに舗装もされていない林道を抜けて、日差しが暑いアスファルトの上に数時間ぶりにたった私を歓迎したのは他でもない彼だった。四十キロ制限の標識の下で、春先の暑い日指しの下で、優雅にハンカチで額を拭っていたところに遭遇したものだから私も運が悪い。彼に対する人間的評価を更に落としてしまったようだった。

森野医院からの帰りである私のことを知っているのは家族以外にはいない。無論、途中で顔見知りの近所のおばさんと出くわした記憶が無いかと聞かれれば曖昧な返答になるが、まさか刑事ばりの捜査能力をこの男が駆使したとは思えない。やはり、彼は普遍的ではなかった。

「……何の用よ」

あからさまに嫌そうな顔を仕向けて、私は灰田にそう問うた。

「そんな顔をしないで欲しいね。僕は別にナンパをしにきたわけじゃない」

「分かっているわ。で、用件は何」

灰田はため息をついて、ハンカチをポケットにしまう。今日の服装は当然制服などではなく、もっと質素な服装かと予想していた私の期待を大きく裏切った格好だった。腰周辺にはチャラチャラした

装飾に、ナウいなんて死語を吐かされそうなほどのセンスで構成された上着。春の日の下に良く似合う緑色のカーティガンを羽織っていた。

靴はそれに対して不遇な下駄のようなサンダル。ラフと言えばラフな格好だった。

ふと自分の服装を見つめる。赤いワンピースなど着る勇氣も無いが、流石にパジャマ同然の服装で外に出たのはいささか間違いに思えてきた。

「君、森野医院に診療されに行つたのかい？」

「そうよ。見ての通り」

気だるげに私は貰つてきた薬の袋を掲げる。灰田は興味無さそうに一瞥して、すぐに私に視線を戻した。

「ここは春先は虫が多いだろう？僕も何度か通つたんだけど、少しあれだけは願ひ下げだね。君もそう思わないかい？」

「確かに虫は嫌いだよ。今回は出くわさなかったから別に良かったけど、次こんな状況があつたら物凄い形相の私を目撃してしまうかもしれないわね」

「それは面白そうだな。是非とも次回森野医院に通うときは僕に連絡をよこしてくれ。例えば火の中森の中でも駆けつけるから」

「森野医院にいたら既に森の中よ。全く、あなた見かけによらず変態ね」

すると灰田は微笑して、そうみたいだね、と意外にも肯定してみた。私はやはり気味が悪く、その灰色の髪の毛を見ないように勤めながら彼を横切つて歩道を歩き始めた。

胸糞悪い。皮肉を言つたつもりが全くそれに気付いていないようだった。私の後を飄々と余裕の笑みで付いて来る。本当にストーカ

「なんじゃないかと疑い始めていも良い頃だと思うが、私はそれ以上の何かを感じ取っていたため、程度の低い小学生のような思考は消し去ることにしていた。」

国道とはかけ離れたこの道路は一本の別れ道も無く続いている。車道の両端には白いガードレールがあり、その更に両端には延々と続く森林。伐採される計画は立てられていないようだが、山でもないこの森が一体どの様にして出来たのがは不明だ。噂ではやはり伐採のための養殖森林だという話もあるが、それにしてもあまりにも殺伐としすぎている。カブトムシでも取りに行ったら確かにいそうだが、野鳥観察には向かない、とこんな感じだ。そんな最中を歩いていた私の横に、灰田が追いついてきた。

「虫が嫌いな人って、何で虫が嫌いなんだろう？」

唐突にそう聞いてきたものだから、私は苦い表情をして虫の気持ち悪さを少しだけ語ってやった。ある意味生き生きとした私の愚痴のような文句を灰田は一語一句逃さず聞いている。

「つまり、簡単に言えば気持ちが悪いのよ。眼といい羽といい、何もかもがね」

はあ、と一度大きくため息をついた。

「じゃあもし、もしもだ、その気持ち悪いと感じる要因が無くなったら君は虫を好きになれるかい？」

どういうことだろうかと思考を巡らす。虫が気持ち悪い要因と言えば、語った中でもあったが羽、眼、その他もろもろの形や手触り全てが要因だ。それが無くなることは、既に虫であることを止めているのではないだろうか。

「蜘蛛の足は八本だ。それが六本になったところで気持ち悪さは消えない。かと言って二本になったって蜘蛛は蜘蛛のままさ。僕が言いたいのはそういうことじゃない。つまり、君が虫に対して恐怖というものを覚えなくなったらどうだろうという話さ」

一瞬理解が出来なかった。私が右斜め上を向いて考えていると、灰田がそんな私を見通してふっ、と笑みを漏らした。私よりも一歩前に出て、その瞳を細めていた。まるでこれから悪戯を起こそうとする子悪魔のように微笑んで。

「君は神経異常の患者が、どんな気持ちで生活しているのか理解できるかい？」

いつもの通り状況に無頓着で、私の方を見てそう言う。

「神経異常って、あの痛覚とかが無くなるやつ？」

「そうだね。歯医者で麻酔を打たれた状態が永遠に続いている状態と言ったほうが良いかな」

「辛いわね、それは」

正直な感想を簡潔に私は述べた。

しかし、それに灰田は目を見開いた。

鬼の形相というのは常世にて狂気と殺気と禍々しい妖気を含んだことを言うのだとしたら、彼のこれは何なのだろうか。

私は胸の中心を細く、頑丈な指で引きちぎられたような激しい苦しみを覚えた。自然と息が荒くなり、額から汗が滲み出る。足が杭で打たれたように動かない。膝に打たれたのか、屈伸運動すらままならず、私の目は灰田にそれこそ釘付けになっていた。

正直言って、怖かった。その瞬間だけ世界が凍りついていたに違

いない。鳥のさえずりは聞こえず、道路を走る車の排気ガスなど路傍の石程度にも思わない。

舞台上上がったのは、主人公の灰田と、私。

「神経異常、痛覚が無くなること。感覚が無くなること。それは辛いこと、面白い答えじゃないか。そうさ、辛いに決まっている。人としての一部を失うのだから、辛いに決まっている」

何度も何度も反芻するように灰田は私の目を見てつぶやく。それは辛いことだと、辛いことだと、辛いことだと、何度も言い聞かせる。

「けれどもね、僕はこう思うんだ。痛覚を失うことは辛いことと同じ時に、嬉しいことでもあるんだ」

「……は？」

思わず私からそんな間抜けな声が漏れた。

今やあの壊れた人形のような目は灰田から消え去り、いつもの無頓着な彼に戻っていた。

「痛いことが無くなるということは、『痛みを伴う恐怖』を克服することに繋がるんだ。先端恐怖症の人間がいたとして、そいつに僕はナイフを突き立てる。当然怯えるだろうし、僕はだからと言って止める気も無く、その人間を刺す。きっと人間は気絶するだろうね。そして目覚めた時に僕を叱る。殴る。蹴る。けれども僕はまたナイフを突き立てるんだ。そうしているうちに、きっと人間は刺される恐怖から抜け出すことが出来る。だって、痛みを感じないんだから」

理屈は通っているのだろうと思う。先端恐怖症の多くは『刺され

てしまう』という無限の妄想から恐怖を抱くパターンが多いという。程度は上下様々だが、鳥肌が立つ程度の人もいれば、震える手足に数分を要する重病な人もいる。

刺されてしまうということは、『痛み』や『死』に直結する。つまり、その一点である痛みを取り除けば緩和されるということだ。それを刺して何度も認識させ、自然とそう思い込むまでに凶行を繰り返す。痛みがないと。

だがそれは『被害者』である当本人以外には推測すべき事象ではないと私は思う。例えば、いじめや自殺の小説を書く人間が増えているが、その作者がそういった体験をしたことが無いのに想像だけで書いていては所詮は程度が知れる。物事を体験からではなく、推測で語るにはあまりに大きい話題だと思った。

「君は今、それは僕の推測でしかないと思ったろう？そうさ、その通りさ。僕のような何ら不自由なく生きている憎たらしいホモサピエンスなんぞに病気の重さは語れない。けれど…それは単なる比喩表現だ」

思考を読まれたことに気味悪さを覚えながら、この男がやはりただものではないことを再認する。私は見えない何かに磔にされた手足をやつとのこと動かし、手の平を閉じ開きして感覚を取り戻した。多少痙攣のようなものを繰り返した指先が氷から溶けた液体のように動きが滑らかになる。

「僕が言いたかったのは、『恐怖心』というものが無くなることが果たして辛いのか幸せなのかということだよ。だって、怖いものが無いなんてとても嬉しいことだろう？けれども神経異常の人に対して『辛いだろっね』と僕は言うんだ。痛みなんていう不動の恐怖を克服出来るのにだよ？知らないうちに傷ついているから可哀想？そんなものは不注意でしかない。僕は思うんだ、感覚が無くなるこ

とは人にとって辛いのかもしれないけれど、本質的には別にどうでもいいことなんだ」

「……どこがどうでもいいのよ。怪我をしても気付かないだなんて危ないじゃない。ふとした拍子に事故故になることだって有り得るわ。あなたはそういう点楽観的すぎね」

「楽観的？違うよそれは。僕は真実を語っているだけだ。言っただろう、人間的にはそれはとても不自由で辛いんだ。それは僕も理解している。けれどもね、『痛みを感じない』という点においてはそれはとても嬉しいことなんだ。痛みを伴ってこそ人は成長するものだというけれどもあれは嘘だ。鉄は打って固まるかもしれないけど、人の心と肉体は打っても固まらない。弱い者は弱いまま。殴られて強くなれるわけじゃないし、痛いものは痛いまま。それを受け付けなくなるといことは、既に人越とも言いかもしれない。痛みを知らずに育ってきて何が悪い。痛みを知ることが出来なくなると何の不都合が生まれる。痛覚なんてものは、いらないんだよ」

巻くしたてる上げるように言い切り、それでも灰田は凜とした態度で私の横にいる。理論というものを三段ほど飛び越した灰田の論理に私は半ば凍りついていた。

彼の意見を鵜呑みにすることは不可能だったが、理解できなくも無い。人間の危機管理能力の一つであること以上に確かに痛覚の意味合いは無い。かと言っていらないわけもない。こればかりは飛躍しすぎていると私は思いつつも、彼の言うことに深く考え込まずにはいられなかった。

「どちらにせよ、僕ら人間には痛覚がある。痛みを恐れる恐怖心がある。虫を見て怖がる恐怖心がある。けれども」

瞬間、再び世界が凍りついた。

灰田は目を見開き、まるで面白い玩具でも見つけたような童心に

溢れかえった表情を見せ、私の傍によつて肩の上に手を滑らせた。その感覚が冷たく、私は思わず冷水を被ったときのような身震いをしてしまった。

一つにこりと笑みを漏らすと、彼は視線を地面に落として指を刺す。私はそれに誘導されるようにして、何かあるのか予想もついていないのに恐る恐る首を下に向けた。灰色のアスファルト、ガードレールと森林の木陰で冷たくなったその上に、黒っぽい何かが蠢いていた。六本足でじたばたと羽をうるさく羽ばたかせてのた打ち回る姿は滑稽。

私は、反射的に踏み潰した。

ぐちゃ。

ぐちゃ、ぐちゃ。

グチャグチャグチャグチャグチャグチャ！！

と、私の中だけで音を立てて潰す。外界の灰田から見れば、それはほんの些細な出来事。私にとつてもそれはほんの些細な出来事。足の裏に何が付こうが、別に何だつて良かった。

「けれども君は恐怖しない。は、ははっ。踏み潰してしまったよ、これは笑える、笑えるよ。命の尊さなんて頭の片隅に微塵も無いんだね？その足の裏に何がへばり付いているのか雑草ほどの興味も持たないんだろう？そして君は言っただ……」

私は灰田を見た。大口を開けて笑っている。その歯を砕いて、綺麗な髪の毛を塗り取って、澄んだ声が出る喉を潰して、輝く碧眼を抉り取って、流れるような四肢を引きちぎ。

視界がブラックアウトした。脳みその裏側がちりつ、と焼けたように熱くなったかと思えば、視界が暗闇に支配されて私には何も見えなくなった。

けれども口が動いた。彼と同じように、口が動いた。

『アナタハダアレ?』

私の頭蓋は爆炎に包まれ、消え去った。

6、異変・天才考察（前書き）

長らく更新してませんでした。

今回の話は少し読みにくいかもしれませんが、ご注意ください。

6、異変・天才考察

そこにある種の天才がいたとしよう。

学者でも料理人でも運動でも何でもいい。『俗に天才と呼ばれる』人物がいたとしよう。

天才とは常に万人の尊敬と憧憬の対象であり、そうであれと望まれるものでもある。それ故に物語の中では天才というのはその才能故の苦勞を強いられていることが多いが、それは『傍観者』からすれば関係の無いこと極まりない。他人の苦勞は自分には分からず、自分の苦勞は他人には理解しがたい。当然の理論だ。

それを目指す人間が多々いただろう。自分もああいう風になってみたい、ああいうふうに尊敬のまなざしを向けられたい、と。子が親を目指すのとは根本的に次元が違うと分かっているながら努力をし、そしてふと気付いた時には諦めているものだ。

憧憬とは常に『憧れ』でしかなく、それを『目指してみよう』とは思っても『再現する』とはまた異なるものだ。

例えば年間に五十本のホームランを打つ選手がいたとして、ある男の子がそれをキラキラとした眼差しで、ほんとうに無垢で純粹な気持ちでそれを目指すし始める。だが、努力をして気付くことがある。五十本のホームランとは既に『天才』の領域であって、自分が目指すものではないことに。再現できる範囲のものではないことに。すると、男の子は次いで四十本のホームランを打とうと頑張り始める。それが普通であり、『憧れ』が『現実』になどなるわけがないという先入観をとくに超えた概念が人間にはあった。

だが、それが全ての人間に適応される思考なのであれば僕は彼女に出会わなかっただろう。

彼女はあまりに異端だった。

異端とはつまり常軌を脱してしまったことであり、異端にとっての異端は普通でしかない。そのどちらからも異端とされる彼女は、

紛れも無く異端。

彼女は常に完璧であろうとする。それは、『憧憬』を超え、『夢』を超え、『未来』として見据えるほどに。しかし、それほどに目指すものがありながら、彼女は自らの欠点を妥協する。それは仕方の無いことだと頭の隅に追いやる。その数がどれほど多かるうが、出来ないことは出来ない妥協する。

つまり彼女は、『出来ることだけを完璧にこなし、それ以外を排除する』思考の持ち主なのだ。一見してそれが普通のように思えなくも無いが、そこは僕にも説明し難い微妙な境界線が生じる。

「例えば、彼女は料理が得意だでしょう。すると彼女はある中国の有名料理人のような料理が作りたいと言いつ出すんだ。けれども、高校やそこらの歳でそれを極めることなんて出来るわけが無い。彼女は天才ではないのだから。すると彼女は諦める。それは自分には成し得ない領域なのだと無意識に理解し、『自我』『思考』というものから完全に追いやる事が出来る。まるで、中華料理なんてものは最初から無いというように」

それが顕著に現れたのが先の『虫に対する恐怖の無意識的完全疎外』だ。

しかしそれに納得できると同時に僕は思う。

「それは即ち諦めではないのだろうか？」

一体何度この問答を続けたのか分からない。

分からないほど続けた問答に僕は、妥協という答えを出した。

妥協とは、つまるところ『そうなってしまう』ことへの諦めでもあるが、それはイコールして『何もしない』というにはならない。

だから僕は彼女の願いをかなえることにした。その無意識下にある願望を引きずり出すようにして願いを現実へと変える。

人としての完璧とは、普遍的なことであり、人でない故に完璧なことは、既に人越という。彼女の完璧はあまりに人間らしすぎるから、その人間らしさはあまりに異形だから、『本物の完璧』を彼女の中で再現する。

それが僕こと灰田純一がここに在る理由であり、『セルフディストラクション 存在の暴力』を襲名した所以でもある。

その日の目覚めは二度目であつたが、こうまで普遍的な目覚めで無かつた日常は二度と来ないだろうと私は思う。メールの着信音で目覚めるなんてことは有り得る話であるが、私の目の前にこの男がいた、というこの状況は決して有り得てはならなかつた。

一体全体どういつた経過があつてこうなつたのか、記憶は定かではないが、『確か熱中症が何かで倒れた』はずである。確かに記憶にある炎天下に長時間居座ればそれも捨てた可能性ではないが、目の前にこの男がいると実は手刀で昏倒させられたのではないだろうが無意味に誇大な想像をしてしまうものである。

知らぬ間に私は自分の部屋に戻っていた。恐らく状況から察するにこの男がここまで連れて帰ってきてくれたのだろうが、だからと言って私の枕元で嫌な笑みを浮かべるのはよして欲しいと思った。

自分の額に手を置くと、ほんのりと熱が伝わってくる。本格的に風邪を引いたらしい。

そこで初めて灰田は私が起きたことに気付いたのか、どこから持ってきたのか、私の額の上に濡れタオルを置いた。

「現在時刻は五時半といったところだ。別に疲労が溜まっていたわけじゃないだろうに、随分と長く寝ていたね」

ひんやりとした感覚が額から身体全体に伝わっていく。ちらりと窓の外を見てみれば、虚ろな曙光が世界の八割を占めていた。森野医院に出かけた時間とは全く相容れない光景だ。冗談ではない、危うく半日を惰眠で過ごすところであった。寝すぎたせいか、頭の奥が酷く痛かった。

私は枕元に手を置いて、ゆっくりと立ち上がろうとする。しかし、それを灰田が『待った』の姿勢を取ってそれを制した。

「君は少々一おかしくなっている（……………）ようだからまだ休んでいたほうが良い。君に肩入れするつもりなんて微塵も無かったけど、流石に目の前で倒れられたら適わないからね」

「嫌な表現使うのね。……それより、どうやって家に入ったの？ 知らぬ男を家に入れるほど私の家族は警戒心の無い人たちじゃないと思ってただけだ」

「ああ何、気にしないで良い。彼らは僕に『また明日にでも調子を見に来てくれると嬉しい』と言った。それを僕がただ単に『ではまた明日』と言ってここにいます。それだけのことさ」

「つまり不法侵入？」

「……さあ、どうだろうね」

上手くはぐらかしたつもりなのだろうか、灰田は黄昏に向けておぼつかない視線を送った。やはりどうにも掴めない男であると改め

て認識する。彼の銀色、いや灰色の髪の毛は何度見ても異質で、それでいて私の気分を激しく揺さぶる。彼の瞳はまるで、他人の中に入り込んで内側からドアを壊そうというくらいの勢いでノックする暴力のように静かで痛かった。

「……………ところで、天才とは、一体何だと思う？」
「……………は？」

なんだか数時間前にも同じような反応をした気がする。が、今回も灰田は付け入る隙など蟻の巣の入り口ほども持ち合わせていない。いたって真剣にそう私に問うた。

しかしあまりに唐突すぎるそれに私は思わず問い返した。

「いきなり何よ。どこの悟り開いたのよ全く……………」

「なあに、君が寝ている時に少し考えたくなったのさ。君も、優等生を気取ってるのならば考えたことがないわけじゃあるまい？」

その発言には流石の私もイラつときた。灰田を睨みつける。

「気取ってるって……………何様のつもりよ、貴方。最近付回してきたと思ったら、ちょっと図々しいんじゃない？ ストーカーとか何とか考えたことあるけど、貴方それより大分悪質な気がしてならないんだけど」

だがその炯眼けいがんすらも彼はもろともしない。いや、前提として間違っているのだらう。彼は既に私が睨みつけていることを知らない。眼中にすら入ってなくせして、こうまでに気にかけてくるこの矛盾が腹立たしい。なのに彼は笑う、妖しく笑みを漏らす。

「くくく。それはそうだ。君が僕を不快に思うのは当然の理。自分

テリトリー
イレギュラー
の領域の中に不適合因子が入りこめば嫌悪する。そんなのは熱帯魚
だって同じさ。まあ最も彼らの場合は、嫌悪ではすまなそうだが」

「共食い、もとい油でもぶち込んだら一気に死ぬわね」

「そうやって危険な、本当に君とは思えないその発言が楽しい
ね。君にとつて僕が油かどうかと聞かれればそれは違うね。僕は君
にとつて『毒』よくないものであることに間違いはないと思うけれど、それは決
して死に繋がるとは限らない。僕もこの世に生を受けてから結構経
つけれど、いくらなんでもこんな状況で君を殺す計画を虎視眈々と
狙えるほど僕も狂った人間じゃない。……いや、狂ったって意
味で言えば、それ以上か」

そうして再び妙に濡れた笑い声を漏らす。

まるで 自分が狂っているのを、心底楽しんでるように思え
る。あの壊れたフランス人形ばりの威圧感と恐怖感のある瞳を輝か
せることは無いが、何故だか、そう、傀儡子に操られる傀儡子。器
を操っているくせして、その器に翻弄されているかのような不安定
で、奇怪で、奇妙な男。

昨日までとはまるで違う灰田純一が、そこには存在していたよう
に思える。それが何故なのかは分からない。私が彼のいる日々を過
ごした中で、何かおかしい点があっただろうか。

いや、違えてはならない。

彼との日々を数えるな。彼を数えなければならぬ。

常に狂い、常に晒い、常に常でいた。
だが。

「いやなんだ。衰弱している状態の君にこんな訳の分からないこと
を言うのも何だけど、僕は人間なんて低俗な生き物に分類されるべ
き存在じゃないんだ。ん、とは言え決してこの存在が嫌いなわけ
ではないんだ。彼らには十分に楽しませてもらっているし、無論だけ
ど僕は君が気になっっているからここにいます。それは間違いない。ま

あ、果たして君が『白^{グリーン}』なのか『黒^{ブラック}』なのかはまだ定かじゃないんだけど、くくく、まあ僕にとってはどちらでも良い話だ。それよりも、僕の問いに答えてくれないか？君にとって天才とは何だ？」

だが、そこにいたのは『常が常でない』ものである。あれはきつと『化け物』だ。何かが、何かがずれ始めているかつて『人間であったもの』に恐らく等しい。そして同じくして、自分を化け物か何かと勘違いしている真正正銘、疑いのような無い馬鹿だ。

なら、正面真っ向から私が、『優等生』である私が叩いて見せようじゃない。

「……天才っていうのはね……生まれつき備わっている、人より飛びぬけて良質な、それでいて完全な能力のことよ」

下らない、自分で言っているにも実に下らない答え。思わずくすりと笑ってしまった。

だがそうして私が微笑を浮かべたのと真逆に、灰田は心底面白そうに口元を吊り上げた。……これだ、これが灰田純一の真であり嘘の姿。

胸糞悪いが、どうやら私も普通ではないらしい。この男に楯突くなんて、あまりに無謀だ。このまま殺されるのかもしれないと思ってしまう。

「ああ、実に君らしい。実に『優等生^{きみ}』らしい答えだ。そう、人より飛びぬけて良質で、完璧な能力のこと。補足を付け加えるならば、そのさまを実行できる人間のことも言うのだけれどね」

「単純な補足ね。貴方の事だから、もっと不可解なことを言うのかと思っただわ」

だが灰田はその口元をゆっくりと一本の線に戻し、普段、普段と

言つて良いのか分らないが、優しそうな表情に戻つた。

「なあに、僕とて人間に分類されるべき人間じゃないと言つたが、それは即ち僕も人間なのさ。ああ、物凄く残念で、非常に喜ぶべきことにね。つまり僕も完璧じゃないし、人間の枠外に位置できるほど壊れてもいない。故に僕にとつての天才も、君の意味するところと同じ場所にある。ふうん、そうかそうか。……で、君は天才に憧憬を抱いているのかい？」

「勿論。私はあんたみたいな奴とは違つて、常に上を目指しているもの」

その答えに満足したのか、灰田はさほど私に興味も無くしたかのように視線を外して、今あつた出来事を全て帳消しにするような言葉をほざいた。

「風邪は万病の元さ。早めに治すと良いよ」

「そう思つてくれているなら、絶対に明日来ないでね。気分が悪くなるわ」

「了解した。明後日学校で会おうじゃないか。また、その日まで」
「ええ、本当は二度と会いたくないけれどね」

それに言葉を返すことも無く、灰田はそこから自然に出て行つた。ガタンツ、と小さく音を立てて扉が閉まる。知らぬ間に私の額に寄せられていた濡れタオルは熱ですっかり温められてしまつていた。ちょうどベッドの横に水桶があつてので、それに私はタオルをつける。

三十七 弱ほどしかないだろうその熱は、きつと明後日には治っている。それが今回のことで、最も悔やまれた事項だった。

7、因果マシソガン（前書き）

少しコメディタイプの話です。

7、因果マシンガン

世界には今まで使えていたものが突如、本当に突然に使えなくなることがある。

筆も使っていれば段々と毛先が解れてくるし、機械も駆使していればいつかは壊れる。故にこの世界には壊れない絶対のものなどほとんど無いに等しく、それは人間の身体も同じである。身体、脳の細胞が死んでいつていつかは動けなくなる。人間は機械のような身体だと比喻することが多いが、実際にその通りだと思う。

壊れない人間など人間に不等号である。

壊れる人間こそ人間に等号である。

なら、彼はどうだろうか。

灰田純一。彼は完全に壊れている。人間らしい部分なんて所詮言語を話す、DNAがそれっぽいくらいの共通点しか見当たらないだろう。

存在自体が暴力のようで、器は人形、心は灰色。

……と、ここまで考えたところで一気に馬鹿らしくなってきた。

こんな戯言みたいな思考は私には似合わない。首を振って、もやもやとした頭の中を掻き消した。

今日は正真正銘、何の偽りも無く日曜日であることに語弊は無い。昨日は熱で一日中……と言っても半日だが、灰田があの後私の部屋に来ていたことを親に知られることも無く、ベッドの中で読書をしてながら過ごしていた。

そのかいあってか、朝一番で熱を測ると三十六 台まできつちりと下がっていた。関節を回してみるが、違和感はない。快調のようだった。

と、私がベッドから出ようとしたときだった。

ピンポン。

家のインターホンが無機質な呼び鈴を鳴らす。今日は日曜日であ

るが、両親は二人とも朝早くから仕事に出かけている。なんともハードワークでお疲れさまであるが、休日も潰す親もそう多くは無いだろう。

「……たく、朝っぱらから何なのよ……」

ここ一週間はきつと早朝の運が最悪なのだろうと思った。テレビをつけて確認してやろうかと思ったが、とりあえずは玄関に下りることにした。

「はいはい、どちら様？」

気だるげに扉を開けた、その瞬間だった。

「先輩っ！ おはようございまっす！」

「……」

……誰？

目の前に現れた少女、少女と言っていいだろう彼女は、髪本来の艶を失わない程度に染められた茶髪に、後ろに一つ結びをするストリートポニーテール。服装は随分とラフなワンピースを着てきている。手には小さなハンドバッグが握られており、今からデートにでも出かけるんじゃないかと思わせる風貌だった。

そしてどうしてか、彼女とはどこかで顔合わせをした記憶がある。先輩、と呼ばれたからには恐らく後輩なのだろうが、『先輩』と私を呼ぶ後輩は第一学年の数と等しいほどにいる。顔合わせをしたことに間違いは無さそうだが、覚えているはずも無かった。

「ええっと、どちらさま？」

「忘れちゃったんですかぁ？ ほらほら、金曜日に購買部でサンド

ウィッチを分けて貰った貧困民ですよ。因果ですよ因果。原因と結果です」

「……あー」

なんだか靄のかかっていた部分が取れかかっている。金曜日と言えば、私が灰田と始めて出くわした日であるが、そのきっかけがこの少女ではなかっただろうか。第一印象、五月蠅い。

「あ、思い出してくれました？ いやですねー、あたしも自分のことは結構薄々感じてたんですよ、影薄いつて。別に前髪垂らしてるわけでも背後霊背負ってるわけでもないのにあんまり他人から気にされないって悲しいと思いませんか？ あ、だからと言って友達少ないわけじゃないんですよこれが。しかも今回は先輩ちゃんとあたしのこと覚えてくれていたみたいだし、万事解決ですよ。因果ですよ因果」

訂正は無い、第一印象は五月蠅いで不動である。

それもまだ彼女は止まらない。朝日と同じく眩しい笑顔を輝かせながら言葉は続く。

「いやね、あたしもこの『因果ですよ因果』って毎回言ってるのも自分でうざいなあとか思ってるんですけどね、こう、『運命ですよ運命』とかちよーつとばかり乙女チックな台詞ってあたし的にあんまり合わないんですよ。ほら、白馬の王子様とか存在するわけ無いじゃないですかー。ああいや、そりゃあヨーロッパにでも旅立って白馬飼ってる人にプロポーズでもされたなら別の話ですけどねー。やっぱそれも因果じゃないですか」

訂正しよう。五月蠅いとは五月の蠅が特にうるさいことから発足した言葉であるならば、この子を五月蠅いと呼ぶには語弊がある。

第一印象はマシンガンに決定した。以前遭遇した時も静かな子ではなかったが、まさかここまで舌が回る子だとは思ってもよらなかった。扇風機顔負けである。

「ま、待つて貴女。少し落ち着きなさい……。まず、名前を名乗って」

すると、彼女は私の注文が何故か意外だったのか、一瞬呆けてからニコツと笑って答えた。

「白椿菊（はくしんきく）乃（の）つていうんですよあたし。マジに不吉だと思いませんか？ この名前。椿は首落ちでお見舞いにタブーだし、菊は習慣的に葬式にタブーですよこれ。因果ですよ因果。椿あるところに菊ありつて、いやまあこれはあたしが勝手に考えたんですけどね」

「そんな豆知識はどうでもいいんだけど、結局私の家に何をしに着たのかを教えて頂戴。あ、その前に何で私の家を知ってるわけ？」

「家ですかあ？ そりゃあの日にストーキン……じゃなかった。お礼を言おうと思ってこっさり付け回してたんですよ」

「貴女、それ訂正する意味が無いわ」

「おうつと！ 失態ですね。いやね、あたしも今巷で流行のケーワイでしたっけ？ 空気読めない人間にはなりたくなくてですね、先輩が親しげに男性の方と歩いてたもんですから自重させていただいたんですよ」

その言葉に私は顔をしかめた。あの豪雨の放課後、灰田と共に帰宅していたところをこの白椿さんに見られたらしい。どうやら深読みはしていないみたいだが、あまり私としては放っておける事態でもなかった。

放っておける、というのは決して『灰田と共に見られた事』では

ない。問題は、

「貴女、あの男のこと知ってる？」

この点一つに限られる。

「あはは、嫌味ですか先輩？ あんなやつのこと、知ってるわけ無いじゃないですか」

「……そう」

知らないらしい。刹那ではあるが、表情に笑みが消えたのは気のせいであろう。というよりも、何か違和感を感じる。

嫌味？ 嫌味って何だろうか。

「というよりも何でそんな質問を？ あれって先輩の彼氏じゃないんですかー？」

「あれが彼氏だったら私は今頃棺桶の中よ。貴女も見たならなんとなく感じなかった？ 彼、ちょっとおかしいわ」

「いやー、あたし千里眼っていうんですか？ そういう因果に關係無いことは全く分かりますよ。『見る』っていう原因に対して『理解する』っていう結論は結びつきますけど、『判断する』とはまた別物ですからねー。奇跡とか信じない性質ですし、あの灰色の方と面識があるならまだしも遠くから見てるだけで人を判断できたら今頃あたしは聖徳太子ですよー」

「聖徳太子は別に千里眼なんて持ってなかったと思うけど……」

頭が良いのか悪いのか分からない発言を良くする子だと思った。

しかしこの白椿菊乃という少女、果たして『因果』という言葉の意味をしっかりと理解しているのか悩ましい。確かに千里眼は因果とは全く關係の無い超能力と称されるような事象であるが、結果的に

は『千里眼を使えば見える』というしつかりとした因果の元に成り立っているものであったりもする。一見して卑怯な理論に見えないことも無い。

そもそも、因果律、つまり原因と結果の法則は、ある結果の前には必ず原因があるというが、閉鎖性の成されていない因果律など因果と呼ぶにはあまりに不確定要素が多すぎた。彼女の言ったものを例とすれば、『白馬の王子様』が現れた原因は『ヨーロッパでプロポーズを受けたから』ということになるのだろうけれど、それは別に『留学生だったから』とか『過去に馬の飼育場で働いたことがある』なんてアホらしい原因でも構わないし、むしろ言ってしまうならば『偶然』なんていうのも有り得る。

因果なんて格好の良い言葉ではあるが、実際のところあまりにも不安定な基盤なのだ。

「ああ先輩、そんなことよりもですね、今日はお礼に参りましたんですよ」

……と、閑話休題、といったところだろう。白椿さんは私の手を取ってぶんぶんと上下に振る。早朝から元気なことこの上ない。目覚まし時計には少々鬱陶しいくらいだ。

「そうだったわね。で、何かしてくれるの？」

すると彼女は満面の笑みでこう答えた。

「朝マック行きましょう、朝マック！」

「……え？」

元気系と健康優良児は同等ではないことをこの朝知った。

8、朝食はマクドナルドで

朝マツクする？ という広告がテレビで何度か見たことがあるが、そもそも朝食を外食で済ませるといふ経験をするこゝと自体学生には珍しいのではないだろうかと思う。あれは言つても社会人、朝食を取る暇の無い大人に手軽に食べられますよ、というサービス精神からであつて、決して学生が好んで取るような朝食の方法ではない。

とは言え、意外なことに朝のマクドナルドにはやはり社会人ではあるが人が多かつた。席を取つて朝食を取る人はほとんど反比例だつたが、まだ濁りきつていない空気の中でハンバーガーというのも中々に良いものだった。

私は簡単に百円程度で済むハンバーガーに加えて軽いオレソジジユースを注文し、白椿さんは暴飲暴食とも言える量を頼んでいた。強いて挙げていくなら、チーズバーガー×2、テリヤキマツクバーガー、アイステイー、ジンジャエール、ポテトLサイズ、そして律儀なことにサラダも忘れていない。見ているこつちが吐き気を催す量である。これは流石に夕食でも多い。

「そ、そんなに頼んで全部食べきれなの？」

彼女は目をキラキラさせて頷く。

「余裕ですよこんなの。あたしがマツクに着たらこれを注文！ 因果ですよ因果」

「そう……。太るわよ？」

「大丈夫、あたしの胃袋は基本的に全ての食物が別腹別腹、まるでゴミの分別みたいですけどそんな感じに果てしない銀河系が広がつてゐるんですよこれが。俺の胃袋は宇宙だ、なんて屁でもないですよ」「なら本物の胃袋の中には何が入るのよ」

「酸素ですね」

それは肺にだろうと突っ込みたかったが、恐らく不毛に終わるだろうと推測してやめた。

白椿さんがチーズバーガー一個目に口をつけながら聞いてきた。

「それにしても先輩も貧欲ですよー。折角あたしが奢りますよーって言ってるのに、そんな二品だけなんて。あ、今からアイスクリーム一品追加頼んでおきましょうか？ いや太るのを懸念しているなら大丈夫ですって。先輩スタイル良いですし、運動すれば万事解決ですよ。ていうか毎朝ランニングとかしちゃってますよねその肉体美。因果ですね因果」

食べている時すらも口の減らない娘だった。

私も話しては食が進まない、ハンバーガーに口をつける。ジャンクフードはあまり好きな類ではないが、味が良いというのは保証できる。最近はカップラーメンも様々な味が出てきて飽きを回避したらしく、米国のジャンクフード文化は確実に日本に引き継がれているようだ。

私が口をつけるのと同時に、白椿さんの手からチーズバーガーの姿が消え、代わりにストローを吸っていた。左手にはテリヤキがある。口がべたべたになるのを怖がっているのか、どこから食べようか迷っているように見える。

「ところで、貴女のその『因果ですよ因果』って口癖随分おかしいわね。誰かの真似？」

「あたしのですかあ？ いや別に誰の真似でも無くオリジナルですけどね。さっきも言いましたけど、これでも自分で変だなあって思ってるんですよこれが。まず高校生で因果なんて言葉やたらと使う時点でおかしいじゃないですかあ。まあ簡単に言ってしまうと、あ

たし運命って言葉が結構好きだったんですけどね、やっぱりあたしには乙女チックなものは合わないなあと思って、ほら、小説家が『概念』とか『観念』とかやたらと使ってカッコよさアピールしてるのと同じようなもんですよ。だからあたしも『因果』とか使っちゃってるわけですよ。あんま意味分かってないんですけどね」

「ああ、あるわねそういうの。高校生とか良くやるわ」

「ですよー。こう、『ハンバーガーが二段であることを誰が決め付けた。それは観念だ』みたいなっ！ ああ、話してたらメガマツクとか頼んでみたくなりません？ 因果ですよ因果」

「……ならないわよ。特に今の状況を見てたらね」

「あははー」

申し訳無さそうに頭をかいて、テリヤキマツクバーガーを胃袋に放り込む。同時に頼んであるジンジャエールが、ずずずつ、と音を立て始めていた。

「先輩って運命論とか信じちゃうタイプ……なわけですよー」

突然そう白椿さんが結論した。先ほどの話から同意でも得られると思ったのだろうか、自分で言うておいて途中で気付いたのか萎れていた。

そして私が答える前に、どこか遠くを見るような目で語り始める。

「いや分かってるんですよ。最近の女子コーサーってやつも随分とませちゃってまあ、『運命を感じたのっ！』なんて言うてみてください。周りの人たちにぼこぼこですよ。先輩もどっちかという運命なんてクソ食らえって感じですかね。いや実は言うとおたしも別に運命なんて信じちゃいないんですよ。原因も何も無いのに、そうなる運命だった、だなんて理不尽すぎてアイスティー吹いちゃいますよホント」

この白椿菊乃という娘、もしかしたら物凄いい子なのかもしれない。一見してどこにでもいそうなギャルのような雰囲気をかもしだしているにも関わらず、何か深いものを感じる。それが何なのかは定かではないが、恐らくは『因果』という言葉覚えてた、『運命』という言葉を利用するようになった原因があるのだろうと思う。

ニコニコと笑ってはいるが、そのくせ腹の中で何を抱えているのか検討も付かない。ある意味では灰田と同じく掴めない少女である。とは言え、金曜日の下らないことに律儀にお礼をしてくれるというのは素直に嬉しい話で、私は相手に失礼な念を抱いたな、と思つて彼女の話に微笑んでおいた。

「あー、笑つたつてことは図星ですか煮干ですか一番星ですか。いいんですよー、あたしも先輩も同類、『夢見ない乙女軍団』つてチーム就任ですよ。あれですかね、今流行のノンレム睡眠つてやつですかね。あー、別に関係ないですけどね。ところで、先輩、箸……じゃないや、手が進んでませんね。あれですか、ダイエット中ですか？」

しかし本当に口の止まらない少女である。これだけ一斉射撃を受け続けていれば手を動かすタイミングも見逃してしまうというものだ。こちらはハンバーガーしか頼んでいないというのに、白椿さんに越されそうである。

「手が進んでいないんじゃないやなくて貴女が早すぎるだけよ。もっと良く噛まないで消化に悪いわよ？ ……というか貴女、噛んでる？」
「いやですねー先輩、そんな早食い選手権に出るわけじゃないんですから。最悪ご飯の旨みが口内全体に広がる程度にはしてますよ。あー、考えてみるとあれって微妙じゃないですか？ 糖がデンプンに変わるんですたっけ？ 逆でしたっけ。まあどちらでもいいんで

すけど、なんかそんなのをくちやくちや噛んでるって正直あまり気分が良いものじゃないですよ、いえあたし的にですけど」

「気持ち分らないでもないけれど、それを言ったら貴女が今食べてるそのジャンクフードだって変わらないじゃない」

「これは別物でしょー。ああやって『ご飯は噛んだ方が良い』なんてことを植えつけてくれやがりましたからにこんなことを思っつまうませませさんになっちゃってるんですよあたしは。因果ですよ因果」

最後のサラダに手を付け始めながら、得意の口癖を口にする。私もちようどハンバーガーを食べ終えたが、……白椿さんのサラダを見て不覚にも釘付けになる。菜食主義ではないが、あの類のサラダセットというのはどうにも魅力がある。緑黄色野菜とはよく言ったものだ。……赤も混じってはいるが。

「あー、なんですかその視線は。いやらしいですねー先輩。なんかこう、王の座を虎視眈々と狙うあまり王女を快楽の底に引きずりこんで拉致監禁調教して奈落に叩き落そうとしている目ですよそれはサラダが欲しいならそう言ってくればいいじゃないですかー。奢りがいがあるってもんです」

「……………私が今まで生きてきた中でぶつちぎりで嫌なランキング一位を冠した表現を有り難う、白椿さん」

要領を得ているのかいないのか、良く分からない娘である。

「じゃあ強情な先輩のために一個だけ質問しますから、それに答えてくれたらサラダ奢ります。ちなみにサラダいらないから質問に答えないっていうのは却下の方向で」

「というよりもさっきから質問攻め……に、あっているわけではないのよね……。なんだか貴女と話していると混乱するわ」

「それはご愛嬌(あいぎょう)つてことで妥協(たぎょう)してくだせえ先輩。……で、質問(しつもん)なんですけど」

白椿(しらつばき)さんは財布(さいふ)を持って立ち上がる。中々(なかなか)に中身(なかみ)が入(はい)ってそうなその分厚(ぶんこう)さに目を囚(とら)われた、その時(とき)だった。

凝視(けいし)。

視線(しせん)を上げたとき、強制的(きやうせき)に身(み)が凍(こ)った。身動き(みうごき)が取(と)れないのではない。取(と)らせてくれない視線(しせん)。目(め)と目(め)が一本(いっぽん)の鉄(てつ)の線(せん)で繋(つな)がれたように、動(うご)かせない。

何(なに)が起きたという問(い)いに対して、何(なに)も起きていない。

誰(たれ)だという問(い)いに対して、白椿菊乃(しらつばききくの)。

何処(どこ)だという問(い)いに対して、マクドナルド。

なら 何(なに)がおかしいのかという問(い)いに対して、全て(すべて)と答(こた)えた。否(いな)、違(ちが)う、違(ちが)えるな。何(なに)もおかしくなんてない。ただ、見つめられているだけじゃないか。落(お)ち着(ち)け、冷静(れいじやう)になれ、ドライアイス(らいあيس)を脳内(のうない)に叩(たた)き込(こ)め。疑心暗鬼(ぎしんあんき)になるな。相手(あいて)は誰(たれ)だ、そ(そ)うだ、白椿菊乃(しらつばききくの)ではないか。

彼女は依然(いぜん)としてニコニコと笑(わ)みを浮か(うか)べたまま、私(わたし)に問(い)う。

「灰田純一(灰田純一)と、いつどこで誰(たれ)と何(なに)経(へ)由(よし)でどんな状況(じきやう)でどういった理由(りゆう)でどんな感(かん)じで何(なに)で放課後(はうかご)話(わ)しながら帰(かえ)ってたんですか？」

「……はい？」

質問(しつもん)が破綻(はたん)している。どう答(こた)えろというのだろうか。

破綻(はたん)している。壊(こわ)れている。

放課後(はうかご)について誰(たれ)と何(なに)経(へ)由(よし)でどんな状況(じきやう)でどういった理由(りゆう)でどんな感(かん)じで何(なに)で。答(こた)えられるわけが無(な)い。元(もと)からその質問(しつもん)は質問(しつもん)としておかしい。おかしい。破綻(はたん)している。

まずい。破綻した問いに対して混乱している。ドライアイス。ドライアイスを早く頭に。冷やせ、冷やせ。今だけ耳を傾けるな。破綻する。質問が破綻する。答えが破綻する。

「……うつ……」

急激な吐き気を催した。急いで口に手を当てて嘔吐感を抑える。待て、何故吐き気など催している。今の問いにどこか破綻していた点があったのか。冷静に考える。『破綻ごときに破綻されるな』。

「先輩？ 先輩！？ ど、どうしたんですか、物凄い顔が青いですよ。何かハンバーガーの中におかしなものが入ってましたか？ ちよ、何か飲み物貰ってきます！」

視界から白椿さんの姿が消える。

何故消えたのか。いや、そんなことを問っている暇など無いはずだ。

問題は、『何故私はこんな風になっているのか』にある。それ以外に興味を持つな。彼女の質問が破綻していたことなんて眼中に置かず、私がそれについて過剰な疑問を持ったことも眼中に置かず、冷静になれ。何故、こんなことを考えている。

私の中で何かが破綻した。積み上げた積み木が誰かに蹴飛ばされたように思考が纏まらない。あと一つか二つ積み木の欠片が足りない。私はそれを必死になって暗中模索している。暗い場所にいるわけじゃない。ただ、『ピースが多すぎてどれが本物なのかが分からない』。

そのうち白椿さんがオレンジジュースを持って戻ってきて、私に手渡した。私は最初それが何なのか判断に迷ったが、やつのことでそちらに意識を向けて手にとって飲んだ。冷たい感覚が喉を嚥下していく。

白椿さんが私の背をさすりながら心配そうな顔で覗き込んでくる。

「せ、先輩。もしかして調子が悪かったんですか。それなら断ってくれば良かったのに、ああ失態ですよ失態。大丈夫ですか？」

「……………ええ、なんとか持ち直したわ。ごめんなさいね、折角誘ってもらったのに。実は病み上がりで、昨日は完全に寝込んでたのよ。朝は熱が下がってたから大丈夫だと思ってたんだけど、油断したわ」

「そうだったんですか。因果ですね因果。早く帰って薬を飲んだほうが良いです」

「そう、ね。風邪薬くらい携帯していればよかったわ……………」

薬ならここにあるぞ。

そう、聞こえたような気がした。

そして、私と白椿さんが声の方、顔を上げると、そこにそいつはいた。

「名乗りが必要ならば名乗ろう。俺の名は黒住儀軋^{くろすみぎきし}。なあに、薬を持っているというのは嘘ではない。俺は嘘が無期懲役の次に嫌いだからな。嘘つきは泥棒になる前に殺してしまいたいくらいに嫌いだ。だが、貴様に声をかけたのは善意では無く悪意だな」

黒い巨塔とでも言うべきだろうか。圧倒的な高さ、圧倒的な悪意を持った黒ずくめの男がそこで無表情に笑っていた。

9、悪意

冗談ではなかった。

やはり何故だか吐き気は収まらないし、風邪のせいなのか意識がふらふらとする。風邪薬を飲んで今はベッドの中であるが、これはもしかしたら昨晚よりも酷いかもしれない。

『黒住儀軋』。苗字の方はいいとして、とんでもなくネーミングセンスを疑う名前の男。とにかく服装が黒一色で統一されており、ミラーサングラスをかけて髪の毛をガチガチに固めていた。年齢は声と態度から察するに私より少し、いや大分年上なのかもしれないが、おじさんと呼ぶにはまだ若々しい部分があった。そして何よりも、あの身長。私も低い方ではないが、勿論男性には劣る。とは言え、あそこまで見下されるとあまり良い気分はしない。百八十五は間違いない。

あの後、当然ではあるが黒住から薬を貰ってはいない。見ず知らずの男が渡してくる薬など誰が相手でも有り得ない。確かに見覚えのある錠剤ではあったが、この腐りきった世間だ。いや、そうでなくとも信用するに値するかと問われれば、一億円の契約があっても領けなかっただろう。

何よりも彼からは、悪意が感じられた。

劣悪ではない。そういった卑劣猥劣と呼ばれるような不純の悪ではなく、純粹に悪意が満ちていた。たとえばあの場で私が薬を受け取っていたとしたら、恐らく薬を飲む私を見て、『そのまま突然化学反応が起きて死ねば良い』とか『喉に詰まらせてむせないだろうか』とか『私が薬を受け取ってすぐ捨てたりしないだろうか』のような、まるで悪意の無い純粹な悪意がそこに介在していたように思える。最悪でも、親切心なんていうのはまるで無かった。半ば好奇心に似たようなもので動いたと表現するのが最も型にはまる。

だからあの状況で、あの男はこんなことを言ったのだらう。

「どうする。俺が持っている薬は先ほども言ったが嘘偽り無く貴様の吐き気や気だるさに効く薬だ。だが俺は悪意で貴様にこれを薦めている。それに嘘も無い。これら全てに虚言は含まれていないが、主に悪意で出来ている。故に現在貴様には俺を信用するか否かの選択の余地があり、俺はどちらに転んでもそれは結果なのだと見過ごそう。無論、これにも嘘は無い」

相当嘘を嫌っているのか、発言するたびに自分の言葉の信頼性を強調していた。

この男もやはり全く掴めない。何が目的が、あの場に居合わせたのか。

恐らくは、それこそが『悪意』。

「俺は薬剤師の免許を持っているわけでもないし、医者でもない。だが、貴様が何故そのように苦しんでいるのか、その理由は分かる。これに嘘は無い。もう一度言おう、これら全てに虚言は含まれていないが、主に悪意で出来ている。故に現在貴様には俺を信用するか否かの選択の余地があり、俺はどちらに転んでもそれは結果なのだと見過ごそう。無論、これにも嘘は無い」

恐らくあの薬は本当に効く薬だったのだろう。あれを飲めばそのまま白椿さんとその後ショッピングにでも行けたかもしれないほど、即効性も効力もあるような薬だったと思う。

だが結局、彼にとって薬は渡ろうが渡らなかつたが関係なかった。そういつた迷いを生むこと、相手に疑心を作ること、薬を目の前にさせて、その信憑性を底上げしていつて、私がそれを手に取らないのを知っていてやった行為。それが彼の悪意。

無性に腹立たしかった。

あの後、私はふらつく足を白椿さんに支えてもらって家に帰宅し

た。時は既に昼過ぎで、一体移動にどれだけ時間を食ったか分からない。何が原因で熱が再発してしまったのかはそれこそ全くの原因不明、因果も何もあつたものではないが、恐らくは『灰田』の名だろう。

「……だるい」

熱のせいか、汗で着ていたシャツがべったりと肌にくっついて気持ちが悪。これでは時間帯が昼なのに加えて、恐らく寝ることなど出来ないだろう。

もう少しだけ、睡魔が襲ってくるまであの時のことを思い出してみることにした。

目の前に差し出されたカプセルを見た。

私が昨日森野医院で貰ってきた薬と外見は完全に一致する。しかし、カプセル薬なんてものは見た目どれもこれも同じだ。信用するためには残り九十九パーセントは足りない。

「医者でもない、薬剤師でもない。……突然の親切を無下にしてみようで悪いんですが、拾ったものは食べない主義の人間なので」「聡明な判断だ。もとより俺も貴様がこれを手取るなんてことは毛ほども思っていない。これは単なる口実だ。……言わなくても分

かと思うが、俺はその小娘に用事がある」

そう言っただけで白椿さんのほうを値踏みするような視線で見ると、先ほどもそうだったが、身長が高いために軽く見下されているような気分になる。それもサングラスをかけているために効力が倍増。さながら感じの悪い兄貴といったところか。

白椿さんはそれに気圧されることもなく、いつもの調子でそれに答える。

「あたしにですか？ どーでもいいですけど、先輩が苦しんでるタイミングで話しかけてくるってのも嫌なおじさんですね。あ、それともあれですか、『むしろ狙った』んですか？ これはいやらしい因果ですね因果」

「なあに、突然こんな俺みたいな人間が話しかけてきても貴様らは変質者か何かと勘違いして会話が終了。俺の行動原理は悪意が主であるが、それでも自分に不利な状況に働くことなどそうはしない。それは貴様も承知だろう？ 『白椿』」

黒住が白椿さんの名前を呼んだ。瞬間、白椿さんの表情が歪む。私はそこに横槍ではないが、白椿さんを助けるためにも、自分が知りたいことのためにも口を挟んだ。

「貴方は、白椿さんとどういった関係で？」

すると今度はこちらにあの嫌な視線を向ける。

「どういった関係でもないし、貴様にはそもそも語る必要が……。ふむ、撤回だ。俺とこいつには何の因果もなかった。つまり、知り合いではない。俺が一方的に知っていただけだ」

「……ストーリー？」

「あのような屑同然の悪意と同様に扱うな。それに、ストーカーというのは大抵のパターンが知り合いである。小娘は俺のことを知らない。俺は小娘を知っている。この関係でストーカーという線は薄いと気付け。それに、ストーカーがこんなにのこのこと当人の前に姿を現すとても？」

「無いわね。貴方はどちらかと言えば、ストーカーを追う側の人間に近い雰囲気があるわ。不動、炯眼、無関心、追求、戯言、故に真理。警察と近いわね」

「ふん。それは買い被りすぎだ。それを言うならば貴様のほうがよっぽど危険な目をしている。『値踏みしている人間を値踏みする』など、正気の沙汰ではあるまい」

「……………」

睨みつけられたら睨み返すのは正気の沙汰だろう。それが私だ。

ミラーサングラスの奥、全くこちらからは窺えない眼光が微かに光った気がした。それがこちらに向けられている間、白椿さんがため息と同時に言葉を吐く。

「それで、その擬似ストーカーさんはあたしに何のようですか？ さつきも言いましたけど、先輩今熱出して苦しんでるんですよ。正直あなたに付き合ってる暇無いんですけど」

白椿さんがこの男から逃げようとしていることは声の質の問題から一目瞭然だった。微かだが、本当に微かだが声が揺れている。何故なのかは私には分からないが、息を荒げるのを必死になって抑えているのを感じる。黒住はそれに当然気付いている。

黒住は彼女を凝視する。先ほど私が目を点にして白椿さんに見られた視線とは明らかに違う、値踏みするような汚らしい目、それでいてどこか諦観していて、なのに出来損ないのアヒルの子がいつか更正するのを待ちわびている親のような目。実に複雑である。

気付けばマクドナルドの店内にいる人たちは皆してこちらを遠目に見ていた。自分だけはあそこに関わってはいけないと彼らの細胞が疼いているのに、そこから目を離せない。ホラー映画が怖いのに、見ようとしてしまう人の性といったところか。しかし初めてそこで気付いたが、この視線はあまり良いものではない。奇異の物、まるで自分と違う何かを見ている彼ら。その標的となっている私は、吐き気を催すほどの嫌気にさらされた。オレンジジュースをこっそりと飲み干して、私は一息ついた。

黙殺。

ここは一体何処だっただろうか、とそんなもの思考するまでも無い。だが、だだっ広い草原の中心にでも立たされたかのようにここは静かだった。誰も話さない、黙殺する。

その静寂を断ったのは、勿論黒住だった。

「つまらないな。こうして出会えたのは偶然ではあったが、どのような人物か期待した俺が馬鹿のようだ。最悪怯えては悪いと予想してミラーサングラスまで着用したというのにこの体たらく。見るに耐えんな。そちらの病気の娘のほうがまだ『それらしい』というものだ」

「……っ!？」

それを心外だというように白椿さんが黒住を睨みつけた。

「あんた、何なんですか？　ちょっと下手に出てれば調子に乗りやがって、誰だか知らないけどあんたなんかにあたしの価値をどうのこうの言われる筋合いとか無いんですけど」

「怒るな小娘。怒声は好かない。そこには不純な悪意しか含まれていないからな」

「悪意悪意うつさい。あんたに向ける悪意が善だろうが悪だろうが関係ないっすね。突然現れた何なんですか？　人を中傷するだけし

て帰るつもりですか？ 最低ですね、あんた」

啖呵を切ったように白椿さんの軽い淑やかな雰囲気とは相反する言葉が次々に飛び出す。止まらない、完全に白椿さんは怒っていた。それを見て私は小さく舌打ちした。この男の意味するところの『悪意』の全貌が見えてきたからだ。

白椿さんの口はべらべらと、崩壊したダムの水が流れ出すがごとく悪口という悪口が出てくる。もはや相手の容貌など全く関係の無いところまでにおよび、それを黒住は何食わぬ顔で聞き流している。既に白椿さんには興味が失せたかとも言えるように、彼女を視界にも納めていなかった。

とりあえず私は彼女を止めるために会話に割って入る。

「少し落ち着きなさい白椿さん。この男には何を言っても無駄よ。冷静になりなさい」

出来る限り冷たく言い放つ。案の定白椿さんはビクツと親に叱られた子供のような反応を見せて、しぶしぶと黒住に向けていた視線を外した。

「申し訳ない。子供をあやすスキルは残念ながら俺には備わっていないのでな」

「別に構いやしないわ。今のは貴方とは種類の違う威圧だから、やっつてることは変わらないもの」

「ふん、嫌味か。風邪で体力を失っているはずなのに大した度胸だ。どうだ、俺と共に世界に蔓延るクズどもを片っ端から豚箱に叩き込んでみないか？」

「そのためにはまず貴方を叩き込まないといけなさそうで、難易度高すぎてやる気が出ないわ。残念だけどお断りね」

「それは実に残念だ。勿論、これに嘘は無い」

黒住はサングラスの向こうから一度だけ白椿さんを一瞥し、身を翻した。

「失礼した。この場、黒住儀軌が拝借。俺の行く先に再び縁が訪れないことをお互い祈ろう」

意識が朦朧としてきた。思い出すことを止める。

汗で濡れた額を一度拭って、クーラーのタイマーを設定する。ピツ、という電子音が鳴り、それを合図としたように、今度は携帯のバイブレーターが音を立てた。

これを見て今日は寝てしまおうと決心して、それを開いた。送信者を見ると白椿さんだった。名前を見ただけで、あの騒がしい様子が頭に浮かぶ。

『今日はどーもありがとうございました！ また朝マック行きましようねー。風邪は万病のおとなんで、早く治してガツコで合いました！』

女子高生とは思えない顔文字の一つも無い文面が、どうしてか寂しく見えた。

10、鮮血に白色（前書き）

なんだか短くてすみません。次回頑張ります。

10、鮮血に白色

ああ、そういえば、酷く滑稽で、それでいてどうしようもなく救いよしの無い夢を見ていた気がする。

無意味に人を殺して、無機質に笑って、無感情に泣いて、無為に帰す。

私はその日始めて女の子の名前を知った。その血塗れの外見とは裏腹に、とても少女らしく可愛い名前だった。女の子は自分の名前を自慢するように、その時だけは本当に楽しそうだったように思える。

目の前で誰か、怯えていた女の子がその子に殺されていた。顔面の肉を引きちぎられて、物凄い悲鳴が聞こえたかと思えば、その場は既に血だまりになっていた。それがどんな風になっていたのかは私にはもう表現することどころか、認識することすらままならなかったけれど、確か、赤かったと思う。

あの子で何人目だったろうか。

三日ほど前からこの大量殺戮が始まったように思える。それまでは、確かにあの子との仲が良かった人はここにはいなかったけれど、それでもこんな事態が起こるほどに悪いわけじゃなかったはずだ。

彼女が狂気と邂逅したのは、ある日の川の流れの変化に問題があった。

その日はいつもは緩急はあろうとも、洪水や干上がることなんてまずなかった川が初めて氾濫を起こした。堤防など最初から無かったかのように押し破り、一気に私たちの住む場所まで流れ込んで、私たちの住処を破壊しつくしていった。その水の冷たさと言ったら形容の仕様が無いほどで、最初は皆凍える寒さに震えていたのだった。

その洪水がきっかけか、その日の夜から、いや正確には早朝にかけてに一人の女の子がおかしくなり始めたのだ。感情などまるで無

しに周りにいる子を次々と手にかける。その行動原理は呼吸と同義、行為自体に意味など無く、それをしなければ良くないからする。

最初の被害者の末路を見たときは胃袋の中のを全て吐いた。

二番目の被害者の末路を見たときは嘔吐を抑えるのに必死だった。

三番目の被害者の末路を見たときは頭痛とめまいを覚えた。

四番目の被害者の末路を見たときは眉をひそめて嫌だなあ、と軽い感想を漏らした。

もう次からは、「またかあ」と、自分の番がいずれ回って来ることにすら興味をなくし、ただ坦々と日々を過ごしていたのだった。

……そうして、私の番が回ってきた。

無論言うまでも無いが、私は殺された。マニュアル通りといったところか、人体のあらゆる部分を犯されて死んだ。そこには何のモラルもない、ただただ猟奇的な殺人。

閑話休題、彼女の殺人云々の問題など殺された私がどう解釈しようがもはやどうしようもない。問題は彼女が私の問いに対して、はつきりとした答えを提示したこと。今まで何を問うても「分からない」「や、逆に「なんで？」という答えを返してきた彼女が、私の問いに答えたこと。

「あなた、お名前はなんていうの？」

聞かれた彼女はすこぶる驚いた顔をして、その後笑って言った。

「
」

ああ、その時私は気付いたのだ。私は今ここで、この因果の鎖に縛り付けられた状態ではこの殺戮から逃れられることは出来ないのだ。彼女がその名前を持っている限り、因果の鎖が解かれることも無い。半永久的な因果応報。

『彼女にその名前を持たせた彼女が殺されるのは、当然の理』だっ

た。

だから黙って殺された。痛みに身を任して、なるがなるままの運命に命を委ねた。

最後に見たものは何だったか。

そうだ、どこからか白い手が伸びてきて、私の首を掴もうとしていた。けれども女の子は視線を向けもせず、それを払い除けて、結局私を殺した。あれが助けの手だったのか、それともまた別な刺客だったのかは私の知るところではない。けれども、あれがもし前者だというのならば、早く他の子たちを助け出して欲しいと思う。半ばみんな諦観していると言えども、死にたくないの気持ちは無くなっていないはずだ。

本当に下らない。地獄に下りた蜘蛛の糸を掴むかのようなのだが、それがなるべく強靱な糸であることを祈った。

白い腕は、その願いを受け入れない。

元より彼女のほうこそ間違いなのだ。危害を及ぼす因子があるならば、それから周りのものを遠ざけるよりも、元凶を叩いてしまっただ方が良いに決まっている。ゴキブリが出たから人間が家を出るなど有り得ない話で、当然スプレーなどで殺虫するのがポピュラーであり当然のやり方であると同じことだ。

だから白い腕は『彼女二人とも』を殺そうと腕を伸ばしたのだ。結果、失敗に終わったが、これで引き下がるならば元よりこの場

に姿を現していない、と自らを鼓舞する。

「一撃必殺のマグナムで断ち切れぬものならば、マシンガンを用意しろ。それで残り粕ごと全て葬り去ってあげよう」

その鮮血の空間に、真っ白な腕が無数に侵食し始めたのは、その日の朝のことであった。

一週間の始まりは日曜日からだ、こうして学校生活を楽しむ人間においてはやはりどうしても月曜日が週の始まりなのではないかと錯覚してしまうものだ。キリスト教の教えによれば、日曜日は神が世界を作り終えた後の休憩の時間、七日目の休みであった。その日が週の始まりというのはどういった意図があつて決まつたのだろうか。

一説によれば、キリスト教のその教えは全く一週間の流れとは関係が無く、七曜と呼ばれる天体が起源らしい。守護星という惑星の流れから順序が付けられ、今に至っているという。

兎にも角にも、どうでもいいことに今日は登校日で普通授業であつた。

無論サボり授業が多い私立高校ではないので、土日の連休明けでもクラスメイトは揃っている。とは言え、真面目そうなイメージのありそうな都立高校ではあるが、やはり授業中に隣の友人と会話を楽しむ生徒は珍しくない。私の隣の席の女子生徒もしきりに話しかけてきたが、授業を真面目に受けている身としては言葉の返し方が無い。

学校の授業風景はいたって普遍的であり、私にとつても他の生徒にとつても何ら不都合は生じない。教師はそこそこに生徒を注意するものの、義務教育で無くなった高校ではそこまで生徒に目をかけたりはしない。故にあのような混沌を招くのだが、それはそれで一つの味だということで私は無理矢理納得していた。

元より騒がしい雰囲気は嫌いではない。大人数でどんちゃかするのは流石に気が引けるものの、『賑やか』と『五月蠅い』では大分意味合いが違う。『静寂』と『閑散』も然り、教師が小言のようにぶつぶつと漏らす教科書の内容など聞き取れるわけも無く、生徒が真面目に授業を受けていたのなら静寂が包んでいただろう。

逆に言えば、閑散とはまさに今のような状況を言うのだと思う。

授業が終了した教室内は部活に出た生徒とそのまま帰宅した生徒で溢れ…… というのもおかしい表現ではあるが、現在教室内には私以外には誰もいなかった。

いついかなるときでも優等生を気取っていた私にとって部活動に参加していないのはどこか矛盾が発生するかもしれないが、元より何か一つのことには固執することはそれこそオールラウンダーの意思に反する。

そう言ったものの、オールラウンダーとは日本語訳するならば『万能人間』のことを言う。それが果たして『何でもそつなくこなせる人間』のことを言うのか、『何でも普通以上の結果を残せる人間』のことを言うのかは私には判断がつかないが、私は前者であろうと常に勤めていた。

風邪もすっかり完治した日、下校時間十分前、本来ならばもつと早くに下校しているはずだったのだが、今日は少々予定が入っていた。

白椿さんが一緒に帰ろうと誘ってきたのだった。夜遊びはするほうではないので拒否をしたところであつたが、何度も頼み込んでくるその姿勢に三顧の礼も脱帽、私は彼女にとってとんでもない特待生のようなふたつ。故に無碍に断るのもどうかと、結局その場に流された私である。

鞆に教科書類を詰め込み、陸上部である白椿さんの部活動終了の時間を待つ。既に窓の外は夕暮れ色に染まり、見ている人を憂鬱な気分させてくれる。これが一種の黄昏というやつであろう。ほどよく光沢の塗られた卓上が暁光を反射させて、自分が恋愛ドラマのヒロインにでもなったような錯覚を覚えた。

「ああそうだね、夕焼けをバックにするのはいつだって感動の一シーンだ。けれどもそれは物語の中の話であって、そんなロマンチックな状況を作り出す人間なんて滅多にいやしない。暁光は常にラス

ト。現状を見るなら、それはあまりにまだ早いよ」

そんな私をやけに透き通った声が迎えてくれた。
どうせそんなことだろうと、私は思っていた。

夕日をバツクにして現れるのは最悪白椿さんだったはずなのに、
その机に腰掛けていたのは灰田純一だった。場違いな灰色の髪の毛が夕日に照らされて、妖しい色をかもしていた。当然のことであるが、私は彼の姿を見て激しい嫌悪感を覚える。この出所不明の感情は難なのだろうと毎度のように思う。吐き気などないのに、腐った空気が肺に溜まっているような不快感を身体の中に感じる。

「このまま今日は会わないでおくつもりだったのにね。彼女を恨みたいわ」

私はため息を吐いてそう言う。彼の対応はもはや怒りをぶつけてもどうしようもないのだ。

「うん？ 彼女とは誰だい？」

「後輩の子よ……って、何であんたにそんなこと言わなきゃいけないのよ」

「や、年下に少し興味があるだけさ。気にしないで詳細を」

「意味が分からないわ。ほら、あんたも会ったでしょう、先週の金曜日、購買部の前で」

灰田がわざとらしく顎に手を当てる。

「ああ、うん、思い出したよ。さらに言うなら放課後、僕らの後をつけていた人だろ？」

私はそれに素直に驚いた。まさか灰田が気付いているとは思わな

かったからだ。

「知ってたなら言いなさいよ。気にはしてないけど、ストーカー紛いのことなんてされて気持ちがいいものじゃないわ」

「別に僕は気にならなかったからね。ま、視線は良いものではなかったけれど。……で、何だい、その子と待ち合わせでもしているのかい？」

「そうよ」

「ふうん。珍しいね、君が自分の決定されたスケジュールを変更してまで他人に付き合うなんて。いや、これは僕の持った先入観かもしれないけれどね」

「やはり失礼ね。ま、どうでもいいけど。そうね、私も会って

三日足らずな後輩のたけに行動しているなんて信じられないけれど……なんていうのかしら、あの子はどういう風に見ても嫌な感じがしないのよ。引つ張られるというかなんというか、付き合つて得があるかどうかは分からないけれど、間違いなく損はしないだろうって気になるわ。そういう損得無しにしても可愛い子だしね」

「ほう。『君が自分を蔑ろにしてまで付き合つても良い子』か。興味が出てきたよ」

「蔑ろとは何よ。まるで私があの子のために自分をダメにしてるみたいじゃない」

「決して間違いではないだろう？」

言われて考える。

確かに自分のスケジュールを無視したことは大被害には程遠いものの、確かな被害は被った。それで自分の人生がどうのこうの左右されるわけではないだろうが、それでも立てた計画が崩れるというのはその後のペースに関係する。その証拠として、ここで灰田純一と出会ってしまったのだから。

肯定するのも悔しかったので、私はため息を吐いて、言った。

「なんでもいいからさっさと出て行きなさいって。もうすぐ来る頃だし、正直あの子とあんたを合わせたくないのよ」

すると灰田は不思議そうに微笑み、居座る気満々で机に腰掛けた。灰色の髪がどこから吹いてきたのか、見知らぬ風に揺れた。

「名前だけでも教えてくれていいじゃないか。友の友は友、敵の味方は敵さ。知っておきたい」

敵の味方は敵、全くもってその通りだ。前者はどうか知らないが。私はそれで帰ってくれるなら、とその名前を口にした。

「白椿菊乃さん。白いに花の椿に菊、『の』は……どう説明したらいいのかしら」

「ほう」

瞬間、しまった、と私は激しい後悔に駆られる。

灰田がニヤリと、本当にいやらしい笑みを浮かべたからだ。その事象が滑稽で滑稽で仕方が無く、面白い玩具を見つけて、更にはそれをどう悪戯に活用してやろうかというような悪質な子供の雰囲気。それに加えて灰田の笑みにはどこか自嘲するようなものが含まれていた。いつもの身の毛がよだつような凍った表情ではなかった。それを私は看過することは出来ない。今の灰田は、昨日までの灰田とは違う。

「……君、『黒住儀軋』という男に出会わなかったかい？」
「……っ!？」

何故、という言葉が飲み込まれる。その様子を悟ってか、灰田は

今度こそ最悪の笑みを浮かべた。自然と奥歯に力が入り、鼓動が荒くなる。どうにも心をかき乱されるのを抑えられないようである。

「ホトトギス」

「……………え？」

その笑みを浮かべたまま、彼は唐突にそう切り出した。

「ホトトギスと言えば、僕は最初に日本史に登場する『織田信長』『豊臣秀吉』『徳川家康』の三人の天下人の性格を表した句を思い出すね」

その句は実際に本人が書いたわけではないが、後世の人間がその頃の人物像を表すのに、鳴かないホトトギスを彼らはどうするのかという表現を使った句であった。

最初から、『鳴かぬなら、殺してしまえホトトギス』、『鳴かぬなら、泣かせてみせようホトトギス』、『鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトトギス』。現代解釈された語であるが、意味は違えない。つまり、織田は短気で荒い性格、豊臣は好奇心と行動的、徳川は忍耐強さを表しているという。歴史の授業をしていれば小学校の勉強にも登場する話である。

それは誰にでも分かることだが、今の白椿さんと黒住の話からどう繋がるのが全く不可解だった。

「しかしさらに言うならば、織田はその荒い気質で天下を作り上げ、豊臣が好奇心と行動でそれを発展させ、そしてその完成した基盤の上で徳川が待つということ覚えたとと言える。故にこれはもし順番が『徳川』『織田』『豊臣』のようになれば、イコールで繋がっていた人物像はそのまま交換されてしまうと僕は思うんだ」

一理はある。もし戦乱の時代の織田の立場に徳川が就いたのであれば、忍耐強く待つ、などという性格が形成されただろうか。

「織田の下に豊臣、そしてその豊臣の下に徳川。けどもし、この三人が同時代に異なる国を統べていた人間だとしたらどうだろうか。当然争いは起きるだろう。すると誰が勝利を収めるのか、なんてことは誰にも分らない。これは仮定の話だからね」

「でしょうね。軍事力がどの程度か私には分からないし。……ただ、性格から考えるなら織田が結構優勢じゃないの？」

「聡明な見解だ。僕の話から性格をここまで引つ張ってきたね。そうだね、そう言えるかもしれないが、やはり比べることは出来ない。これは仮定の話であり、例題だからね。ただ言えるのは

現代では、織田は勝ち残れない」

やけに自信めいた言い方だった。

「天下を治めるために動く人間と、天下を治めた人間と、天下が治まった後に動く人間がいる。この違いは然程無さそうではあるけれど、絶大な違いを発生させる。能動的なものと、受動的なものと、そのどちらも兼ね備えた人間。もはや比べるまでも無いだろう」

「豊臣が、勝つてこと……？」

「さあ、どうだろうね。実際に戦ってみなければ分からないし、これは『比喻』だ。僕は彼らの話を聞かせたいわけじゃないのは、君だって察しているだろう。だから僕はあえて『織田は勝てない』と言ったんだ」

言葉を聞きたびに頭が混乱する。結局この男が何を言いたいのかは直接表現で言ってもらわないと絶対に理解不可能のようだった。理解できないことは放棄することとして、私は問うた。

「結局何が言いたいのか？」

灰田の方を見て、彼が立っていたことに初めて気付く。

「僕は三人の天下人が戦ったかどうかと言った。そして結果は分からないとも言った。状況から察することが君には出来るはずだよ、優等生君。僕は嫌な人間だから、ギャルとかが嫌いそうな遠まわしな表現しかしない。短気な女の子がいたら殴られてるかもしれないくらいにね」

「納得するわ。私が短気じゃなくて良かったわね」

「当然君がそんな人物じゃないと知っているからこんな嫌な人間に僕はなっているんだけどね。クイズは嫌いかい？」

私はそれに対して首を横に振った。否定の意であるが、クイズは嫌いじゃないという肯定の意でもある。

「なら良い。今の会話は全て問題文でしょう。答えの指定が無いね」

「嫌な話ね。一足す一が問題で、イコールが無ければそれを足して二にしているのか分からないって感じがしら」

「そうだね。まあその場合の問題文には大抵イコールの記号はついていないと思うけど」

思い出してみればそうだったかもしれない。

彼はにっこりと、今度は優しい微笑を返して言う。

「違えるなよ。どの人物にどの物を位置づけするかは君の自由だ。そして結果は誰も予想できない。醜い縄張り争いの始まりだよ」

身を翻して教室のドアへと歩を進める。そして、最後に予想通り

振り返る。

暁光の世界にただ一人、灰色の髪の毛を持った男がいた。名前を灰田純一。背が高く、言動の全てが私の感情をかき乱し、全ての言語が理解不能。綺麗な彼と汚い彼と、まるで白と黒を混ぜ合わせたような色の人物。

だが違えてはならない。たとえ定義が『白と黒の混ぜた色』だとしても、だからどうしたというのだろうか。『灰色』は『灰色』でしかないということ。

「また明日、会えると良いね」

足音遠く、彼は去って行った。

12、二人の事情

状況は最悪を極めて極悪だった。

どうでも良い話であるが、最も悪いを超えるのが極めて悪いというのもおかしい話である。

説明をすれば、灰田純一と別れて数分もしないで白椿さんは教室に現れ、そしてそのまま二日連続のマクドナルドとしゃれ込んでいた。昨日は朝に行ったのでそれほどでもなかったが、夜中は客も多く、窓から見える夜景は闇に光が沈んでいるようで、なんとも美麗なものである。自然のものが最も美しいと日本人は間違いなく感じているのだろうけれど、人工物も馬鹿に出来たものではないと思う。実際にクリスマスツリーなどは完璧に人工物であるが、あれも金をかければ大自然に匹敵するような感嘆を上げるだろう。勿論、それと今の夜景を比べるには程度が相当低いが。

そんなものもあいまって、更には異分子がここに存在していた。

女子高生二人に囲まれて、真つ黒な服を着た男が一人。場違いにもほどがある。

「いやなんだ、俺もこういうハーレム状態に興味が無いわけではない。無論これに嘘は無いが、主に行動は悪意で出来ている」

「結局嫌がらせなんじゃないですか」

「ふむ。言われてみればそうとも言っな」

「そうとしか言いませんから」

黒住に白椿さんが毒づいた。ジュースをすすって、明らかに嫌そうな顔をしている。最早どう考えても黒住の思惑通りとしか言えない状況であった。

マクドナルドに到着したはいいが、一体どういう縁あってか、サングラスと黒のニット帽を被った、まさに昨日とほとんど変わらない

い服装の黒住儀軌と出くわした。彼は偶然立ち寄ったと言っているが、彼の素性からして悪意で動いていたに違いない。つまるところ、嫌がらせに近い。

話を聞いていてわかったことがある。黒住は昨日、白椿さんのことを一方的に知っていると言ったが、それは白椿さんの両親と面識があつたらしい。さらに言うならば、驚いたことに白椿さんは現在一人暮らし状態で、両親は仕事でどこかへ行ってしまったているらしい。半ばそれを追っていた黒住が、このマクドナルドで見知った顔に声をかけてみた、という経路だった。両親の話をされると終始表情を濁す白椿さんであつたが、恐らく家庭の事情の問題であり深く関つて欲しくないのだろうと思う。黒住もそれを察してか、途中からその手の話題は持ちかけていない。

時計を見た。現在時刻、七時半過ぎ。どうやら学校を出てからここに来て一時間は暇を潰したらしい。その成果は何も実っていないがたまにはこんな蛇足な時間も良いだろう。ファミリーストランだったら途中退場を食らつてもおかしくはないだが、マクドナルドというものは店員が店内をうろつかない為にそういったことが無いらしい。学生が勉強するにもってこいの場所だとは聞いていたが、そういった理由からなのかもしれない。

ジャンクフード特有のなんともいえない臭いと、黒住の注文したコーヒーの香りが混ざり合つて、ここに煙草の臭さが加わったら嘔吐感を催しかねない臭いが鼻につく。その中でも依然として二人は不毛な会話を続けていた。

「大体何を血迷つたら二日連続で、しかも二度目が夕食でマクドナルドになんか来ようと思うんですか。ていうかコーヒーしか頼んでないじゃないですか。ジャンクを食べましょうよジャンクを。ところで先輩、ジャンクって考えてみればゴミじゃないですか。こんなに手軽で美味しいハンバーガーをジャンクと呼ぶのにはあたし少し意見の相違が発生するんですけど、どう思いますか？」

「……私に聞かないで。栄養的にはゴミみたいなものなんだから、別に表現としては間違っていないでしょ」

ふむ、と何に納得したのか、白椿さんは視線をハンバーガーに落としてなにやら考え込む。

「しかし、米国のジャンクフードは本物のゴミらしい。いや、表現には悪意が含まれるが、日本のものよりもカロリーの度合いが桁違いだ。そこで俺も思うのだが、パン、つまり炭水化物、肉、つまりエネルギー、レタス、つまりビタミンや繊維、量の比率に差はあれど、バランス的にはそこまで悪くないと思うのは俺だけか」

「そういう貴方みたいな考え方をする人がいるから、そういう構成にしているんでしょ。実際にどうかは知らないし、とりあえず私に聞かないで」

「ふん、ゴミですら気を使う時代か。下らないものになったものだ」
「下らないのはこの会話の方よ。白椿さんじゃないけれど、貴方本当に何をしに来たの？」

「問いに答える前に言うが、会話自体は下らなくは無い。日常の会話とはコミュニケーションを取るに置いて重要な努力だ。会話の放棄は相手にも雰囲気にも悪い。無駄なことに興味を持つことは若者に必要な事だ。『死や生』について思考するのが思春期というが、それも束の間の出来事。可能性の出来事や、当面の問題でない出来事に興味を示さないのは愚人のやることだ」

随分と真つ当なことを言ったものだから、私は思わず黒住の虚空を追う視線を追ってしまった。白椿さんはもはや会話することに飽きたのか、食にかぶりついている。

「調子に乗るが、物事に興味を無くすということは、人間的な死に限りなく近い。人間の世界に娯楽というエンターテインメントが生

まれたのは、まさに人が生きるための糧を供給したと言っても過言ではない。俺たちは何かを蹴落としても、楽しさを覚えるための努力をしなければならぬ。それを忘れた人間は、そうだな、『自我が崩壊している』と言っても良いだろう。精神論ではない、単純に自分を失っているという意味合いでだ」

「自我が崩壊している、ね。まあ随分言ってくれたようで悪いけど、私もそこまで言うほど物事に無関心な人間じゃないわ。それに私は貴方が何故ここにいるのかに興味がある、優先順位の問題よ」

「ふん、俺がここにいる理由か。下らない、それこそ本当に下らない。これは偶然だ、何ら因果の無い事象だ」

「それにしてもあまりに出来すぎているような気がするけれどね…」

…」

クラスメイトでもない人物と連日出くわすという確率は限りなく低い。それも同じ場所だ。確率的ならばまだ同時刻であつたほうが高いが、朝と夜では大きな違いがある。やはり黒住の登場が登場だっただけに、疑心を抱かざるを得ない。

と、そこに白椿さんがジューズをすする音と共に口を挟んできた。

「何ら因果の無い、ですかあ。それは危険ですよ、おじさん」

「おじ……………ふん、どうでもいい。何が危険だというのだ」

黒住の反応に満足したのか、彼女はジューズを置いて、口元を少し吊り上げた。

「因果律が適応されない物事ってのはですね、全てが『運命』なんですよ。ねえ、この言葉って物凄い綺麗に聞こえますけど、反面かなり危ない感じがしません？ 怖いじゃないですか、今まで全く関係してこなかった赤の他人が、ある瞬間を境に自分の人生の一つのピースになるんですよ。つまり、あたしたちとおじさんがここで二

度目の出会いを果たしたことによって、何かが起きるんですよ。それが何なのかは知りませんが、こうしてあたしがこんな訳の分からない話をしている時点で、当初の目的と違ってきてるんですから」

確かに、黒住が現れなければこのような会話はありえなかったし、もつと静かに、いや騒がしく過ごせていたはずである。これはある意味黒住に向けての皮肉でもあるのだろう。

「ですけどね、あたしはこう考えているんですよ。いやホントませませんでごめんなさい。あたしだってこんな論理的人間になんかなりたくなかったんですけどね、家が家なだけに、因果ですよ因果ま、言うなれば、『おじさんと再開したことは、一度目に出会ってしまったことが原因』なんですよ。ねえ、そうでしょう、『黒住』さん」

ぐっ、と私の喉が詰まった。

これは、見たことがある。昨日、灰田純一について聞いていた時と同じ瞳だ。相手の首を絞めるような無言の圧殺。三人称を変えたのは、もはやその二次産物でしかない。

その瞬間、私は自分の周りが果てしなく狂っていると思った。否、気付いた。

（白椿さんも……普通じゃ、無い？）

黒住においては言うことはないし、灰田など思考することすら無駄に等しい。当の黒住は私が苦しんでいるのを横目にすら見ずに、まるで自分の周りに絶対不可侵を誇る城壁を構えている安心感を携えているような、それほどに無関心に白椿さんを見返した。

「それは俺の答えられる問いではない。俺の発言には一切の嘘は無

く、故に悪意で出来ている。ここにいるのは紛れも無い偶然であるが、そうだな、貴様の言うとおり、『そう定められていたと知っていたから、ここにいます』という見解も決して外れではないのかもしれない。これは予知ではない、どこでどう動いていようが、『結局は俺と貴様は出くわす運命』だったと、そう言いたいのだろうか？」

その言葉を聞いた白椿さんは、がっくりとわざとらしく肩を落としてため息を吐く。瞬間、私の片の荷もどさつ、と音を立てて落ちたように思える。

「やっぱ嫌がらせなんじゃないですか。……仕方ないですね、もう起こってしまったことはもはや水に流せないのです、今日の夕食代金全部おじさんの奢りで許しますよ。因果ですよ因果」

「なら少しは自重しろ。一体いくつ目だ、そのハンバーガー」

「まだ序の口ですよ。あと十個は胃袋に入れて帰ります。や、無理だと思えますけどね、流星に」

そう言うのと、完全に食べきったトレイを戻して再びカウンターへと歩いていった。

そのタイミングを見計らったように、黒住が机に開いたスペースに肘を置いて、こちらを向いた。

「白椿菊乃とはどういった状況で出会った。彼女の言葉を引用するつもりは無いが、彼女と縁を持つという事はかなりの異端だ。無論これに嘘は無いが、主に悪意で出来ているがな」

「彼女とはたまたま学校の購買部で出くわして、財布を忘れて右往左往していたところを奢ってあげたのよ。その恩かどうか知らないけど、なんだか気に入られたみたい」

「どうやらそのようだな。私も白椿の家とは長い付き合いがあるが、彼女らの家はまさに天涯孤独と言えるような仕事をしているために

友人というのはただの一人たりとも見たことが無かったものでな」
「……一人も？」

私はその誇大とも言えるような表現に首をかしげた。

「ただの一人もだ。彼女の両親は常に夫婦で動いていた。故に他のパートナーなど逆に邪魔だったのかもしれないがな」

「そ、そんなことってあるの？ 小さい頃に学校とかで知り合った人とかは……」

「白椿菊乃を見れば一目瞭然だろう。たった一人、偶然購買部で出会った人間にこれだけ依存している。彼女の中には『もしかしたら』という気持ちが少なくとも存在している」

「で、でも待つて。こうして学校に通っていたら、嫌でも他人と関わりを持つようになるでしょう？ そんなことは不可能じゃない？」

「何、友人の一人もいないで学校生活を過ごす人間もいないわけではないだろうが、彼女の場合は、そうだな、家庭の事情に絡む」

「両親が原因なのね。一体何の仕事をしているの？」

その問いに黒住は言いよどむわけでもなく口を閉ざす。それ以上はプライバシーに関るからだろうが、雰囲気から答えてくれる気は無いと私は悟った。

黒住の言うことに嘘は無い。これは彼の信条云々関係が無くそう思う。あれだけ気さくな彼女が友人の一人もいないというのは常識的に考えづらいものがある。購買部のおばさんとは気軽に話していたようだが、あれは彼女の性格の現れであり、決して意思疎通しているわけではないのだろう。表だけの係わり合いというものだ。

そんな彼女が、友人を作れることをどうしてか許されていない彼女が、私の家に来て、それで一緒に食事を取らないかと誘った。一体そこにどんな想いがあったのかは分からないが、恐ろしいほどの勇氣と罪悪感があつたように思える。簡単に言えば、一体どの様な規

制があるのかは察せ無いが親の意志に反した事になるのだ。それも、十五年も守ってきたものを。

その対象となった私はどういう風にして彼女と接することが最善なのだろうか。彼女の家のことを考えてあえて突き放すのも手ではないが、それではあまりに不憫に思える。だからといってこのまま付き合うというのは危険な気がした。黒住の語らない彼女の両親の職業が気になって仕方が無い。

「俺は刑事をしている」

黒住が唐突に口を開いた。私は思考を一旦中断して、彼のほうを見据える。未だ半分は残っているだろうコーヒーを啜っていた。

「言うまでも無いと思うが、公務員ではない。完全に私企業のほうだ。いわゆる『なんでも屋』、『自由業』、『便利屋』といったところか。まあそうは言っても一般人から金を貰って依頼を受けるわけではない。『自分が職を選択して、それになりきる』だけの話だ」

それは一見して普通のように思えたが、黒住の指すところは違う。彼は、オールラウンダーなのだろう。

「しかし俺は生まれてこの方、刑事以外をしたことがない。それは何故か、分かるか？」

ゆっくりと思考を巡らす。そして出た答えは単純なものだった。

「ずっと、追いつけている人間がいる……」

それに満足げに黒住は頷く。コトン、とコーヒーのカップが机に置かれる音が響く。まだ、白椿さんは戻ってこない。

「頭の良い人間は理解が早くて助かる。とは言え俺はある人物を追おうと決めてこの方、たったの一度たりともその人物に触れたことすらまだ無い。それともう一つ、俺が何故『刑事』などという職を名乗っているか、分かるか？」

彼の言わんとすることは理解できる。ただ人を追うだけなのであれば、それに順応する職を探す必要など無い。刑事の証明書があるわけでもないのだから、他人に名乗るときにその肩書きは必要ない。そうだ、つまり、彼の職業には職業としての意味がある。

酷く面白い結論だった。思わず頬がゆっくりと笑みの形を作っているのが自分でも分かる。

「貴方は、正義を振りかざす悪意なのね」

私の不可解な笑みに釣られてか、彼もサングラスに良く似合う微笑を返した。

「悪意とは常に自分以外の気に食わない人間に向かって向けられるものだ。そこには同族意識は発生しない。故に、『悪意とは悪意に向けられるもの』であるパターンが多い。つまり、俺が追っている人間がどのような人物なのか」

「そう、まるで貴方みたいな人間ということね」

間髪いれずにそう言う。が、それが的を射てなかったのか、黒住は酷く不快そうな顔をして首を横に振る。

「ふん、それは言い過ぎだ。奴らは俺とはまるで違う、両極端といっても過言ではない。それ故に似ている、という理論は全く通用しない。言うなれば、ホトトギスの句、織田と徳川の内容の差くらい

に差異がある」

「……………え」

凍りついた。完全に、比喻ではなくて凍りついた。

何故この男が、灰田純一と同じ内容を喋った？

有名な言葉ではあるけれど、何度も登場する表現ではない。私はわなわなと口元を震わせて、必死の形相で黒住を睨む。体内で震える空気を抑え付けてゆっくりと息を吐いた。

そして問う。

「貴方がどちらかは知らない。けれど、聞いておきたい。

豊臣秀吉に当てはまる人物の目論見が、貴方にはあるのよね？」

まさかという思いが募る。それはどんどんと体積を増していつて、次第に体中に蔓延る。重い、実に重い。

だって…………。

「当然だろう。三人の天下人は、三人いなければ三人ではないのだから」

当然だ。三人の天下人を使うならば、三人いなければならないのだから。ピースが、かちつとはまった音がした。黒住は織田か徳川のどちらかで、黒住の追う人物が黒住でないほう、そして、豊臣は。

「お待たせしましたー。あれ、どうしたんですか先輩、顔が青いですよ？　もしかしてまだ風邪が治りきって無かったんですか！？」

「だ、大丈夫よ。コーヒーの香りが嫌いなだけ」

「ほう、それは初耳だ。ならば俺はそろそろ仕事に戻るとしよう。長居したな」

黒住が逃げる。追わなければならないのに、身体が全く言うことを聞かない。いや、正確には脳かもしれない。追おうとすら思っていない。

「彼女とせいぜい仲良くしてやれ。俺の仕事が完遂されれば、それで様々なことに片がつく」

「おじさん、あんた、先輩と何話してたんですか」

白椿さんが憤怒しているように黒住の黒服を掴んだ。

「俺の仕事を語ってやっただけだ」

「ならどうしてあたしの名前が出てくるんですか。関係ないでしょう？」

「それは、本気で言っているのか？」

「……っ!？」

飛び跳ねるようにして黒住から離れる。掴まれた部分を黒住は整えて、私を一瞥、特に何も伝える気も無いらしく、そのまま身を翻していった。

「先輩、あたしたちも帰りましょう。雰囲気害しました」

「ついでに気分も害したみたいね。まあいいわ、追加注文したものはどうするの？」

「持ち帰って夜食にでも」

「太るわよ？」

「因果ですね」

その抑揚の無い声が、酷く孤独に感じた。

13、最悪の因果

一つ足音が増えて、一つ消える。

耳を澄ませば数多に聞こえてくる足音を、そのようにロマンチックに聞くことは不可能である。都会の夜は深い。吸い込まれるような大自然の深さとは違う、飲み込まれるような深さ、それが都会の夜の風景だ。煌びやかな装飾が絶えず闇を照らし、人の賑わう声が静寂を決定的に妨げる。私はそんな空気が嫌いではない。大勢の中にいると、自分が孤独に感じないからだ。逆に大人数いるからこそ孤独を感じる人間もいるだろうが、私にとっては『大勢という孤独の中にいる』からこそ、孤独を感じないのだ。

しかしそんな中、ただ一人だけ孤立した人間がいた。

先ほどからいつもの元気はどこへ行ったのか、仏頂面で私の隣を歩く白椿さん。その表情は無に近い。

先ほど黒住に聞いた話を思い出す。

白椿さんの家庭事情、友人を作れない状況と、そうなった原因である両親の仕事。まだ見えていない部分は多いが、やはり彼女も普通の人間でないことは確かなようだった。しかし、そこまで白椿さんの事情を把握している黒住のことを、白椿さんが知らないのはどうにも腑に落ちない。親だけの付き合いということで納得はしているが、黒住はその娘、彼女を確実に見たことがあるはずである。それが遙か昔の出来事であって、白椿さんが忘れているというのならそれはそれもありなのだろうが、それならば逆もまた然り、黒住が成長した彼女を覚えているというのもおかしい話である。

横を歩く彼女を盗み見る。高校生で順当な顔立ち、薄く化粧ものっており、髪の毛は後ろにひとつに纏められている。傍から見ればどこにでもいそうな少女だ。そんな少女がこれだけの事情を抱え込んでいることに、私はどうしてか……。

ドンツ。

誰かと私の肩がぶつかった。そのまま無視して歩こうとしたが、後ろから肩を掴まれる。

「おいおいネーチャン、人にぶつかっておいて謝りもしないで行くのは礼儀がなってねえんじゃないのか？」

どこにでもいそうな不良がガンをつけてきた。うざったらしいと思いつつも、肩を掴む力が予想以上にことに動けなくなり、私はやむをえなく頭を下げる。

「すみません」

「ああ？ すみませんじゃねえだろうが、どうしてくれんだよ、今ので服の紐が解れちまったじゃねえか？」

見てみると、確かにぶつかった部分が解れていた。嫌な造りをしている洋服であるとは思うが、恐らく自分で千切ったのだろう。乱雑にされた形跡が見るに耐えないほどはつきりと分かる。見れば、白椿さんが虚構を射殺するような視線でこちらを見ていた。

「おにーさん、どうでもいいんですけど、今あたし機嫌が超悪いんですよ。あたしの先輩にこれ以上迷惑かけたら、ただで済ましませんよ。つーかそれ自分で千切ったんでしょう？ 誰が見ても一目瞭然じゃないですか。それに、謝る謝らないって問題だったら、おにーさんのほうこそ謝ってくださいよ。あんたみたいなクソ汚らしい存在が触れて良い人じゃないんですよ、先輩は」

本気で腹が立っているようだ。声に怒声がたまに混じっている。不良が私の肩を離して白椿さんに掴みかかる。

「デメー舐めてんのか？ ガキがでしゃばってんじゃねえよ」

「ガキはどっちですか。ああもう、予定がぐちゃぐちゃ。どうしてもくれるんですか、あたしが先輩に嫌われたら、ねえ、本当にどうしてくれるんですか？ 今すぐ消えてくれればあたしもゲージ八十パーセントくらいで済むんですよ。でも、ホント、マジこれ以上邪魔するってのなら、怒るじゃ済まませんよ？ こんな因果クソ食らえだよったく」

「わけわからねえこと言ってるじゃ」

「消えろつつってんのが聞こえねえのかよ。殺すぞ？」

……………。

思わず唾を飲み込んだ。それは私でもあり、不良でもあった。これは一般人が出て良い、違う、出して良い殺気じゃない。視線を定められない、心臓が掴み取られたかのように自分の内部だけが停止している錯覚。それを間近で受けている不良の心情は未知。この殺気はもう、形容するならば……。

「
嘘」

思い当たった。これを出せる人間が、他にいることを。

「う、く、くっそ、気をつけろよ、ったく!!」

最後の抵抗か、白椿さんをアスファルトの上に投げつけて不良は走り去って行った。白椿さんは何事も無かったかのように立ち上がり、服を整える。

私は感じた感情を全て喉の奥に押し込んで白椿さんに近寄って言った。

「大丈夫？」

「先輩、あの不良を見ててください」

「……え？」

言われて私は去って行った不良のほうを見た。本気で恐ろしかったのか、人ごみを掻き分けながら奥に進んでいる。光景は酷く愉快なものだったが、私はそれを見て恐ろしいと思った。

何故なら、白椿さんがそこをただ一点、殺す視線で見つめていたからだ。

「さつきマクドナルドで因果が対応しない事象は全て運命だって言っただけじゃないですかあかし。でもですね、因果の一番最初、ある出来事の全ての根源は運命にあるんですよ。運命の前には何も無い。残念です、非常に残念ですけど、世界つてのは随分と不条理に出来てるんですよ先輩。それも、あたしたちが思っているよりも大分酷く歪んでるんです。昨日まで元気だった人が、突然病魔に倒れる。ただ遊んでいただけなのに、死人が出た。そんな軽いもんじゃ済まされない、『因果』っていうのが存在するんです。だから私は運命を好かない。

だってそうでしょう？ ああの不良が死んだのは、あたしに会ってしまっただけなんですよ」

「貴女、何を言って……」

その瞬間、物凄い音がその方向からして、私は思わず耳を塞いだ。不思議なことに、視線だけは瞬きすらなくそちらを向いていた。車のクラクションが塞いだ耳の向こうから聞こえてくる。人のざわめきが増す。周りの人間の顔が一齐に、奇妙なくらいにそちらに向けられる。一瞬にして変貌した都会の夜。変わらないのは不気味に町を照らす蛍光灯と、『団体という名の孤独に包含された人々』。間違いない、そこに異分子を含ませたから、その団体が崩壊したのだ。

悲鳴を上げる人、救急車と叫ぶ人、呆然とそれを眺める人、傍観に徹してまるで興味すら湧いていない人、そして当事者。

「出会いっていう因果は最悪です。恋人とかが言うでしょう？
『どうして私たちは出会ってしまったんだろう』って。因果なんですよ、払いようの無い。『運命』っていう最悪にして最強の鎖に縛られた因果なんです。出会いがその中でも最も強固で、黒い。だから私は友達を作らなかった。必要なかったんじゃないし、必要であれば作れたんですよ。先輩があのおじさんから何を聞いたのかは知らない。けど、あたしはそういう状況に不満なんてものは何一つ無いんです」

出会いは人を強くするという。

それは何故か考えたことがあるだろうか。

出会いとは最悪であり、最悪の状況こそが人を強くするからである。

人が強くなる瞬間というのは、固執して涙を、悲しみの涙を流す瞬間に限られる。人の死、人生の挫折、別れ、悟り、そして出会い人と関るということは、最悪を招くことに他ならない。それが良しであれ悪しであれ、それが因果なのだからどうしようもない出来事である。

ならば彼女はどのようなのだろうか。人と関らないで生きる人間は、どのようなのだろうか。

彼女は孤独である。砂場に突き刺さった一本の木の枝である。誰かがそこを通れば触れなくても壊れてしまうほどに土台が緩く、幼い子供ですら何の努力もせずに折れる芯。

断ち切られた因果を繋ぎ合わせるのは不可能に近い。差し伸べられていない手を掴むことは出来ない。

けれど。

「あ、でも先輩は別ですよ。先輩との出会いはもうあたしにとつちやあ一兆円出されても後一億年働いてから来いや！　とか言えるほど貴重で、大切ですから。心配しないでください」

そうニコツと笑って言う白椿さんの言葉は、今のざわめきの中では酷く場違いに思えた。

と、白椿さんが私の手を取った。

「帰りましょう先輩。明日も学校ですし、風邪は治った直後が一番危ないらしいですからね」

繋がれた手が因果の鎖だというのならば、彼女は私に何を求めているのだろうか。孤独が嫌いじゃない少女に、孤独は良くないものだということを言うことなど無意味にもほどがある。それに私にはある確信めいたことがある。それは、彼女が恐らくこのままではこれから誰ともかかわりを持つことはないだろうと。

14、自己崩壊

時々私は部屋に天窓がついていたらどうだったのだろうかと思うことがある。こうしてベッドに横たわって、ふと天井を見上げれば夜空が見渡せるというのは凄いロマンチックなことだ。都会では星は見えないと思うが、永久に広がる暗闇を眺めているというのも趣がある。

宇宙理論というものがどのようなものかは知らないが、宇宙とは限らないものだという。それが果たして数値で表せない故なのか、それとも理論的に限界が来ないことが判明しているのかの判断は私にはつかない。地球を一周できるように、もしかしたら宇宙もそういう構造でぐるりと回ってこれるのかもしれない。

と、このような不確定要素をぐだぐだと考えていたって結論は出るはずがないのだが、今の私は少し現実逃避をしたい気分に陥っていた。

目の前で人が死んだ。

それ自体に何か感情を揺さぶられたわけではない。淡白とかそういう以前に、赤の他人が死んだところで同情するような精神を持ち合わせていないだけの話である。問題は、白椿さんにあった。

『不良が死んだのは、あたしに会ってしまったから』

正直わけが分からなかった。あの予言めいた言葉はどこから出たのか、そしてその通りになってしまった現実。これが困惑せずに何をしろというのだろう。一本一本は太くて頑丈なのに、まるでゲームのコントローラーの紐が絡まってしまったように嫌らしい複雑難解な思考の乱れが脳内を埋め尽くしていた。

結局その後は終始不気味なほどに笑顔を絶やさなかった白椿さんと帰宅し、自室に籠もっている。母親が干したばかりであろう太陽

の臭いがする。下の階からは両親が話す声が聞こえる。おかえりと
ただいまを言う仲。それはいくら親不孝な子供でも知っていること
だ。

しかし白椿さんはどうであろうか。

彼女が拒絶しているのは、『他人』ではなく『他者』。両親が原
因であんなことになってしまっているというのならば、勝手なこと
でありながらあまり睦まじい仲とは想像しがたい。本当の意味で、
彼女は孤独かもしれなかった。

『出会い是最悪の因果』

彼女はそう言った。だから自分はその状況に不満など無いのだと。
ならば、その鉄のキープアウトのテープをいとも簡単に潜ってし
まった私は、彼女に何を求められているというのか。

「……面倒くさい」

枕に顔を押し付けた。途中で息が出来なくなって、顔を上げた。
視線の先には滅多に使わないテレビがあった。テレビはリビングに
一台あれば十分じゃないかと思う派閥の人間で、正直ここに設置し
てからこの方、スイッチを入れた回数は両手の指で数えられるほど
しかない。十四インチほどしかない小さなテレビは、何故か清掃が
行き届いている。恐らくたまに母親が掃除をしてくれるからだろう。
銀色の型に、埃一つ被っていないことに今更気付いて驚いた。

私はおもむろにテレビのスイッチを机の上から取った。そして、
グリーンとブラウン管に電力が通る音がし、映像が出てくる。十二チ
ヤンネル、バラエティ番組がやっていた。そこでは見たことも無い
芸人が芸を疲労して、いるのかもわからない観客からの笑い声が飛
んでいた。

そこで私は黒住の言葉を思い出した。

『人間の世界に娯楽というエンターテインメントが生まれたのは、まさに人が生きるための糧を供給したと言っても過言ではない』

それに間違いは無いと思うのだが、私はこういう番組を見ていても面白いと感ぜれないことが多い。昔はお笑いブームというものに乗っていた時期もあったが、いつの日からか、そういった娯楽に興味がなくなってしまったのは事実であった。そういった意味合いで見れば、私は黒住から見て『崩壊した人間』なのだろう。認めれない事実であるが、認めるしかない事実だ。

チャンネルを変える。娯楽が好きではないからと言って、別段ニユースなどの堅物が好みのわけでもない。NHKをつけて、ニユースアナウンサーがちょうど記事を読んでいるところに出くわした。

「今日未明、東京都内××区で連続殺人事件がありました。犯人は某所周辺の家宅に侵入し一家を殺害、その後その家宅の周辺住民までもを巻き込んだ、かなり猟奇的殺人だと思われます。周辺住民には避難勧告が出ており、恐怖に怯える夜を近くの小学校の体育館で過ごしています。警察は厳重警戒態勢を取っており、××区はゴースタウンのような状況に……」

カメラで取られているのか、警官が三人一組辺りでその区をうろついている映像が流れていた。ニユースキャスターの比喻は的を射ていて、本当にゴースタウンのような不気味な静けさがそこを包んでいるように思える。人がいるというのに、この虚無感は些か異常過ぎる。住人がいなくなるだけで、家というものはこれまでに空虚なものになるのかと私は目を見張った。

××区はここからそう近くは無いが、連続殺人犯ならばその行動範囲を増すということは容易に想定できる事態だ。私は自分がこんなところで暢気^{のんき}にテレビなんて見ていて良いのか心配に目を細めた。

下には親がいる。それを失ったことを考えれば、これは区内だけでなく、東京都全域に避難勧告を出すべきだ。

そう、思え。

「……………」

私の心情はそれとは裏腹に、酷く冷めたもので、映像に流れてくるゴーストタウンとは私の心の中ではないだろうかと思ってしまうくらいだった。死に対して恐怖が無いわけではないが、危険に直面しているわけではない現状に対しては人間はあまりに鈍感と思えるほどに興味を示さないものだ。いや、それは私の樂觀かもしれない。実際、子を大切にする親がこういった事件を頭から野放しにするわけがない。それは当の子供にとつては過保護とも言える行動ではあるが、それが通常の人間の行動原理であることに間違いは無いはずである。

ならば、私が今こんなにも冷めているのは何故だろうと自分で自分に問いを投げかける。会話の無いキャッチボールはボールを投げた側が鬱になるほど無意味であるが、受け取る側も同様ならば均衡は取れる。

最近の自分はこういったことも踏まえて大分淡泊で無機質になってしまったと思う。というのは、風邪がほとんど完治しているにも関わらず食欲は依然として出なかった。これはほとんど夕食に限ったことでもあったが、それ以前に『食べる』ということが面倒くさく感じてしまっている節がある。

中学生などが良く疑問に思う『どうして数学は勉強する必要があるのだろう』。高校生にもなれば、むしろ現代文のほうが将来に役に立たないことを知ると思うが、そういった結論の見えている事に対して、自分がそれに不満があるから疑問を持つ、というパターンが少なからず存在する。つまりは私もそういう状況で、『食べなければ死んでしまう人間の構造に疑問を持った』とでも言うべきな

のだろうか、そういった複雑な事情では無いにしろ、これは自分でも過度のダイエットでもしようと思わなければ出来ないほどの食欲不振だった。

意図的ではないが、あまり思わしくないことであった。

ニユースが次のものに移る。特集でも組んでいるのかと思って期待していたが、それは裏切られたようだった。

「連続殺人事件、ね」

口に出してみたが、やはり実感は湧かない。こういうのは実際に身近な人間が被害に合わなければ危機に気付かないところが性質が悪い。私はスイッチを押して、テレビを消した。

『殺すぞ？』

静寂が訪れた瞬間、酷く重い声が頭の中で再生される。私の先ほどの感情など比べるのもおこがましいほど冷たい脅し。

あの白椿菊乃は、一体誰だったのだろうか。あれこそまさに殺人者のような、それも刑事物に登場するような殺人者じゃなく、もつと狂気の世界とファンタジーに溢れたような世界に登場する人のものさしで計れない存在だった。それで人が一人死んだのだというのだから、あながち馬鹿に出来たものではない。

テレビの画像を思い出した。ゴーストタウン、人が蔓延る無の空間。それは何故そのような感想を私にもたらしたのだろうか。

答えは簡単だった。

その街はとても孤独だった。温かな団欒も街角の会話も消え去り、その街にとっての仲間はどこにもいなかった。警察が包囲し、外部者を許さず、それでいてその中にそれを許しても必要だと思わない感情がある。そこは、とても静かだった。

そこに似合う人間がいたとしてら、私の記憶の中には一人しか

い。

同属。類は友を呼ぶ。あの街には彼女が、彼女にはあの街が、互いに許容できる。

ああそうだ、あそこで殺人を犯したとしたら、私には彼女以外有り得ないと思う。

と、その瞬間猛烈な吐き気が私を襲った。

「う、おえ……」

突如やってきた胃袋の反感に抑えるタイミングすら与えられず、私はゴミ箱に向かって勢いよく吐しゃ物をぶちまけた。

（私は今、何を考えた？）

口の中に広がる不快な酸っぱさ。意図と反して出る涙。荒がる息。その全てを殺したくなるくらいに自分の愚考に吐き気を催した。氾濫した川のように襲い来る吐き気をかみ殺し、拳が砕けん勢いで壁を殴った。骨に衝撃が響き、肩まで痛みが走った。今だけ、その痛みが心地の良いものに思え、次の瞬間にはその程度で自分を許そうとしていることに再び怒りを覚えた。

「う……あ。ふざけないでよ、何が、何が優等生よ……」

灰田の天才が何なのかという問いに対して、私が口にした答え。辞書にあるような模範解答。それが私のやり方であり、絶対に崩れない『持論』であった。

「その私が、何も、何もしてない白椿さんを『殺人者』ですって？

おかしくなるのも大概にしないさいよ私……」

可能性としては最も確率の低い答えだ。事件が起きた後日、一日の初めに会った人間を『お前が犯人だろう』と真面目な顔して言っているのと何も変わらない。馬鹿らしさを超越して愚かだ。

「おかしい、おかしい。こんなの、私じゃない。何を考えてるの……」

ゴミ箱の中を見る。そこには吐いたものなど何も無く、自分がその気でいただけなことに気付く。それを見た直後、やりようのない腹立たしさが起こってゴミ箱を思わず横に殴り飛ばした。捨てられていたゴミが床にぶちまけられる。

その中の一つ、紙くずがごろごろと床を転がっていく。

音も立てず、その紙くずが拾われた。

「ああ、始まってしまったよ。最悪という名の変化が、形を持って、姿を持って現れてしまった。分かっているだろう、君も。『自分がおかしいと気付いたその事こそがおかしい』ことがあるということが」

「なっ……………」

男は音も無く私のテリトリーに足を踏み入れた。背後には扉があった。まるで、そこに彼が誘うような形で。顔を上げられない。無駄に長い髪の毛だけが視界に写る。

「そういえば君の名前を聞いていなかったね。僕の名前は灰田純一、灰色の世界の住民さ。それで、君の名前を聞かせてくれないか？」

言葉は暴力だった。意識を直接殴られ、一瞬にして昏倒する。

そういうことか、そういうことだったのか。

灰田純一はおかしい。とてもおかしい。

それは彼が、他でもない『セルフデイズトラクション存在の暴力』だったからだ。『セルフデイズ自己の

崩壊』とは、自分で自分自身を破壊するとは限らない。彼は着実に、本当に効率的に自己を壊していった。それをまるで灰田が灰田自信を傷つけるごとく、私を壊していった。

私が彼を嫌悪していたのは、自己防衛だったのだらう。彼に関してはいけない。他でもない、自分自身が殺されてしまうから。

だから私は言っちゃった。

「……不法侵入者に、教える名前なんて……無い、わよ……」

わけもわからないまま、私は身体を床に倒した。もはや立ち上がる力も、瞼を開く力も残っていない。不思議とそれに疑問は無かった。腑に落ちないだけで、それはそれで良いんじゃないかと思った。

「僕に答えるか否かは君の自由だ。けど、君は君の名前を決して忘れてはいけないよ。その名前は君以外には誰にも相応しくない名前であつて、まさに君自身を象徴出来る最後の砦なのだから。全てを奪われても、絶対に名前だけは守り通すんだ。それが、君が救われる、君たちが救われるただ一つの方法」

彼の名前は灰田純一といった。それは彼以外には有り得ないし、彼以外認めるわけにはいかない。

「最後に、眠ってしまう前に問おう。

君にとって、優等生とは何だい？」

その声に答えられるわけも無く、私の意識は闇の奥へと落ちていった。

15、セルフ・ディストラクション

そこには、一度洪水で滅びかけた村があった。日本の縄文時代を思わせるような小さな集落ではあるが、村人の数もそこそこ、それでいてとても近所付き合いの良い集落だった。そこには数々の個性を持った村人がいて、各人それぞれ皆に尊敬されていた。

ある人物は剣の達人であつたり、ある人物は大食人であつたり、ある人物は手先の器用さが群を抜いていたり、ある人物は良く泣き良く笑うことで有名だったり、ある人物は研究に没頭している人間だつたりする。

だがその村に大量殺人鬼が生まれた。ある意味で言えば、それも村人の個性の一つであるのだが、洪水のタイミングを狙つてその本性を露にしたのだ。村人は恐れ慄き、逃げ惑う暇も無く一人目が殺され、絶望に村全体が打ちひしがれていた。仲の良い村人たちは、その一人もでも失つただけで全てを失つた感情に叩きのめされていたのだ。

日を追うごとに次々と殺されていく仲間を目の前にして、彼らは何も出来なかった。村で一番強いと呼ばれた兵さ^{つわもの}えも呆気なく殺人鬼に破壊され、見るにも無残な姿で帰還した。誰かが殺されるたびに殺人鬼の笑い声が空を舞った。村人たちは耳を塞いでその声から現実から逃げた。けれども、不思議なことにその場所からは誰も逃げなかった。

村には当然村長がいた。聡明な人間で、村を統括するにはもつてこいの人材だった。頭脳明晰で村一番の学者であつたし、剣の腕もなかなかに立った。だから、村長はその殺人鬼に対抗しようと立ち上がったのだ。

村人は全員揃つてそれに反対した。彼らはこの力ある指導者を失いたくなかつたのだ。ある女はありつたけのご馳走を用意して村長を止めようとした。しかしそれに村長は首を振って食事を払い除け

た。ある女は理論的に出された結果から勝てないことを悟らせようと語った。だが村長は耳を傾けなかった。頑固一徹とも言えるその態度に次第に村人たちは魅せられていき、ついには誰も止めるものはいなくなつた。

村人に理解を得た村長は、村一番の鍛冶屋が打つた剣を手にとつて殺人鬼と対峙した。

「何故あなたは人をこんなにも殺したのか」

誰かがそう問つたのを村長は聞いていた。その人間の変わりだとも言うように、澄んだ声でそれを殺人鬼に問う。

殺人鬼は笑つて答えた。

「どうしてか私は人を殺さなきゃいけないの」

村長は顔をしかめる。

「人を殺すには相応の理由があるはずだ。何にかに恨みがあつたのか。それともそうしなければならぬ理由があつたのか」

「人を殺すことに理由なんていらぬ。そうなつた過程に動機があつたにしても、殺すという行為自体に意味合いなんて全く無いの」

「ならば、その動機は何だ」

「そうしなければならなかつたから」

そこで初めて村長は殺人鬼が嘘や妄言を吐いているわけではないと知つた。これは紛れも無い本音であつて、真実であるのだと悟る。驚いたのはそれだけではない。殺人鬼は、なんと女の子の風貌をしていた。珍しいことではないし、それがそうであるという確信も村長にはあつたが、目の当たりにすると彼女の美しさには目を引かれた。血みどろの服と髪が一層妖艶さを増しているようにさえ思え

る。

その後ろに、白い手が蠢いていた。

村長は思わず目を疑った。殺人鬼が生まれたことさえ衝撃的だといふのに、村の中にはこんなものまで紛れ込んでいたのかと、自分たちの守りの薄さを呪った。白い手は一本や二本では済まされない地面から、空から、わけのわからないとこ様々から出てきている。それは様子を窺うように伸びたり縮んだりして、女の子が一瞬の隙を見せるとすぐさま襲い掛かっている。

村長が今までそれに気付かなかったのは、女の子がまるで空気を掻き分けるようにいとも簡単にそれを払い除けているからだ。

「その手は何だ。そんなものは今までなかったはずだぞ。これもお前が出したのか」

「違う。これは私たちを殺そうとする悪魔の手だよ。ただ、この中で私が一番怖いから、早く殺そうとしているだけ。でも安心して、私が死ななければあなたが殺されることも無い」

「私たちを殺す者だと？ どうしてその手は私たちを殺そうとしているのだ」

「……それは、私たちが死ぬべき存在だから。どうせもうすぐ黒い手も現れる。そうなったらもう誰にも殺戮は止められない」

「黒い、手……？」

「そう。白い手よりかは猟奇じゃないけど、あつちには賢い手。きつと私ばかりじゃなくて、あなたたちも殺してしまう手。でも大丈夫、私が、手なんかに殺される前に 殺してあげるから」

村長は息を呑んだ。剣を咄嗟に構えて、彼女の攻撃に備える。冷や汗が一滴首筋を伝うのが分かった。しかし、完全に気圧された村長に拭うほどの余裕は無かった。

剣の形状は『イメージ』として西洋剣が正しい。一般的にブロードソードと称された代物だ。故に村長のもう片方の手にはバックラ

「つまり小型の盾が装備されている。それを見て、殺人鬼は酷く落胆した。」

バックラーを装備した騎士を相手に一対一で戦うことは相応の技術が必要になる。それは、小型の盾を盾、つまり防御として使うのではなく、相手の剣術を弾き飛ばすために主に利用されるために、映画のような激しい戦闘が予想されるからだ。しかし、村長の構えはどうだ。剣を無様に前に突き出し、盾を自分を守るためにしか使用しようとしていない。恐らくはどこかで仕入れた知識でしかないのだろう。それでも『腕が立つ』と呼ばれていたのは、比較する対象がいなかったからに違いない。

こんなものでは、『見えざる手』からも『白い手』からも村を守るところか、自分の身すら守ることができないだろう。ならばいつそのこと、死ぬ前に殺してあげればいいと、殺人鬼はそう考えていた。

「うおおおおお!!」

村長が地を勢いよく蹴った。振り上げた剣の切っ先が闇に光った。唐突だが、殺人鬼はこう考えていた。見えざる手が何故見えないのかということ。それは何かの比喻ではなく、文字通りの意味で見えないのだ。しかし、そのネーミングはまさにこの世界だけに適応されるものだとも知っている。

闇だった。この世界はあまりに暗い。気付かなければ気付けないほどに闇に満ちていた。故に、『その色を保護色とする手』は見えずる手に違いない。

一体何人の村人が自らの知りえないうちに命を落としたのだろうか。それを思うと、殺人鬼は思わず涙を流してしまった。

「大丈夫だよ。無くなる前に、全部壊してあげるから」

殺人鬼は血塗られた手を伸ばした。と、その時だった。

ぐちゅ、と厭な音が辺りに不自然なほどに響いた。同時に村長の動きも止まる。村長はゆっくりとその音の元を探そうと、自分の腹部を見た。

「　　っ!？」

声すら出なかった。自分の腹部に突き刺さっていたのは闇そのものだった。だがいかに保護色といえども完全に同化しているわけではない。その存在はくつきりと形を持って視界に捉えることが出来る。

手であつた。艶やかな女性の髪の毛のような漆黒を持った手だった。それがお腹を撫でるように自分の中で蠢いている。

「……………めて」

殺人鬼がか細い声を上げる。わなわなと口元が震え、今まで自分で生み出してきた状況を目の前にして恐れおののいている。これはなんという自分勝手な感情だろうか。彼女の瞳から雫が零れ落ちる。赤い、とても赤い涙だった。

彼女は村人の血を吸い過ぎて、真っ赤に染まってしまったのだろう。ふと自分の姿を顧みると人の色をした部分が何一つ存在しなかった。かろうじて唇は赤くとも良いだろうが、舌なめずりをすれば強烈な鉄の味がした。

村長が真っ黒に染まっていく。これは人が死ぬことと同義であつて、同時に生きることと同義であつた。

「や、止める、私に触れるなああ!!」

耳を持たない手に声など届くはずが無い。人という器に液体を注

ぐように、ゆつくりと身体が満たされていく。村長がいくら腕を嫌々と振ろうが何も意味を成さない。腹部から腕、膝、首、かかと、顔と、そのうち風景と同化していく。

殺人鬼はいてもたってもいられずに必殺の手を携えて駆け出した。

「やめて！ その人は私が殺さなければいけないの！」

勿論超えは届かず、変わりに白い手が殺人鬼の身体に絡まる。

「邪魔よ、離して！」

白い手は惨殺されていく。だが、数は質をねじ伏せることが時に可能になる。さしずめイソギンチャクの触手のような感じで地面から一気に手が溢れ出し、完全に殺人鬼を押さえ込んだ。まるで見せざる手とコンビネーションを組んでいるかのようで、殺人鬼は苛立つて手に爪を立てる。

「何なの！？ あなたたちは対立してるんじゃないの！？ お願いだから止めてええ！！」

ついには悲鳴を上げた。その悲鳴が爪を立て、白い手を切り刻んでいく。

村人たちがその悲鳴を聞きつけて徐々に集まってきた。冗談ではなかった、これでは状況は悪化する一方で、白い手は次々と増え続けてこちらは何ら進歩できない。

ダメだ。

もはや殺人鬼は諦観するしかなかった。首をがくりと落とし、殺人鬼は力を抜いた。

『君の名前を、聞かせてくれないか？』

「……何？」

声がした。とても澄んだ声だった。声は反響して、次第にはつきりと聞こえてくる。

「色、何色が根源なのかは僕ら低俗な人類が察することの出来る事じゃない。世界で最初に生まれた色が、白なのか、黒なのか、はたまた赤なのか青なのか。それとも……灰色なのか。君はどう思う？」

扉がそこにあつた。とても綺麗とは言えないが、不思議な扉だった。灰色で、それでいて他の色に見えないことも無い。

「しかし分かるはずの無いことをグダグダと思考しても仕方がないから、人は自分たちで決めることを覚えた。例えば花の名称、例えば数学的な証明、例えば言語。けれども考えてみてくれ、黒と白のどちらが根源なのだろうかという事はまだ両者が分裂している。白、つまり人のイメージするところの『善』や『光』が根源なのか。

黒、つまり人のイメージするところの『悪』や『闇』が根源なのか。

鶏が先か卵が先か。誰も決めていないことをどうやって判断すれば良いのだろうかと考えたとき、先ほどの結論に達する。　　自分たちで決めれば良い」

彼が本当に自分たちの知るところの言語を喋っているのかすら錯覚してしまいそうなほどに不可解な内容を喋る扉。いや、恐らく扉の向こう側に喋っている人物がいるのだろう。一体誰なのかは分からないが、今すぐにでもこの状況を打開して欲しかった。と、そう思って辺りを見回してみれば、自分以外の全ての時間が止まったよ

うに、見えざる手が、白い手が、村人たちが扉を見つめていた。

「そうなったとき、当然人間は自分たちが分かりやすいように、有利になるように決断を下す。無論これを決定するのは民主主義であるが故の国民投票が一番平等で良い。……と言いたいところなんだけどね、こういうものは先に言い出したものの勝ちなんだ。だから僕は灰色を世界の根源と設定させてもらう。故に、闇が帰る場所も光が帰る場所もすべからく灰色の世界、『異端が集まる場所』に違いない。だから僕は全てを帰す。この世界にただの一人も異端を残さないために」

扉がゆっくりと開いていく。邂逅が始まる。

「さあ始めよう。『セルフ・ディストラクション』を」

16、傷と涙と因果と

「……………っはあっ！」

私は半強制的に目を覚ました。心臓の動きが激しく、耳の裏で血流の音が聞こえる。ドクンドクンと五月蠅い。着ていた服が汗でびっしょりと濡れており、間違いなく着替える必要があるようだった。そこで気付いた。私は帰ってから制服を着替えていないようだった。着替えもせずにベッドで寝たのかと思うと、最近の自分の自己管理能力の無さに嫌気が差す。額を拭ってみると、自分の額を拭っているのかと疑えるほどに汗が手の甲についた。私は顕著に嫌そうな顔をしてその汗をシートで拭いた。

夢だ。夢を見ていた気がする。それも、今まで遭遇したことの無さほどのとびつきの悪夢を。それがどんな内容だったかは全く思い出せないが、少なくとも夢の中で『自分が死んだ』ような記憶がある。夢は現実の断片、理想、その逆の絶対に起きて欲しくないことなど、人間の精神状態が出るものだというが、これはどういうものだろうか。何かを暗示しているにしては冗談が過ぎているように思えた。

「さっさと着替えよ……………」

着替えると言ってもまだ昨日から風呂にも入っていないために、私は先にそちらを済ませることにする。

ベッドから重い身体を起こして、私は一度背伸びをする。随分長い間眠っていたのか、とどころで骨が鳴る。首辺りが鳴った時に僅かな痛みを覚えたが、特に気にすることでもない。

私は何食わぬ動作で携帯を手についた。メールのチェックをするわけではない。目覚めに必要なのは時計である。携帯のディスプレイ

イの右上に表示された数字を見る。時計は十一時十分を表示していた。

そこで私は始めて気づいたように、風呂に入ろうと着替えを持った手を止めて、思考する。

「十一時、十分……？」

登校時刻は朝の八時半である。首を回して窓の外を見てみたが、午後十一時というわけではなさそうだ。カレンダーを確認する。今日は火曜日であり、休日である可能性はゼロに等しい。冷静になって状況を整理してみる。結論はいとも簡単に出た。

「もろに遅刻じゃない……」

この様子では今から登校したところでまともに授業を受けることは出来ないだろうと判断して、私は五時限目からの出席を覚悟し、ため息と共に部屋を出た。

部屋を出て階段を降りた時に私は異様な違和感を覚えた。嘔吐感とは違う気持ちの悪さが私の喉の奥を襲った。平衡感覚へいこうがおかしいとすぐに判断して、私は必要ないと決め付けていた階段の手すりに掴まる。

「う……な、何？」

今になって良く確認してみれば、額の汗はふつふつと湧き出ているし、それに体内温度が心なしに高いような気がする。はあ、と吐息をわざとらしく漏らしてみれば、口内の熱さが必要以上に認識できた。

「熱、ぶり返したかしら……」

この状態では、きちんと熱を測ってみたいと風呂は危険かもしれない。私は一階に降りて、リビングの救急箱から体温計を取り出した。家具がセンスの良い位置に配置されたゆとりのあるリビングを見渡してみたが、両親は既に仕事に出かけているらしい。机の上に書置きを見つけてそれを手にとって見た。内容は、私が珍しく寝坊しているところを起こしに行ったらいいのだが、私はその時『今日は休む』と答えたらしい。それで両親は恐らく私が先週風邪を引いていたことからぶり返したのだと判断したのだろう。書置きの横にはゴ丁寧に森野医院から貰ってきたカプセルと、簡単なお粥がラップに包まれて鍋に入っていた。

どうやら私は寝言で自分の限界を親に伝えていたらしい。考えて見れば、そんなことを言った気がしないでもなかった。何となく違和感を覚えつつも、とりあえずは胃袋の中に何か入れておこうと粥鍋を火にかける。その間に熱を測っておこうと思い、椅子に座って体温計を脇下に入れた。

「……………」

一人で家にいると、物凄く静かだな、と感じることが良くある。こういう時に家族の団欒だんらんがいかに重要なものなのかを思い知らされる。

白椿菊乃。恐らく彼女には家族の団欒など遠い夢のような産物なのだろう。友人付き合いを規制する家族が仲が良いはずがない。向こうがそう接しようとしていても、白椿さんがそれを全面的に受けて入れているのかと聞かれれば、恐らく否だろう。私が勝手に決め付けられることではないが、それでも解釈しなければ『家庭事情』という言葉がそぐわない。

いや、それは考えすぎかもしれない。この状況に少し感化されすぎている節が自分自身に見えた。元より彼女からは事情を嫌でも聞

きだす予定である。

彼女がいったいどういう事情を抱えているのかはまだ未知であるが、私に何かを求めて接触してきたのは確かなのだ。それを無下にするほど私も非道ではない。だが、与えるものが何か分からない以上は行動のしようが無いのだ。彼女が自ら語ってくる日もそう遠くは無いだろうが、どうしてか一步を踏み出したくなる衝動に駆られる。

私自身、彼女を気に入っているというのは間違いないだろう。ペットみたい、と表現するならば番犬のほうが正しいように思えるが、小動物的可愛らしさと、昨日見た百獣の王すら身を凍らせる威圧感をもった彼女。アレを見た瞬間に私の心は決まったのだ。彼女を救ってあげようと。その気持ちは偽善ではない。偽善とは結果についてくる言葉であって、元より偽善で動くほど私は落ちぶれた人間では無いと自分で豪語できる。

ピピピピ、ピピピピ。

体温計が音を鳴らして計測の終了を知らせる。脇下から抜いて、それを見た。

「……三十六度、五分。全然平熱じゃない」

嫌な予感が私の脳裏をよぎった。最近テレビ番組でやたらと医者「風邪ですね」と言ったのにも関わらず重病を抱えていたというパターンを放送するがために、自分もそのパターンに当てはまってしまったのではないかと誇大妄想に近い予想をした。しかし、森野医院はかなり名前の知れた病院であり、医療ミスや詐欺の疑いは創立してからたったの一度も無い。ナトリウム療養所のような雰囲気かそういった悪事を妨げているのかもしれないと思った。

とは言え熱が無いのに熱さましを飲んでも仕方が無い。もう一度救急箱を漁るが、咳止めの薬や喉の痛み、吐き気などに効く薬はあったが、自分の今の症状に合いそうな薬が無かった。一応吐き気止

めだけ飲んでおこうかと思ったが、間違っているのは昼食の無駄遣いになる。もう一度病院に行って診察してもらったほうがいいのではないかという結論に達した。勿論理由はテレビ番組の影響だ。早期発見が治療の最も有効な手段らしい。

先週行っただけなので保険証はまだ財布の中にある。私はお粥を温めるのを止めて、二階に財布と着替えを済ますために上がった。ふと思いつくが、これでは学校に登校することは諦めたほうが良さそうだった。特に無遅刻無欠席を目指しているわけではないので、構いやしなかった。

戸締りを確認して外に出る。

「……あつ……まだ春先だっていうのに、何なのよ」

日中、日は真上に位置して一日の中で最も日本を照らす時間帯。ラフな格好になったといえども、熱の余韻のようなものがある今の状態では緩和されても熱い。

私は急ぎ足に森野医院へと向かった。

森野医院での診察の結果はいたって簡単なものだった。

栄養不足。言われてみれば、ハンバーガーを食べた二食意外にまともにご飯を食べた覚えが無い。吐き気やダルさはそこからきているのだと判断された。反論のしようが無かったので私はそれとてりあえずはサプリメントらしきものを貰って家路へつこうとしていた。

「先輩」

突然後ろから声をかけられた。聞き覚えのある声で、半ば反射的に振り向いた。

「白椿さん？ どうしてここに……」

その瞬間、私は目を疑った。彼女の印象でもある元気な雰囲気、微塵も感じられなかったからだ。特徴でもあるポニーテールが、だらしなくぶら下がっているだけのものに見える。そこで私は一つ、昨晚交通事故に出くわしたために元気が無いのだろうかという目測を立てたが、一秒も経たないうちに崩した。

「せ、先輩。先輩。あ、あたしですね」

自嘲しているような引つ掛かりが彼女の声に混じる。嗚咽が混じっているようにも聞こえるが、きっと彼女は泣いていないと思った。奇怪な声は続く。

「昨日のニュース、み、見てました？ ま、まさかテレビは見ない家庭なんて超がつく下らないオチは無いですよ？ や、それならそれでいいんですよ。あたしとしてはそっちのほうか」
「昨日のニュース……××区の連続殺人事件のこと？」

白椿さんの言葉を遮って、昨日私が唯一見たニュースの内容を口にする。その刹那、白椿さんが豹変した。

「お、おおおおおお！！ 冗談にしちゃあ出来すぎてますよこれはっ。因果、因果ですかこれが。馬鹿らしい、アホ過ぎますよ、ははっ」

大袈裟な白椿さんの反応に思わず私は身を引いた。明らかに様子

がおかしい。元々テンションの高い子ではあるが、これは異常であった。それに今日は学校があるはずであるし、故に白椿さんは制服を着ている。なのにここにいるのは何故なのか。解せない問題を問うた。

「あ、貴女はここで何を？」

「あたしですか？ 病院に来る理由なんて少ししか無いじゃないですか。病気だから診察にきたってパターンと……『お見舞い』」

「病気、じゃないわよね。……誰のお見舞いなの？」

恐る恐るといったように私は聞いた。

「……………」

瞬間、白椿さんが背をいきなり折り曲げ、必死に笑いを堪え始めた。何が面白いのか全く分からず、気味の悪い光景を収まるまで待った。時折ひつ、という白椿さんのか細い声が聞こえて私は大丈夫かと、手を差し伸べようとした、その時だった。

突如白椿さんが頭を上げて、私の手を取った。

瞳に溢れんばかりの涙を溜めていた。なのに口元には堪えきれない笑みが浮かび上がっており、そこに二人の彼女が存在しているかのようだった。

私はその時に思った。

孤独に生きている人間とはなんと弱く、そして強い生き物なのだろうかと。彼女らの痛みになど気付けるわけが無く、その片鱗へんりんを見せても決して全貌を見せようとしなない難攻不落の要塞を構え、決して他人を踏み入れようとさせない。ゆえに、私たちには彼女らの限界というものが察せ無い。

私の決意は遅かったのだ。彼女がサンドイッチのお礼を大袈裟なまでに返そうとしたその不自然な行為を精一杯疑っておくべきだった。

ただ。原因の無い行動などありはしない。常に結果には原因がつきまとう。それを世間では、『因果』という。

彼女の涙に濡れ、恐怖に震えた声が私の脳内にゆっくりとしみこむ。あまりに残酷で、想像など出来るわけが無かった傷がさらけ出される。

「私が殺した人の、お見舞いですよ」

扉は既に開いていたのだ。

そこからのびている因果の鎖を、私は今始めて掴んだ気がした。

17、自己殺害

森野医院の中は大自然と言っても過言ではない場所だった。元々建物の半分辺りが木造で出来ているために空気問題には何ら支障が無く、庭には木々が植えられており、医院内部のいたるところに観葉植物が置いてある。医療方法の中でもハーブのようなものを使ったりラクゼーション効果と言ったか、そのようなものがかなり流行っているらしい。医院にほのかに漂う良い香りを発見すると、確かに人気が出る理由が分かる。香水類の匂いはあまり好きではないために、ハーブ類も受け付けないと思っていたがただの食わず嫌いだっただけらしい。

……さて、私はそんな森野医院の素晴らしさについて語っていくつもりなど毛頭も無い。問題は、私の隣で絶えず涙を流している白椿菊乃にあった。

あの驚愕の発言から私は理性を立ち直らせるのに些か時間を要した。何しろ、昨晚のニュースで流れていた殺人事件は、この子が起こしたと言ったのだから。無論そんな話を信じられるわけが無く、仕方なく私は一度彼女を落ち着かせるために森野医院の中で休むことにしたのだ。

『私が殺した人の、お見舞いですよ』

百人単位に及ぶ大量殺戮は一つの病院だけでは手が足りなかったのだろう。緊急用としてこの小さな診療所が使われたほどに、事態は最悪だったに違いない。しかし、死んだ人間をどうやってお見舞いなどするのだろうか。ふと彼女を横目に見たが、恐らく受付で門前払いされたに違いなかった。

正直な話、自分がこれほど冷静に彼女の横に座っていることが不思議に思えてならない。仮にも殺人鬼を名乗った人間の横にいると

いうのに、全く危機感を感じない。彼女がもしもナイフを隠し持っていたら私はどうするつもりなのかと自問自答したところで、返って来る答えなど無かった。決して優しさとか、そういった気持ちで彼女の横にいるのではない。私がこうして彼女に付き添っているのは真実が知りたいからに他ならない。故に、私は彼女を信用しているわけではない。しかしそれでも手元を確認するとか、危ないものを持っていないかなどを確認しようとも思わなかった。怖いわけではない、ただ、興味が無いだけだった。

泣いている白椿さんを老人たちが一瞥していく。可哀想に、とつぶやく老婆の声が耳に入ったとき、私が感じたのは怒りの類ではなくて、暢気のんきだな、という哀れみだった。

「うつ、うつ……っ」

泣き止まない白椿さんの手は私の手の上に重ねられたままだった。ハンカチを目頭に当てて、必死に嗚咽を抑えているが、すぐにたまって吐き出されてしまうようだった。

私はこれではちが明かないと、話を切り出すことにした。

「ねえ白椿さん。一体どういうことなのか説明してくれる？ 私、何が何だか良く分からないのだけど」

極力威圧を与えないように、緩やかな口調で言った。白椿さんはそれに答えようと、今だ溢れる涙を大きく拭ってハンカチを顔から離した。

「うつ……ぐ……。こ、言葉の通りですよ。あたしは、沢山の人の命を奪ったんです」

「その意味が分からないのよ。どうして貴女が人を殺す必要があったの？ 何か、正当防衛みたいなものじゃなくて？」

「ち、違っんです。で、でも、あたしは本当は一人だけ殺せばよかったんです！　それが、他の人に途中で見つかってしまっ……
…いえ、なんでもないです」

自分が実に醜い言い訳をしていると気付いたのか、声の調子が上がっていたのが急に下がる。

「つまり、ドミノみたいにどんどん、ってこと……。それ、まさか私をからかって言ってる、なんてオチじゃないわよね」

「……そうだっただけ嬉しいか想像もつかないですよ。でも、先輩怒らないんですか？」

「おこ……。っ、っていうか、それが本気で言ってるんだったら怒るじゃ済まされないわ。貴女が起こしたのは犯罪よ？　それも、即刻裁判で死刑判決を言い渡されるくらいなの」

「じゃあどうして警察に連絡しないんですか」

「それは……」

言葉に詰まる。確かに、どうして警察に連絡しないのだろうか。まさか私は白椿さんを庇っているとしてもいいのだろうか。この、『優等生』であるはずの私が。

いや、それは違う。まだ彼女を犯人だと決めるには早計過ぎるからだ。どこの誰がこの少女を見て、殺人犯だと思えるだろうか。それも、あれほどの猟奇的殺人はいかに彼女が本心は狂っているとしても不可能がある。大の男がそれを実行したところで、あれほどの殺戮を犯せるわけが無い。

待て。

ならばどういう状況ならば百人単位の殺人が一夜にして完遂することが出来るのだろうか。目撃者がいなければ事件にならない、事件にならないれば百人をその前に殺すことは可能だろう。

だが、彼女は『一人を殺すために動き、その際に目撃されたから

次々と殺していった』と証言していた。ということは、最初の一人を除外した残り九十九人以上の人間に目撃されたということだ。そんな衆目の中で殺人を犯したというのだろうか、この子は。

「せ、先輩？」

白椿さんが心配そうな顔で私を覗き込んできた。

「何でもないわ。ただ、私が貴女を通報しないのは、まだ貴女が犯人だつて認めたわけじゃないから。嘘……にしては、少し芸が過ぎてるように思えるけど、それでも私は信じない。貴女がそんなことする人に見えないもの」

「でもあたしは実際……！」

「待つて、なら質問に答えて。貴女、いつ事件を起こしたのよ」

「……昨日、先輩と別れてからすぐに殺しに行きました」

それではおかしい。私は白椿さんを睨みつけて言う。

「おかしいわ。昨日のニュースを見たのは貴女と別れてそんなに時間が経つて無かった。それも、間違いなく一時間は経つてないわ。そんな短さで××区まで行つて百人単位を殺す？ 不可能に決まってるわ。早足で行つたら一時間、タクシーを使つても二十分はかかるのよ？ それから事件が起きて、マスコミが騒ぐまでに残り四十分？ 有り得なさ過ぎる」

「目撃者が多かつたんですよ。それに、殺人には他の人にも手伝つてもらつたんです……」

「嘘ね」

そのきつぱりとした態度の私に白椿さんは肩を微弱に震わせた。

「貴女言つたじゃない。『最初は一人だけを殺すつもりだつた』つて。なのに最初から手助けを用意してるのはおかしいわ。脱出にでもいるのなら分かるけど、それでも時間の問題は解決しない。それに加えて、私は貴女が人を殺してないと絶対に言える理由がある」

「……それは？」

「貴女が泣いてるからよ」

「……え」

心底意外そうに彼女は声を漏らした。私はそれに大きくため息を吐いて、彼女の頭に重ねられた手を解いて置いた。

「殺人者は人前で泣かない。大抵喜んでるか、呆けてるか、どこかに引きこもってる。もしくは、何も感じてなんかいない。でも私は、貴女が芝居で泣いているとは思えない」

「……………」

「ねえ、本当は何があつたの？」

もう最初から言い訳苦しかったのだ。殺した人間をお見舞いに来るなんていうおかしい言葉に、人を殺したとは思えないほど悩みも無く私にそのことを打ち明けたこと。そして何より、『この森野医院で出会ったこと』が決め手だつた。

彼女が最初に言つた、殺した人間のお見舞い、これが何かの表現で真実だと仮定しても、この森野医院にいる意味が証明されないのだ。それならば何故一番大きな国立病院にいないで、こんな辺境の地を訪れたのか。それに、運び込まれた患者など一本の手で数えられるほどしかないだろう。そんないちいち傷つけた人間を弔いに来る人間が、人を殺せるわけが無い。

そこから出される結論は、今までの彼女の行動から見てただ一つだけだつた。

「私に、会いに着たんでしょう？」

彼女は因果の鎖を頼りに、私の居場所を突き止めたのだ。そして、恐らくその涙が嘘でないというのは間違いない。

白椿菊乃は、何かに対して悲しんでいる。……否、苦しんでいる。私は彼女の堤防をゆっくりと外すために、頭を優しく撫でた。

「あたしの……」

箍^{たが}は外れた。あとは水の流れに任せるだけだ。

「あたしの家庭事情については、黒住から、何か聞きましたか？」
「いいえ。ただ、貴女が両親の仕事のせいで友達が作れない、ってことだけ」

「他には？」

「何も。彼は刑事で、誰かを追っている、とか言ってたけど、それは関係無いわね」

「いえ、多分それあたしの両親のことですよ。黒住がそう言ったのなら間違いないです。ああ、だから黒住はあたしにあの日声をかけてきたんですね。やけに人の家庭事情を知ってる奴みたいでしたから、てつきり『あっち』のほうかと思いましたが、そうですか。あの人、きちんと因果で動いてたんですね」

「『あっち』？」

私はわざとらしくオブラートに包まれた用語に早急に説明を求める。

「ああ、そこから説明が必要ですか。そうですね。……あたしたち、『たち』っていうんですけど、実は言つとあんまり普通じゃないんですよね、家系みたいなのが。何か、傘下って分かりますか？

大きい家の下っ端みたいな家のことなんですけど、それがうち、白椿の家系らしいんですよ。一体どこの古代日本の話だよって感じですけど、事実だからどうしようもないです。それで、その傘下ってのか三個あるんです。あたしの家と、あと二つ。あっちっていうのは黒住がその一つかなあ、と思ってたんですけど、その一つじゃないほうの一つだったんだってことです」

「随分とおかしな話になってきたわね。古い仕来り、なんて本の中にしかないと思ってたけど」

「そこまで予想しちゃいましたか。まあそれで、その仕来りみたいなのでうちは『浄化』らしきものをしていたらいいんですけど……まあ最初は良かったらしいんです。詳しくは知らないですけど」

「最初は？」

「はい。先輩も何となく分かってくれると思うんですけど、『浄化』って抽象的過ぎませんか？ 逆に悪に染めてしまうのなら分かりやすいんですけど、正義に戻す、っていうんでしょうか、それってとても難しいし、どうしていいか良く分からないと思うんですよ」

「確かにね。人を悪の道に陥れるのはどうにでもなるけれど、更生させるとなると私も最善の方法なんて考えつかないわね」

「で、そうなった時にどうしようかって、話し合いが何度か設けられたらしいんです、昔に。そこで出た結論が……『人を真っ白にしまおう』」

「……真っ白？」

私は撫でていた手を止めて白椿さんの表情を窺うように顔を向けた。彼女の表情は思いのほか軽い。恐らく溜めていたものを吐き出せる感覚に酔っているのだろうと思った。

「人が真っ白になるって、どういうことか、分かりますか」

その瞬間、私の知性がある一つの答えを導き出した。その考えを

丸々代弁するように白椿さんの口が動く。

「白っていうのは、黒と違って何かで出来る色じゃないらしいです。光の屈折具合とか、そういうので出来る色で、黒は何でもかんでも混ぜればいつか出来る、つまり色々含まれてるじゃないですか。でも、白は何も無い。何も無いんですよ」

そこで、先ほどの話の展開に至るわけである。

「死んじやえば良い」

人の心に悪が宿され、それを浄化しなければならなかった。しかしその悪は数も質もその仕事人たちを大きく上回り、普通の方法では時間がかかりすぎるし手間も労力も必要だった。一度浄化しても、二度、三度と蘇る。

ならば、と彼らは考えた。

悪を宿す器を破壊してしまえば良いのではないだろうか。極論だが、間違っていない。しかし彼らにも人情はあり、他人を殺すことは相当の精神力を必要とした。中にはその凶行に耐え切れなくなつて自害するものもいただろう。彼らは人を、他人を殺すことによつて自らも殺めていた。だがそれでも彼らはそれ以外の方法を見出せなかったのだ。他の、傘下の家系よりも業績を上げるためには。他人を救うための最大にして最悪、最終の方法は、殺すことだと。そして殺すことにより自らの感情も死んでいき、彼らはその行為をこう名付けた。

「これを、『自己殺害』って呼んだらしいです」

白椿さんは『自己殺害』と言った。私は『セルフ・ディストラクション』と読んだ。

「すると、昨晚の連続殺人事件は、貴女の両親がやったことなのね」
結論を急ぐ。もはやこんな話をする必要は無くなった。白椿菊乃が私と出会い、私に求め、そして私はそれに答える。
面白いと素直に思った。これが、『因果』なのだろうと。

「先輩、お願いがあるんです」

本題に入ろう。彼女が私に嘘をついたのは、最初からこれが目的だったからだ。彼女は私にこの重大な嘘を仕向けることによつて私を試した。それでも尚、私に付き合ってくれるというのなら、という賭けに彼女は出た。それほどに彼女は追い詰められていた。恐らく私が警察につれていくとも言出し、ここで殺されていた可能性もある。そういった意味では、これは随分と迷惑な賭けだった。

だが、もはやそんな前戯は必要ない。元よりそのつもりだったのだ。多少予定よりも大きすぎる事象だが、『友達を救う』のに大きななど関係ない。

「あたしは人を殺したくなんでない。今まで我慢し続けてきたんです。両親が私に教えてくれる、数々の殺害方法とか、そういうのにもしもあたしがそれに屈してしまったとき、友達がいたらその子が悲しんでしまう。もしかしたらその子を殺さなければならなくなってしまうかもしれない。だから友達を作らなかった」

彼女は泣いていた。やはり真実の涙だった。

「先輩に出会った時も、本当は無視しようかと思った。お礼なんてしても何の意味も無いし、ただ自分が苦しい状況に置かれるだけだ。けど、私はやっぱりそれは友達とか関係無しに返すべきだと思っ

た。でも、その日、私はある出来事を境に賭けてみようと思ったんです」

「ある……出来事？」

「はい。それは…… 先輩が、灰田純一と出会っていたから」

一枚のピースが音を立ててはまった。驚きは無かった。恐らく彼女が灰田純一を知らないと答えたのは嘘だろうと半ば看破していたからだ。先ほどの黒住の話で全て揃っていた。

白椿菊乃は『出会い是最悪の因果』だと言った。その時は言いすぎではないだろうかと否定の気持ちでいたが、もはや同意するしかなかった。

そして、本当の最悪の因果の鎖に囚われた彼女は言った。

「先輩、あたしを、助けて……！」

もう私は、人の踏み込める限界領域の一步先に両足をついている。

黒住儀軌は辺りを見回して、広い場所だな、とただそう短絡的に感想を口にした。

成田空港を全便欠航にさせることは不可能に近い業であつたが、権力と人脈を駆使してなんとかそこまでたどり着いた。恐らくこれによつて出る被害は全てこちら持ちだろうが、金でどうにかなる出来事なのであれば億単位の金額くらい投げ捨てることだつて今のは出来た。

欠便になつたからと言つて飛行機がシェルターに仕舞われるわけではない。整備士たちがこの期を利用して大幅にメンテナンスを行っているらしく、滑走路の中心に立つていてもあまり孤立感を感じれなかつたようである。黒住はそれに舌打ちし、背広の胸ポケットから携帯電話を取り出した。おもむろに番号を押し、電子音が鳴る電話に耳をつける。

『こちら輸送班。何か問題でもありましたか？』

事務的な男の声がガチャリ、という鈍い音と共にそこから発せられた。黒住は同じく事務的な声質でその声に返した。

「到着の予定時刻を述べろ」

『交通状態によりますが、二時間以内には間違いなく到着出来ます。都外まで逃走していたらしく、少々手間を取ってしまったので』

「最速で着いていつ頃だ」

『午後五時半辺りです』

「捉えたのは二人か」

『いえ、一人、夫の方は逃がしましたが、恐らく結束の固い奴らなので奪還を予測して誘導させます』

「拘束は嚴重にしているだろうな」

『抜かりなく。手枷足枷指枷、それと強力な睡眠剤を使用しました』

「起床予定時刻は」

『六時過ぎにはなると思います。早朝に眠らせたので、そう長くはかからないかと』

迅速な対応と予想以上の出来に黒住はふむ、感嘆の声を漏らした。

「成田空港の滑走路まで連れて来い。拘束は外すな。もし眠りから覚めたようだったら、手足の一本や二本折っても構わない。言っても無いと思うが、いたぶる様な真似はするな。それは下郎のやることだ。折るなら一思いに、いや、何も思わずに折れ」

『了解』

「到着を待つ」

そう言うと、黒住は携帯電話の電源ボタンを押した。そして間髪いれずに再び番号を押し始める。こちらはまだ一度もかけたことのない電話番号だった。向こうが見慣れない番号に警戒心を抱いて着信を拒否するという場合が少なからず予測されるが、それならば端末を変えて再びコールすればいいだけのことと黒住は踏んでいた。

聞きなれた電子音が鳴り響く。一度目、留守番電話サービスに接続された。これでは不在か拒否かがまだ分からない。留守電メッセージに、「黒住だ」とだけ入れて電話を切った。二度目のコールをかける。やはり主は現れなかった。留守電メッセージに同じ内容を入れて、また切る。三度目をかけようと思ったが、一度時間を置こうと判断して黒住は携帯電話を胸ポケットに戻す。

成田空港の滑走路は人一人がそこに居座るにはあまりに広すぎる空間だった。手を伸ばして端から端まで届かないだろうかという幻想を一度持ってしまったら、夢ですら届かないような夢のループに陥りそんな恐ろしい感覚に嵌りそうだった。

黒住には、昔そのような届くはずの無い夢があった。思い返せばあれが自分の青春時代と呼べるたった一つの思い出なのかもしれないと、今になってしみりとそれに浸っていた。

「自分の言動には一切の嘘が無く、それでいて主に悪意で出来ている」

それは黒住の声ではなかった。彼は自らの信条とする台詞の聞こえたほうに首を向けた。そこには見覚えのある銀色の髪の毛をもった青年が立っていた。

「五年も前の話だったかな、あれは。君がそうして悪意という名の正義を振りかざすようになったきっかけは」

灰田純一。懐かしい顔ではあるが、確かそんな名前だったな、と黒住は思い出した。

「年上の人間に向かって『君』呼ばわりは好かないな。最近のガキは礼儀も知らないのか」

「それはすまなかったよ。僕は基本的に人を名前で呼ばない人種でね、性格上人のことは君と呼ぶことにしているんだけど、気分を害したなら『貴方』に変えよう」

「ふん、どうでもいいことだな。それより何をしに来た。貴様がどうやって俺がここにいることを突き止めたのかは知らないが、貴様の仕事はここにはないぞ。無論これに嘘は無く、主に悪意で出来ている」

「つまり僕に仕事をさせないつもりだと？ 別に構わないさ、貴方がやるうとしていることは禁忌に近いが、だからと言って僕に支障があるわけじゃない。自由にやっていいよ」

「なら何をしに着た。答えろ」

「別にここには用は無いさ。たまたま近くを通りかかったら成田空港が全行欠便だなんておかしい話になっていたから寄ってみただけ」
「なら帰れ。貴様は正直邪魔だ。失せろ」

「あれ、酷い扱いだねえ。ま、僕も自分がここにいるべきだとは思ってない。言われたとおりにするさ」

灰田はやってきて早々帰れと言われたのが不服だったのか、少しだけ不機嫌そうにそう言い放つ。黒住に背を向け、視線を後ろにやっ

った。
「貴方はそれでいいのかい？」

問いだった。黒住にとつてとても簡単な問いだった。彼も灰田に背を向ける。もはや用は無い、立ち去れと無言で言うように答えた。

「俺は、『黒住』ではないからな」

灰田はそれに納得したのか、黒住の耳に彼の足音が入る。それはどんどん遠くなつていき、次の瞬間には全く聞こえなくなった。

黒住儀軌は自分の言った言葉を反芻する。『俺は黒住』ではない。ならばなんだというのだろうか。自分が持つ名前以外に自分を証明できる何かがあるのだというのだろうか。

風が吹いていた。春先の風の感触は嫌いではなかったが、その優しい感触が人の手の温もりのようで、彼自身は受け入れるのを否定していた。自分は受け入れないのに、まるで自分を受け入れるように吹く風に対して少しだけ卑怯な気もしていた。

黒住は自分は中途半端だと思っている。『黒住』の家は代々『悪意』で動く家系であり、善良な人々を、それも過度に世界にとつて保守的な人間に悪さを働く知恵を授け、仲間を作り、主に裏の企業として動いていた面が多かった。それは麻薬であったり、悪質な風

俗であつたりした。時には依頼で人を殺すこともあつたらしく、本
当に世界の『黒い部分』を受け持っていた家系であつた。先代の『
黒住』も同じくして女性の身でありながらその身を悪意に染め、真
つ当な黒住の家系として数々の任務や行動を起こしてきていた。彼
女の名を『黒住此処くろすみこ』といった。実に女らしい名前でありながら、
黒住儀軌にとつて師匠のような存在であり、何よりも憧憬と、そし
て愛情で見ていた女であつた。今は亡き存在ながら、黒住にとつて
は墓まで持つていく思い出の一つであつた。

成田空港は彼女の死場であつた。普通でなかつた彼女は普通でな
い場所で死んだ。今と同じように、彼女はある目的のためにこの広
い場所を選び、航空会社を丸ごとジャックして完全に乗っ取つていた。
自分には出来ない芸当だな、と黒住は思う。彼は一般人が目を眩ま
せるような賠償金を払つて実行しただけだ。借金でも作れば誰でも
出来る芸当だつた。それだけが現在の状況に置いての不満だつた。
時計を一瞥する。目標の到着まではまだまだ時間がある。黒住は
再び携帯電話を取り出して、先ほどと同じ番号を押した。

ブルルル、ガチャ。

その電話を待ちわびていたように、電話の主は黒住の予想を裏切
つてその電話に出た。相手が用件は何だと黒住に聞く。黒住は一度
息を大きく吸い込んだ。

「成田空港で、決着を着けてやる。俺の因果も、貴様の因果も」

そのまま相手の返事を待たずに電話を切る。長らくして待った瞬
間にしては、あまりにあつさりとした幕引きだつた。いや、幕を引
くのはまだ早い。

黒住はさらに携帯電話を使用する。先ほどと違う電話番号、成田
空港の入り口に配置されている部下への連絡だ。

「これから来る客人に伝えろ」

黒住此処は死に際に彼に言葉を残していった。恐らくそれが彼女の望んだ遺言であり、意志を託された黒住にとって最も必要な言葉だったのだろう。

彼はあまりに黒住として見るならば優しかった。常に人を気遣い、悪意を悪意にしか向けない義賊であり、弱気ものの助けとなるために悪意をとにかく働かせた。しかし、それは彼女で無くとも言ったように悪意とは程遠いワル知恵である。人一人を満足に殺すことの出来ない人間、殺すことに理由を求める人間には悪意は向かない。それを直そうと奮闘していたが、生まれつきの性格だから仕方が無いと結局は妥協されてしまった。

『悪意つてのはね、相手にとって悪いことをしようと考えてることに他ならないのよ。それが相手にとって本当に迷惑かどうかは結果が決めること。だからもうあたしは諦めたわ。あんたは自分が悪いことをしていると思って全て行動しなさい。常に悪行を働いている気持ちを持ちなさい。一杯のコーヒーを飲むなら、そのコーヒーを飲めない人間にざまあみろって毒を吐きなさい。そしてその想いに嘘をついちゃいけない。嘘をついたら、ざまあみろじゃなくて『ごめんなさい』になっってしまうからだよ。だから気をつけてくれれば完璧だ。だって、あんた、嘘が一番嫌いなんだろう？』

彼女の言葉は矛盾しすぎていたが、それで『黒住の悪意』となるならば、それほど楽なことはなかった。だから黒住は頷いた。

だから黒住はこう言った。

「俺の言動に嘘は何一つ無い。だが、その言動は主に悪意で出来ている」

19、着信バイブ

自分の家庭が共働きしている状況にこれほど感謝したことは今までかつて無かったし、恐らくこれからも無いだろうと思う。私は泣き崩れて倒れてしまった白椿さんを家に連れ込んで看病していた。移動中何度か携帯電話が着信音を上げたが、白椿さんを抱えている状態で出れるわけも無く無視を決め込んだ。履歴を見てみてが、知らない番号だったのでかけ直すのも面倒になりそのまま放置している。

あの酷く取り乱した様子の白椿さんを思い出す。

『あたしを、助けて！』

あれは懇願であつたに違いない。自分がなしえなかったことを、なんとしてでも私にやって欲しいという優先順位第一位の願いであつた。私を頼ってくるだろうということは予想がついていたが、白椿さんの話と状態は私の予想の斜め上を行った。

どこかの宗家に使える三つの傘下の家。分家とは違うらしいが、まさかそんな昔の日本でもあるまいし、家系どうのこうのでもめている状況が現代にあるとは思わなかった。しかも、だ。その中でも異端の中の異端を走るだろうその仕来り。白椿家は三つの家の中で『浄化』の役目を負っているのだと言った。その『浄化』とやらが一体何なのか、何の意味があるのかは全く掴めないが概要からして最悪の結末にたどり着いたことだけは確かなようだった。

人を真つ白に染めることによる浄化、つまり真つ白とは全てを『白』に戻す、殺すということだ。人間は霊じゃないのだから、完全にその理論は破綻していると思う。どんな理由があるにせよ、昨晩のような大量殺戮を犯して良い理由になんてならない。恐らくその境が見えなくなるほどに追い詰められたのだらうと推測する。

そしてその状況が、現在最悪だということが白椿さんの状態から容易に察される。まさかそんな状態で私に嘘をつけるほどの余裕があったとも思えないが、最初の不気味な様子は嘘をつくためのものではなかったのだろう。思い出してみれば、彼女がこの世のものは思えない奇怪な言動を取っていたことが分かった。

私は思考する。これから自分は何をすればいいのだろうか。その殺人鬼と合つて、白椿さんを巻き込まないように説得でもしろというのだろうか。

「……そんなの無理に決まってるじゃない……」

殺人鬼とやり合えるほどに人生は捨てていない。とは言え、これは常識からは大分逸脱しているが彼女の家庭環境の問題に他ならないのだ。教育委員会でも動いてくれれば全ては丸く片付くのかも知れないが、恐らく惨殺されてしまうのがオチだろう。必要なのは自衛隊かもしれない。

兎にも角にも、家庭問題は家庭で話し合わなければ何ら意味をもたらしさない。彼女に纏わり着く因果の鎖を断ち切るには、その源に近づかなければならないのは避けようの無い現実だ。

一人では、無理だ。

ならば二人ならば出来るのだろうかという話になるが、それも人による。誰か、相手を上手く言いくるめられる人間が必要だ。いや、いつそのこと警察に白椿さんを突き出して、両親の情報を一から百まで喋らせてしまうのも手かもしれない。だがそれだと白椿さんの身が危ない可能性がある。

「……………あ」

可能性を見出した。不本意ではあるが、この人物ならば……。

ブーン、ブーン。

突如、携帯電話が鳴り響いた。鳴ったと言ってもバイブレーターだが、私はそれを手に取って着信を確認する。先ほどと同じ、誰とも知らぬ電話番号だった。私は息を飲んでそれに出る。

「……………はい」

『……………』

相手は黙っている。いたずら電話かと思い、一度耳を離れた瞬間に、声が聞こえてきた。

『成田空港入り口で待ってるよ』

「っ!？」

その声に過敏に反応した私は、何か言い返そうと思って言葉を搜したが、その数秒の間に電話を切られていた。

今の声は聞き覚えがある。無いはずが無い。

灰田純一、彼に違いない。私は苛立ちから携帯電話をベッドに叩きつけ、先ほどの言葉を反芻する。

「成田空港…………？ 何で成田空港なのよ…………」

掴めない男ではあったが、まさか場所の指定まで予想だにしないところを突いてくるとはもはや掬えない水どころか空気である。意図が読めない読めるの以前の問題で、読もうとする意思すら許されないような門前払いだ。

時計を見る。現在時刻は四時少し前。白椿さんが眠ってしまったのはもう大分前の話なので、時が悪いとそろそろ起きてしまう頃だろう。このまま放っておくのも後ろ指を刺されそうだが、彼女を灰

田の前に連れて行くのはあまりに気が引ける。私は急いでペンと適当なノートから紙を一枚破って書置きを残す。

「ったく、こっちは風邪気味で辛いつて言うのに、次から次へと面倒な……」

念のために医院で貰ってきた吐き気止めの薬を喉に流し込み、上着を手に取る。

「お願いだから、もう少し眠っててね」

銀色の髪の方は、成田空港の滑走路で風にその長い髪をたなびかせていた。何処から見ても美しいという形容詞が良く似合う。男は滑走路のステーション側から中心にいる黒い男を見ていた。この日を待ちわびていたように、宗教人が黙祷するようにその男はただ佇んでいる。

銀色の彼は先ほど舞台に必要な最後の連絡を済ませ、時を待っている。昨晚の大量殺人事件は彼にとっても不幸で、それでいてタイミングの良いものだった。物事は須らく早急に済ませたほうが後味が良い。そう考える彼にとって、先ほどの電話もある意味では嫌がらせに近いものがあつたかもしれない。

彼はこの景色を以前に見たことがあつた。何年前の話だったかは思い出せなかったが、同じように黒い服を着た人間が、殺人鬼を全

便欠航された空港の滑走路で待っていた。以前と同じ、本当に同じならば、これからここで『本物の劇』が始まるだろう。醜く、無意味で、無価値で、それでいて彼らにとつてはとても重要な劇が始まる。銀色の彼は傍観者だった。いや、観客というのが最も適した言葉なのだろうが、彼はそれを見ようとも思っていない。ある派閥とある派閥が争いあったとき、それに関連する第三者は無関係だ。そんなものに首を突っ込もうとするのはよほどの偽善者が、優等生だけ。

しかし、舞台を用意した監督にとって劇を中断させられるのは非常に思わしくない。だから銀色の彼は異分子を取り除くために連絡をした。邪魔者はいらぬ。彼らは彼らで問題を片付けるべきだと彼は判断する。そして、同時に銀色の彼にも劇が待ち受けているのだらうと、彼は思っている。

誰かが泥水を飲んでいる頃、誰かが蜂蜜を食べている。決して間違いないと思うが、それは極論だ。一般論には程遠い。

誰かが泥水を飲んでいる頃、誰かが次の泥水を用意する。それが人間の循環の仕組みであり、これこそが真理だと彼は思っている。穢れ役ではあるが、銀色の彼は後者を全うしようと考えていた。

ここで劇を繰り広げる役者が泥水を飲んでいる頃、自分は次の舞台を整える。

「……くくっ」

思わず口から嘲笑が漏れる。我ながら良い表現だと酔っていた。泥水を飲む側は勿論泥水を飲む。ここで、後者が蜂蜜を食べる人間ならそこで終わりだ。だが後者が泥水を用意する人間なら、『泥水を用意する側が泥水を飲まない』という理論は成立しない。上に立つ人間には責任がある。下っ端の犯した罪を擦り付けられなければならない。だが、その場合罪を犯した下っ端に罰を与えるのは被害者ではなく自分。そうして人間は循環していく。

「結局それじゃあ、終わりなんてこないんじゃないか」

しかし、異分子がそこに紛れ込んだとしたらどうだろうか。

例えば、『泥水を綺麗にしてくれる人間』がいたらどうだろうか。循環は変わらないかもしれない。だが、下にいる人間は少なくとも幸せになれるだろう。

そんなことを許す、泥水を用意する人間がいるだろうか。

有り得なかった。穢れと辛さと苦しさを提供する側が下っ端に休息を与えるはずが無い。だから銀色の彼は、叱咤されぬように用意を整える。恐らくは劇中で最も余裕があるのは自分だろうから。

安寧を司る人間が、安寧な世界に住んでいるとは限らないのだ。

「本当に苦勞人だよ、僕らは……」

春先なのに風が冷たかった。それに銀色の男は顔を濡らせ、ゆっくりとその場から足を動かした。

20、孤立

電車を乗り継いで数十分、案の定成田空港の前で待ち構えていたのは灰田純一だった。既に日は落ちかけていて、曙光が銀色の髪を照らすその様子がいやに映えていて少し苛立ちながらも灰田に話しかけると、彼は場所をここに指定したのはただの気まぐれだとふざけたことを言つて、現在近くのファミリーストランにてドリンクバー耐久戦をしている最中であつた。

「いや、思つただけけどね、ドリンクバーって単体は高いじゃないか。そんなことをするよりも二百円程度のポテトでも頼んでセツトにしてもらつたほうが気分的に得するんじゃないかと毎度思つたよね」

「だつたら頼めばいいじゃない」

「実は言つとポテトアレルギーなんだ、僕」

「……………」

実にふざけた男だということとは、全く変わらないようだった。

平日夕方のファミリーストランはつい最近まで通っていたマクドナルドと違って相当に空いていた。ちょうど学校から帰ったばかりの学生がちらほらと、他は井戸端会議の場所を変えただけの奥様方の集まりだった。夜中になれば忙しく鳴るインターフォンの音も全く聞こえない。正直な話、自分がここにいる理由が段々と分からなくなつてきた。

「用事があるならさっさと言いなさいよ。私、そんなに暇じゃないのよ?」

「ほつ、宿題でもしていたのかい?」

私はそのおどけた態度にカチンときて、思いつき睨みつけて言った。

「白椿さんが病気で倒れたのよ。それを看てる時に呼び出して、ただの暇つぶしなんて言ったら怒るわよ？」

「……彼女は今寝ているということかい？」

「ええ。って言っても、どうせもうすぐ起きるだろうから書置き残したけど」

「ああ、ならいいや。彼女にも動いてもらわないといけなくなりそうだし」

「……はい？」

不可解な言葉を発したあと、灰田がニヤリと笑う。

「ところで、君、そんな状態の彼女を置いて何故僕のところに着たんだい？ 別に僕の言葉なんて放っておけばいいものを、わざわざ律儀にここまで来るなんてさ」

「それは……」

何故かと聞かれれば、それは電話の内容があまりにもゲーム染みていたために、ただ事ではないと判断したからに違いないが、ここまで淡泊に質問をされるとそう思っていた自分が突然馬鹿らしく思えてきて、それを口に出来なかった。

それを悟ったのか、灰田が耐えるように声を漏らし、一度飲み物を飲んでからこちらを頼杖について見てきた。

「分かっているさ。僕が、僕らが普通じゃないことに君は気付いている。だから放っておけなかった。ふふっ、それで君は、『その事実を聞かされた』彼女と、いつまであんな茶番を続ける気だい？」

「茶番？」

「そう、茶番。それともなんだ、君は本当に彼女のことを擁護するくらいの友人だと思っているのか？」

「……」

「またも答えられない。決して虚偽で白椿さんと付き合っているわけではないのだが、彼の表現は実に的を射ている。いくらなんでも二日や三日で守ってやるほど世話する仲にはなれるわけがないのだ。例えどれだけ自分で友達を反芻して洗脳しようとも、私には彼女を擁護しなければならぬ理由が全く存在しない。だがそれでも私が彼女と関り続ける理由は恐らくある。」

「あんたは、何かを勘違いしているようね」

「しっかりと噛み締めるように言う。それを灰田が興味津々そうに耳を傾ける。」

「誰かを、誰かと関る、守ることに理由なんて必要ないわ。その場の感情よ。それが続いているのは別にそれを私が拒絶していいだけの話」

「ならば理由があれば拒絶するのか」

「突如、灰田のやけに澄んだ瞳がこちらに向けられる。覗き込まれるような、試されるような視線に思わずたじろぐ。」

「面白いね、本当に面白すぎるよ、『優等生』。君がどれだけそれを気取ろうと、どんなに取り繕おうと穴がどんどん見つかる。ねえ、あの時は聞きそびれてしまったが、君にとっての優等生とはどんな意味合いを持っているんだい？」

「あの時がいつを指し示すのか記憶に無いが、前回の『天才とは如

何なるものか』という問いを思い出し、この男の考えを計ろうとしたが蛇足だった。はあ、とため息を吐いて、面倒くさそうに私は肘を机に付いた。

「それを知ってどうなるのよ。あんた、小説家じゃないんだから遠まわしな表現は止めなさいよ。結局何が知りたいわけ？」

「何を知りたいか、か。実に良い問いだよ。『今日の夕ご飯は何だ？』と問われたところで意味合いを全く感じないが、『間食を取るか取らないか』を先に提示しておけば、料理を作る側は答える理由が発生する。聡明だねえ、君は」

「別にそこまで深い意味で言ったわけじゃないわ。前は調子が悪かったからノリで天才がどうのこうのって答えちゃったけど、もうあなたの話は飛躍しすぎてて付いていけないわ」

「あの時はノリだったのかあ、それは損な事をした。あの時に同じく聞いておけばよかったのか。まあ、僕が何を知りたいかって、言うまでも無く君が知りたいのさ」

その気持ちの悪い台詞をさらっと言つてのけた彼を一瞥し、あからさまに嫌そうな顔で私は尋ねる。

「……何、私に気でもあるの？」

「そうだね、君の事は嫌いじゃない」

「ちなみに私はあんたは大嫌いよ。心の底からね」

「ははっ、分かっているさ。僕は誰からも好かれない性格をしているからね」

自嘲したような笑いに私は目を細めた。まさか自分からそういう事情を話すとは思ってもよらず、どう反応したものかと答えに窮した。灰田はそんな私を放置して、勝手に話を進める。

「白椿菊乃から何を聞いた？」

極力優しくそう聞いてきたが、内心ワクワクしている様子が垣間見れる。そんなにも知られて良いことなのかどうなのかは当本人たちで無ければ分からないことではあるが、白椿さんから聞いた『傘下三家』の話題はそれほど穏やかなものではない。それに灰田が関わっているという確かな確証が私にはあるし、恐らく灰田は私がそれに気付いていることに気付いている。故にこんな質問を投げかけてきたのだろうが、彼はまさに小悪魔のような表情を浮かべて私の答えを待っている。何が面白いのか全く察せ無い。私は正直に腹を割ることにした。

終始興味津々そうに私の話を聞き、『浄化』云々の話が出たところで待ったをかけられた。

「君はその浄化について、何を思う？」

白椿家における役割での『浄化』とは、昔はどうだったか私の知りえるところではないが、現在は殺人を犯すことによる『人の浄化』であるらしい。理論は通っているとは思う。人の心から悪を取り除くには、『黒を白』にするよか『黒を削り取る』ほうが楽に決まっているし、そちらのほうが確実性は激しく高い。……が、これは極端な『色を使った例』の話であって、人の世の中で道徳という言葉が存在する限りはどんな事情があれども許される行為では無いし、認めて良い事象では決して無い。

だが、ここで主観論を押し付けていても何ら解決にはならないことを私は知っている。人の思いには必ずそれに相反する答えがあり、そしてそれを理解しあうには互いの立場で考えることが必要である。とは言え、私が実際白椿家の立場で考えてみたところで答えはやはり見つからず、『自重していればいい』なんていい加減な答えしか用意することが出来ない。一体どれだけの葛藤が彼女らにあった

のか想像も付かない。

「だからこそ、私にはそれに対する意見を発言する資格を持ってないわ」

「しかしそれでは彼女を救えない。彼女の家を説得できない。すれば、殺戮は続くよ?」

「……まず、彼女の家が何故『浄化』なんてものをしなければならぬのか分からない。それが判明すれば少しは」

「解決の糸口が見える?」

「……かもしれない」

灰田はふうん、と然程納得したようにも思えない声を出して、残りの飲み物を啜った。そして、わざとらしく音を立ててコップを置く。

「独り言のように聞き流せ」

命令口調で私にそう言う彼の顔は一変して真剣なものになる。それに曖昧に頷いた。

「人の世界は基本的に『悪』『善』『中立』『異端』によって構成されている。でも、『中立』以外のどれもが度合いを超えると世界にとって許容出来ないほどの『異分子』^{イレギュラー}に成り代わってしまう。異端は元々許容出来る限界の位置にあるけどね。するとその度合いを超えた人間はどうなるか、答えは簡単だ。『孤立する』」

「……孤立……」

「そう、完全な孤立だ。一見して誰かに関わっているように見えるのは間違いだ、それは上辺だけか、関った人間自体も度を越えているかの二択しか有り得ない。そして孤立とは、みんなが言うほど寂しい、という感情に近いものではないんだ。『一人であること』は、

つまり『自分の全行動権が自信に委託されている』ことに他ならない。するとどうなるか……」

噛み締める言葉に私は必死に声を絞り出す。

「　　歯止めが、利かない？」

灰田は満足そうにそれに頷いた。

「孤立すると行動に対して歯止めが利かなくなり、自分では何でも出来るんだと、勘違いを生む」

「ま、待つて。でも、実際には孤立してる人は人に出来るだけ干渉しないような生き方とかをしてるんじゃないの？　いじめられっ子とか、静かな子くらいじゃないでしょう？」

「まずその考えを正したほうが良い。『物理的な孤立と精神的な孤立』は大きく違えるし、いじめられっ子は単なる『逃避』でしかない。人が一般的に使う孤立は逃避なんだよ。孤立はそんな生易しいものじゃない」

今度ばかりは極論だと片付けられない。彼の言葉どんどん紡がれていく。

「僕らは、そんな孤立のために生きる存在なんだ。類は友を呼ぶ、だが、その類が少なければ友は呼べない。だから集める」

「つまり、最初の話に戻れば、白樺さんの家はそういった仕事の環境で『浄化』を行っている、と？」

だが、それに灰田は数秒黙り込んで、静かに首を横に振った。

「彼らの浄化はもっと宗教的なものだった、うん、『だった』。知

っているかい？ 人の悩みを背負う人間は、強くなければ、『感染する』ということを」

「感情移入ってやつね」

「その通り。白椿の家はそれで勝手に自滅したのさ。自意識過剰、被害妄想と言うべきかな、彼らは自分のことをどんでもない孤独野郎と勘違いしているのさ」

他人を評価することは、如何なる場合においても自分を見直すという行動に意思とは関係なく直結する。故に、相手のダメな部分を見つけると、自分にもそれが無いかと見直してしまうことが多い。するとそのうちに『感染』していき、まさに自分が被害者ではないだろうかという錯覚に駆られる。

「元々『白の世界』は人口が圧倒的に少ない。完全善人なんてものは存在するわけが無いからね。だからこそ、彼らの仲間は基本的に少数で、ゆえにそんな被害妄想が生まれたのさ」

「待つて、それと殺戮の何の関係が……」

「考えるよ」

何の遠慮も無くそう吐きかける。しかし、考えろと言われても殺戮と孤独がどう繋がるかなど思考のしようが無い。私が頭を抱えていると、彼は人差し指を立てて言う。

「彼らは仲間が欲しいんだ。でも、普通のやり方じゃ出来ない」

その言葉に気付き、私はゆっくりと頭を上げる。

「まさか……『殺した人間が仲間』だとも言っの？」

有り得ない。有り得るわけが無い。そんなおかしな性癖を持った

人間でもあるまいし、まずそんな思考に陥る時点で病んでいる。だが、話の展開から考えるに、彼ら白椿家は『殺すことによる浄化、黒を白にする』というのをふまえれば容易に想像できる。

「前に、三人の天下人の話をしたね。そして僕はこう宣言した。『織田に勝利は有り得ない』と」

「……」

「当てはめるよ、白、黒、灰と、織田、豊臣、徳川。まさに人の成長と同じじゃないか。黒を知らない無垢な子供は真つ白のままだが、成長過程で突如黒くなる。そして、死に際に初めて人は白さを思い出す。『確立』『発展』『安泰』。そして織田は、ホトトギスの句で短気さを詠まれていた。白椿をそこに当てはめるならば、彼らもまた、急いで手段を選ばなかった。ただ一つ違うのは、それが成功したか否かのところだね。ああ、あとは別に彼らが基盤つてわけじゃないってところか。僕らはそれぞれに役目があるからね、比喻としては失敗だったかな」

自分のミスを嘲笑う。

だが、私はそこで冷静に、そんなことはどうでもいいけど前置きして言った。

「白椿さんを、救う方法はそれから導き出せるわけ？」

「無理だね」

「随分はつきり言うじゃない。なら、どうしろっていうのよ」

灰田はふと、窓の外を眺めた。

「成田空港に、何の意味も無く呼び出したと思うかい」

「……何があるのよ」

「今回、舞台に立ったのは僕でも君でもない。彼らの、彼らだけの

因果だ。今回は観客として見届けてあげようじゃないか」

私も窓の外を眺める。珍しく、今日は飛行機の強烈な響きが耳に入らなかった。

21、着信メロディ

「……あれ？」

白椿菊乃は眩しい夕暮れの光に目覚めを強制され、間拔けな声を一人あげた。オレンジ色に照らされた部屋の中には白椿以外の人はおらず、ここはどこだろうかと、白椿は辺りを見回したが場所に見覚えが無い。丁寧にベッドに寝かせてあるのだから、誰かがここに運んできてくれたのだろうと思った。

無言で記憶を巡ってみると、自分が自らの敬愛する先輩の目の前で倒れたことを思い出した。

「……そっか、あたし、話しちゃったんだよね」

真実を打ち明ける覚悟を決めるのは相当に苦勞を要していた。他人に話してはならないという決まりは無いにしろ、こんな荒唐無稽な話を誰が信じるというのだろうか。白椿は以前に住人足らずに話したことがあったが、勿論信用などされず、漫画の読みすぎだとか、被害妄想だとか言われる覚えの無い言葉を吐きかけられていた。故に、彼女はそれから心を閉ざし、上辺だけの生活を余儀なくされていた。

彼女の敬愛する人物は最初、やはり彼女にとっては取るに足りない存在だった。人間味というのか、白椿は孤独を生み出しつつも決して人としての生活態度を変えなかったために礼は尽くさねばと思いつたのが、全ての始まり。まさか、その道の先に『灰田』の当主がいるとは誰に予想がついたのだろうか。

彼女にとって灰田とは、『因果の先』の人物であり、決してそのままでは出会うことが出来ない遠い人であった。だから、先輩を追っていった際に出会った瞬間には思わず足を杭で打たれたような衝

撃に駆られていたものだった。あの人ならば、灰田と繋がる彼女ならば自分を理解してくれるのではないだろうか、その時はまだ淡い期待を寄せたものだった。

次いでそれが完全な期待となったのが、黒住との邂逅。彼は灰田に比べれば全然出会っていても不思議ではないが、それでも『傘下』のものが出くわすというのは珍しい話であった。本来名を名乗らないために、彼が自らこちらに接触してきたのは白椿を知っていたからに違い無さそうであったが、無論彼女には覚えが無い。聞いた話によれば、黒住の家は世代交代を果たしたのは良いが、それがかなり不完全であったために関りという関わりが宗家から消えうせていたということらしいのだが、白椿自身、黒住儀軌が不完全な『悪意』だとは思えなかった。

何にせよ、敬愛する彼女から全ての因果が繋がったことは否定の仕様が無い事実であり、彼女にとつての希望であった。

白椿はベッドから重い身体を起こして床に足を付いた。フローリングの冷たさが染みる。思わず白椿は顔をしかめた。

その視線の先に一枚の紙を見つけた。どうやら先輩が残してくれた置手紙のようだった。彼女はそれを手にとつて、整っている字を流し読みする。

「……出かけたんだ」

内容はいたって簡潔に、流し読みするほどの量の無い文章だった。ただ二言、『出かけてくる』『薬を帰りに買ってくるから待っている』というものだった。言われた通りに待っていると思い、白椿は先ほどまで入っていたために無駄に温まっている布団に腰掛ける。そして、その横に設置してあったテレビのスイッチをおもむろに押した。小うるさいノイズ音の後に、ニュース番組が流れる。

『昨晚の連続殺人事件の……』

「……うつ」

そのワードを耳にただけで頭痛が走る。白椿は頭を抱えて、急いでテレビのスイッチを切った。

昨晚、先輩との会食を終えたあとに家に帰れば、それは悪夢の巣窟だった。血みどろになった戦闘着を脱ぎ捨てて、どこから密輸してきたのかも分からない拳銃に新しく弾を詰める両親。帰ってきた白椿に対して、無感情にかける声はその時彼女に耳には入っていなかった。ただ、今まで見なかった部分を見てしまった、裏切りと後悔と憤慨の感情が渦巻いて、脳みそが潰されたように思考回路が完全にシャットアウトしていたのだ。

昔から彼女の両親が危うい仕事をしていることは彼女自身感づいていた。白椿の家の『浄化』についての話を聞いたのはつい最近で、その晩の殺戮は彼女に見せる予定でいたらしい。それが現実だったらと思うと、息苦しくなるのを感じる。この苦しみを誰かに知ってもらおうとしたところで、先ほどの反応が返ってくるだけの話。それまでも両親の命令から、他人との関係は出来るだけ上辺だけにしろというものでろくに普通の生活を送れていなかったというのに、この始末はどうだろうか、自問自答して絶望に叩き落されたことが何度あったか数え切れない。

両親は一度、心の無い目でこう白椿に語ったことがある。

『私たちは酷く孤独で、だから友達を作らなければならないんだが、しかし、私たちは普通の人間と同じように生活出来ないからそれが適叶わない』

そのオチはとっくについていた。ただ単に、自分で自分を檻に閉じ込めていただけ。白椿菊乃自身は自分が孤独なのは、そういった理由からでは無いと確信があった。

先代、先々代かもしれない。白椿の家の『浄化』とやらの方法が変わったのは。その文献を読んだときに彼女の感情は怒り一色になっていた。理不尽で、わがままを極めたような結論がそこには記されていた。つまりを解釈するところなる。

その頃の白椿当主は心を病んでいて、今までの祈祷による浄化は『悪を自らに移す穢れた行為』なのだと豪語し、さらにはその当主が病んでいく様を見守っていた親類たちがそれに納得した。その後、幾重にもなる会議の結果で出されたのは、『人を真つ白に、自分たちと同じようにすることなど不可能だ』という諦観の結末だった。

しかしそんな中、一人の白椿の人間がそれは違うと大きく反論に出た。彼は霊能力があり、現当主が何かに取り付かれていることを悟っていたのだ。だが、彼がその事実を打ち明ける前に当主は一つの村を滅ぼした。理不尽すぎる殺戮に殺された霊たちは白椿の家を呪った。その呪いを一身に受けた当主はすぐに病の床につき、数日と足らずに命を落とした。

その呪いは収まる事を知らず、霊能力を携えていた彼すらもその毒牙にかけた。すると、彼自身もその呪いの所在で精神を病み、ついには彼も村一つを滅ぼしに行くという予想だに出来ない事故が発生したのだ。

その連鎖を繰り返すうちに彼らは『殺戮こそが、人間の霊こそが我らの味方』なのだとか々に勘違いを生んだまま継がれていき、その基盤が完成してしまったのだ。

彼らは殺戮を犯したその三日前後で当主が逝くことから、『自己殺害』、自らを生贄に捧ぐことで、人々を浄化するのだという極論に走る事となり、現在に至る。

「殺すことが、死ぬことがあたしたちの幸せ……」

その言葉を一体何度反芻させられたか、考えようとする事すら蛇足。

彼女がその晩、絶望したのは他でも無いその任を実行してしまった両親に対してであり、そして何よりもその間違いを正せなかった自分にあつた。一足遅かったのだ、気付いたときには全てが終わっていた。自らも受けていた呪いは、そう簡単には褪えなかったのだ。彼女は必死に考えをめぐらせていた。白椿の本当の『浄化』とは何なのか、そしてそれが必要である理由とは何なのか。だが、結局はその答えは出ないまま、世代交代が始まることとなる。白椿菊乃の両親は、近日命を終える。

「……せめて、あたしが結婚してからにしろって話」

と、その時だった。

自分のズボンのポケットに入っていた携帯から流行の音楽のメロディーが流れ出した。メールではなく、電話の着信だとそれで判断する。先輩からだろうかと思ひ手に取るが、ディスプレイに表示されている番号は知らないものだった。不審に思いながらも、それに出る。

「……」

あえて、相手の声が聞こえるまで黙る。すると、向こうから声が飛んでくる。

『

』

「……え？」

白椿の表情が凍りつく。絶句し、その声に全神経を集中して一語一語を脳に浸透させていく。

聞きなれた声。誰のものかなど判断する時間を要さない。そこから聞こえてくる声に白椿菊乃はゆっくりと何度も頷いた。……と、何かを言った瞬間に電話が切れた。

「ちょ、ちよつと！」

急いで叫んでみるが、残ったのは切れた電話が鳴る音だけだった。しかしそこからの白椿の行動は早かった。置手紙に一度謝るように一礼して、部屋を駆け足で飛び出して行った。

行き先は、成田空港。

22、白椿の孤独

白椿菊乃が家を飛び出してちょうど三十分経った辺り、成田空港では相変わらず黒住が腕を組んでそこに立ち尽くしていた。だが、今回は状況が違った。

黒住儀軋の目の前には一組の男女ががたいの良い男に組み伏せられていた。両手両足を縛っているにも関わらずそこまでしななければならないのには相応の理由がある。以前、自分の師は彼らを甘く見ていたが故に命を落としたのだ。良く知るその顔はその状況でなお、全く焦りを見せていない。それどころか笑みまで浮かべて、黒住を睨みつけていた。

男のほうも女のほうも真つ黒なタイツ、それも映画で登場するような戦闘員が着用していそうなものを身に付け、腰には日本では滅多にお目にかかれない本物の銃器が提げられていた。鉄の色をしたそれは黒住の手によって一発だけ銃弾が込められている。

男のほうが苦い表情で口を開いた。

「ふん、先代の黒住もそうだったが、慢心するのは良くないと思うがね。私の身のこなしの良さは君も良く知っているだろう？ その気になればこの男たちを逆に組み伏せることも出来るのだぞ？」

それでも自信は保っているのだろう。その言葉には嘘は含まれていないように黒住には聞こえるし、黒住自身が男の能力の高さを良く知っているが故に否定など出来るはずが無い。

彼は決して慢心しているわけではなかった。

一発の銃弾。これがそこにあるか否かで状況というのは豹変するものだ。銃弾の込められていない銃器など所詮は鈍器と化すのみ。だが、こうして一発でも残っていればそれを所持する側としてはチャンスを与えられたと同じことである。一瞬の時間さえ奪えれば、

腰から銃器を引き抜いて黒住の心臓を貫くことなど毛頭も無いことだろう。

しかし、逆に一発しか込められていないという強迫観念に似た緊張が男女を襲っているのも確かな話である。それゆえに、彼らは自信は持つても確信を持つことが出来ないでいた。どうやってもその一撃を外してしまえば、あとは数で押さえ込まれるに違いがないからだ。

彼らは黒住の『構造』^{システム}をよく理解する人物であった。つまるところ、黒住には他の傘下の家と違って組織が存在するというのである。『人を黒く染める』という行為は人間の世界の中では胡坐をかいたままでも可能な行為であって、老若男女一つの差異も無く、権力、財力共にある黒住にとっては本当に楽な仕事であった。だから黒住は自分と同じ族を増やし続け、いつしか一つの組織として成り立つようになっていた。

男にはそんな黒住に敵意をむき出しにしていると同時に、羨む気持ちが少ないとも存在していた。自分たちは夫婦で、たった二人で仕事をこなしているというのに、彼は自宅の居間でテレビを見ているだけで全てが完了してしまうのだ。

だから男と女は、数年前に黒住を殺害した。黒住はその二人に言う。

「俺の行動の全てには、悪意が含まれている」

それに男は鼻で笑った。

「はっ、馬鹿を言え。そうして君の師も命を落としたことを忘れたのか？ そうだろう？ 黒住儀軌君」

「その通りだ白樺。俺の師は今と全く同じ状況にて命を落とした」

「ほっ、この演出は君のせめてものあがきか？ 敵を取る、なんて馬鹿らしい行為は黒住には似合わないぞ」

「敵を取る？ ふん、貴様こそ馬鹿なことを言うな。この状況は単なる再現であつて、それ以上の意味も以下の意味も無い。ただ、貴様らが死ぬ時期を違えただけの話だ」

「……」

男女の性は『白椿』と言う。彼らこそが白椿菊乃の両親であり、二日前の大量殺人を犯した犯罪者であつた。昨晩まで証拠一つ残さない逃走劇を繰り広げていたが、黒住の『勘』によつて遭えなく包囲されたのだつた。

もはや黒住が白椿に向ける感情は、良く言えば恋する乙女のように、悪く言えばキャリアを持つ刑事のようだつた。それを逃がさんとする思いは、こうして形となつて顕現した。

長い、とても長い道のリであつた。数年前に師を殺されてから黒住は白椿を探すために都内に留まらず、全国を駆け回つたが一向に見つかる気配は無く、ちょうど一年ほど経つた時に、初めて自分が『黒住』であつたことに気付き、同時に相手が『白椿』だということとを認識した。

白椿の『自己殺害』は調べれば簡単なことであつた。大量殺戮をし、その後自害する。つまり、黒住が追わなければならないのは『殺人事件だつた』。今だ白椿が死んだという情報は彼に入つていなかったなので、つまり生きている、つまり人を殺す、つまりそれを追えば、必ず出くわすと信じていた。

「そついえば、私たちの娘が少しだけ世話になつたそつじゃないか」

相変わらずの余裕の表情で突然男がそう言つた。

「何故知っている。俺が彼女と対面したのは一週間も無い前のことだぞ」

「なあと、娘から直接聞いたのさ、黒住が私たちの事を追っている

とね」

「ほう、貴様らまだ娘と連絡を取り続けていたのか。俺はてつきり勘当したとも思っていたが……」

「ははっ、腐っても私の可愛い娘だよ。それに、私たちが死ねば彼女に呪いが受け継がれる。放っておくわけにもいかないだろう。それは君も知っているはずだ」

「呪い、か」

噛み締めるようにその言葉を口にする。吐き気がするような言葉だった。元々黒住は霊や呪詛などといった類のものを信じる性質ではなかったが、それでも『白椿の呪い』は郡を抜いて嫌な響きがする。

完全に、破綻しているのだ。

「灰田の家は、『自己崩壊』。貴様の家が『自己殺害』と、自らに課せられた呪いを名付けるならば、俺の黒住は『自己破壊』に他ならない」

「……ほう」

黒住が唐突に呟いたことに興味を寄せるように男は相槌を入れる。

「なあ、俺たちは似ていると思わないか」

ミラーサングラスの奥が妖しく動いたような気が男にはした。

「俺の仕事は完全なる悪だ。やらなければならないと判断したら、貴様らのように殺生すらも躊躇えない。世界に蔓延る『出来すぎた善』を破壊するために、『自らも破壊しなければならぬ』という、この合致。出来すぎだとは思わないか」

白椿の『自己殺害』は、『出来すぎた悪を殺すために、自らも殺さなければならぬ』という結論』が存在している。とは言え、既に破綻した白椿はもはや相手が悪なのかどうなのかという判断すら出来なくなっているが。

だがそれはおかしい。本来黒住と白椿の行為は真逆であるはずなのだ。確かに行為自体を見れば、ただ対象が違うだけの更正ではある。だが、たとえば害虫を殺すことと人を殺すことは動詞は同じであつても対象が違うだけでこれほどまでに意味合いの差異が発生する。つまりはそういうことであつた。

「もう何年も前からのことだが、何故貴様らは自分たちが破綻していることに気付かない。人を殺すことによる救済？ 奇麗事すら通用しないだろう」

「……………」

男女は長い間黙る。彼らも人間であつて、化け物ではなのだ。自分たちがしている行為の悪性を理解しているはずなのだ。

「私たちはね」

同じ一人称で、女のほうが今まで閉ざしていた重い口を開いた。

「私たちの仕事はね、あんたみたいな時代の最中で出来るようなものじゃないのよ。宗教？ そんなもので現代の人間の心が改心されると思う？ 無理よ、絶対に無理。けれども私たちは仲間を作らなきゃいけない、仕事を完遂させなければいけない。でもどんどんどんどん下に落ちていくだけ。だから、強攻策に出なきゃいけない」

それが、先代よりずっと受け継がれてきた『呪い』を受け入れる

ことだった。無論、彼らも自分たちが誤ったことをしているということは百も承知の上で、だが、それでもそれを受け入れることこそが自らの幸せへの道だと信じて疑わなかったのだ。

「貴方には分からないでしょう？ 組織を作って、仲間だらけの貴方には、私たちの、何をどうしたって孤独なままでしかいられない白椿の気持ちには」

「ふん、妬みか？」

「そう取られても仕方が無いくらいに、こっちは悲惨ってことよ。誰も改心させることなんて出来ない。かと言ってね、殺したってどうせ孤独なだけだ」

「ならば何故殺す？」

「それがしきたりだからよ。どうせどうしたって孤独なら、最後の賭けに出てみたいじゃない。灰田みたいな特異現象が、私たちにもあるかもしれないんだから」

「……完全に履き違えているな」

「……何？」

男のほうもその言葉には怪訝な顔をした。黒住はサングラスを外し、胸ポケットに入れた。意外にも澄んだ目が、二人を捉えた。

「先の話に戻るが、貴様らの娘、白椿菊乃と対面したとき、俺は正直その苗字を疑った」

「何故？」

男のほうがそう問う。

「何故？ 今貴様は何故と聞いたか？ ふざけるのも大概にしる、自分の娘を見て、自分と同じだと思っのか？」

「……………」

「俺は貴様らを捕らえるために数々のことを学んだ。有り得ないほどの情報量と、有り得ない伝承の数々だ。まず一つ、俺たち傘下の家の人間は全て、近親相姦によって子が作られている。当然だろうな、こんな腐った家に誰が入りたいと思う。血を濃くするという意味合い以前に、普通の人間の配偶者など出会えるはずがない。」

次いで傘下の家の人間は基本的に罰せられない。それは何故か、簡単なことだ。人とかかわりを一切切持たないがために、『その存在が世界に認められていないから』だ。故に傘下の人間は孤独をその身全てに抱えている。存在が認められるのは各世界のみ、つまり貴様らの場合は、『白の世界の住民』のみとコミュニケーションが取れるわけだ。ああいや、傘下の人間同士も可能だったか」

他人と関れないこと。それが枷だった。だが黒住にはその気持ちとは分らない。

「ともかく、奴はどう考えても貴様らに似ていない。近親相姦によって生まれたのならば遺伝子は完全に白椿だ。それに加えて、奴は一般人と会話をしていた」

「……なんだと？」

男は本当に驚いた表情を見せる。それは黒住にとっては驚くべき出来事ではない。実際に白椿菊乃があ先の先輩と呼ぶ人物と会話しているところ見た時は、黒住自身驚きを隠せなかったのだ。孤立を喰って生きているような白椿が他人と楽しそうに会話をしている場面など、まさか有り得ようとは思ってもよらなかったのだ。

「残念ながら冗談ではない。どこの誰か知らないが、なかなか聡明な女だったな」

「馬鹿な……。君の推理は最もであると思うが、菊乃は私たちの娘で間違いない。白椿なのだ。なのに、何故……？」

言いつけでもあり呪いでもあった孤立は間違いなく菊乃にもあったはずであった。家に友人を連れてきたことは勿論、浮いた話など欠片も無く、いつも暗い顔で日々を過ごしてきたはずの彼女が、誰かに関ることなど有り得ないことだった。

孤立とは、孤独とは違う。

孤独は人の世界に良くあることだ。人との関わりが薄いだけで、基本的には友達と呼べるような人物はいるだろう。しかし孤立とは、世界と切り離されたことを言う。切り離された世界では常に一人、白椿はまさにその世界に住む人間だったのだ。

たった、たった一つの答えが存在すると思いませんか？

声がした。

黒住は声がしたほう、捕らえられている白椿の向こう側を見た。声の持ち主は、長い黒髪を風に棚引かせ、自分の見ている光景に何かを見ていた。

「黒住さんは言いました。履き違えてるって」

「……」

「あたしたちはどうしたって孤独。いいえ、孤立してたんですよ。それじゃあどうしたって友達なんか出来るわけないじゃないですか、因果ですよ因果」

「何故、貴様がここに……」

黒住は苦い顔をする。予定外だった。彼女がここにいることは、黒住にとっては最悪のシチュエーションだった。そんな黒住を完全に無視し、彼女は続ける。

「元からあたしたちの周りには何も無かった。なら、どうすればあ

たしは孤独で無くなるのか。簡単じゃないですか、『同じく孤立した人を探せば良い』」

白椿菊乃は、どうしてか涙を浮かべていた。

23、親子と夫婦

すべての人間がその存在に首をかしげ、唇を噛んでいた。白椿菊乃はその中で威風堂々と親の前まで歩み寄ってきた。そして黒住を一瞥する。その視線に威圧を感じた黒住は小さく舌打ちし、白椿夫妻を取り押さえていた男たちを撤去させ、三人から距離を取った。ここからは自分の出番ではないと悟った。

菊乃はそれを確認すると両親に向かって静かに頭を下げた。

「お久しぶりです。お母さん、お父さん」

それを聞いて夫妻は面を食らった。

「お前、その呼び名は」

「黙ってください」

菊乃は凜としていた。もはやここに怖れるものなど何も無いというように、誰の言葉行動にも微動だにしなかった。その眼は自分の愛すべき憎き両親に常に向けて、ただつらつらと言葉を並べるように語る。

「あたしたちは、結局何がしたかったんでしょうかね。他人の命を奪って、それで自己満足して、実はだからといって何も無いことを悟っていて、それでも止めずに人を殺して。それで、結局何を得たんでしょうかね？」

菊乃は自分のすべてに疑問を持っていた。何故自分がここにいるのか、何故自分がこのようなことをしなければならないのか、理不尽の中に立ち尽くして、何も出来ずにもがいていた自分は何だった

のか。それは、たった一つの堤防で抑えられていただけだった。

文献を読んだ。真実が砂のように転がっていた。それでも彼女は両親を信じ続けた。それは、それでも彼らは家族であって、自分に正しい道を示してくれるものだと思っていて、運命に身を任せていたからだ。しかし、彼女にとつての堤防は昨晚の血みどろの彼らの姿で崩れさった理想に現実が押し込み、あつという間に彼女の心は荒んだ。

一番信頼できる、たった一人の友人の元に駆けつけた。彼女は、とても優しく、そしていつでも真実だけを見て伝えてくれる人だった。菊乃はそんな彼女に泣きついて、胸のうちを語った。それが、最後だった。

「昨日の夜、何があつたんですか？」

突き放す口調で菊乃は目の前の男女に声をかけた。もはや彼女の中で、二人はだたの男と女でしかなかった。

「お前なら理解してくれるだろう。白椿のしきたりだ。呪いを解くために、私たちの味方を作るために、沢山の人を浄化してきたのだ」「そうよ菊乃。昨日は貴方にも見せようと思っただけど、ごめんなさいね。どこかに行ってみたみたいだから……それを怒ってるなら」

「黙れって言つてんだろが!!」

瞬間だった。菊乃の声が荒くなった。

「御託をぐだぐだぐだ言いやがつてさあ、あたしはそんなの聞きたいって言ってるんじゃないって知ってたんだろ？ あたしはね、怒ってるんじゃないんですよ。泣いてるんですよ。自分の、じ、自分の両親が、帰ってきたら、血みどろですよ？」

声に嗚咽が混じり始めて止まらなくなる。けれども、決して涙は流さず、表情は怒りに震えたままだ。

「想像出来ますか、ね？ ああ、貴方たちは見てるんですよね、先代の人のに……うつ……。でも、でもですね、あたしは普通の女の子なんですよ？　じ、自分で言うのもなんですけど、これでも、親のことは慕って……っ」

黒住が後ろからもう良い、と菊乃の肩を叩く。慈愛に満ちたものだった。菊乃はギリツと音が鳴るほどに齒を食いしぼり、両親に背を向けた。酷く孤独な背中だと黒住はそれを見て思う。嗚咽に震える肩は、それに泣く子どもようだった。その後も支離滅裂な言葉で誰を攻めるわけでもなく、ぼろぼろと涙を零す代わりに両親に向かって何かをぶつけていた。不満にも聞こえるし、文句にも聞こえる。だが、黒住にはそれが泣き言にしか聞こえない。目の前にいる当の両親は、その必死の訴えを聞いてもいなかったからだ。

齒が音を立てたのは黒住のほうだった。家族というものから長らく離れていた彼にとってもこの光景は理解しがたいものだった。子が訴え、親は自分のことで精一杯でそれを聞きもしない。酷いのは世界のシステムだけではなかったようだ。白椿夫妻自体が狂っていた。

「何を……しているんだ。貴様らは」

声を怒りの中から絞り出す。その声に夫妻は顔を始めて上げた。

「貴様らの娘が、こうしてここに来て、貴様らに言いたいことがあると言っているのだぞ？　それを何故聞かない、何故受け止めようとしんない？」

「な、私たちは聞いているぞ」

「ほざくな。脱出経路を調べていたのだろう？ 眼が泳ぎまくりだ。じっとしていれば逃がすから、今は彼女の言葉を聞け」

「くっ……。黒住の言うことなど信じれるわけが無いだろう」

黒住は一度ため息し、言った。

「なら今一度言おう。俺の発言に嘘は無いが、主に悪意で出来ている」

「……本当だな？」

「ああ」

「……良いだろう。どれ、菊乃、話してみなさい」

そう夫の方が菊乃に言う。が、彼女は全く振り向くそぶりを見せずになだれている。

「へへっ」

その彼女から自嘲するような声がした。事実笑っているのだろう、肩がかすかに上下していた。

「分かってましたよそんなこと。そうですか、あたしの言葉はもう、こんな黒いおじさんを介してでしか聞こえなくなっちゃったんですか。なんていうか、あんたたちがあたしの言葉を聞かなかったことよりも黒住がそういうこと言うほうが以外に思えてくるくらいしくりきましたよホント。病気なんですよ、この世界もあたしも、あんたたちも。どこもかしこも腐ってるんですよ。家庭なんて、とつくに崩壊してたんですよ」

分かりきっていたことだった。たった一つの繋がり、それは夫婦

というものだった。つまり、親子ではなかったということだ。白椿菊乃が感じていたかすかな最後の繋がりには、単なる勘違いだったのだ。それがどうしてか今の彼女には酷く滑稽な過去に思え、思わず笑みを漏らしていた。結局自分は突き放され、突き放してただけで、何とも繋がっていなかったのだと分かってしまった。

因果の鎖は、運命に巻きついていただけだった。

「恥ずかしいとは思わないのか？」

黒住の口が開いた。

「貴様らの家族が崩壊しているのを娘に指摘され、腐っていると云われ、病気なのではないかと疑われ、親としての威厳は無いのか？」

白椿夫妻は顔を伏せた。多少の酌量の余地はあるだろうと、黒住も見計らっていた。

が、それも単なる希望で終わった。

「私は、私たちは呪いから解放されなければならないの」

妻が重々しい表情で語る。

「白椿は呪いをかけられているから、一代一代をかけて段々とその呪いを浄化して、普通の人間になるのが私たちの願い。それを止められることは、娘であろうと許されるべきことではないわ」

「それが被害妄想だと……」

「黒住さん」

菊乃が黒住を遮る。その瞳には既に諦観の色だけが浮かび上がっている。

何を見ているのだろうか。菊乃の視線はどこか彼方へ、そしてつぶやいた。

「『因果応報』、じゃないでしょうかね」

24、運命考察

轟音が空に響いていた。空気全体を震わすようにして飛ぶそれは飛行機だった。現在成田空港が全便欠航なので、恐らくは羽田に向かうものかそれ以外かだ。横で黙々と歩を進める灰田も少しだけ空を見上げていた。

私はあのあと、灰田の頃合いだという合図を聞いて彼と成田空港に向かうことになった。何があるのかは全く想像もつかないが、強いて挙げて私にとって良いことではないだろう。予想でも勘でもなく事実だと胸を張って言える自信が私にはある。言うまでもなく灰田の提案だからだ。

成田空港の中は異常とも言えるほど閑散としていた。昨晚見た二ユースのゴーストタウンのようだ。受付もいなければ乗組員などいるわけもなく、世界宣言で空港を閉鎖してもここまで静かになるだろうかという大袈裟な疑念まで持たせてくれる。灰田と私の靴音だけが不気味に響いていた。窓の外を見れば目に眩しい曙光が照りつけ、それを遮るものは何も無かった。また映画のフィルムにこの不可思議男と閉じ込められたようで気味が悪かった。

「君は……」

唐突に灰田が口を開く。照りつけるオレンジ色の光を銀色の髪が吸い込んでいた。

「君は孤立というものを体験したことがあるだろうか？」

「孤立……？ 微妙なところね。身の回りには沢山の人がいたわ。かと言って心を許せる人がいたわけじゃない」

「物質的に満たされ、精神的には満ち足りなかったと解釈して良いのかな」

「別に精神的に余裕が無かったわけじゃない。でも孤立なんて言われるほど世界から切り離された覚えも無いだけよ」

「世界から切り離される、か。やっぱり君は他とは違うね。孤立と孤独の定義の違いをわきまえてる。普通じゃない」

「あんたに言われたかないわよ」

それもそうかと灰田は薄く笑う。本当に自嘲しているようだった。そのうち空港を進んで滑走路に出る道を見つけ、外に出た。見渡す限りの広大なアスファルトの砂漠に思わず息を呑んだ。空港に来たことは何度かあるが、ここまで閑散としてるとまた別世界のように感じる。この世に無機物しかない虚無感が私の背中を駆けた。飛行機は廃れたバスのように、滑走路は南アメリカ方面にありそうな熱帯の一本道のような。普段見慣れた光景から人が消えるだけでここにも変わるものかと私は感心した。

その永久に灰色しか無さそうな世界に色が存在したのを私は見つけた。灰田は横で腕を組んで、すでにこれ以上進む気は無いようだった。

色と言っても赤や青のような彩りのあるものでは無い。黒と白、そう表現するに相応しい人間がそこにいる。

「……どうして」

思わず私は呟いた。言葉を失う状況といったら今しか無いと思うのだが、頭の中には声に出したいと思う疑問しか浮かばない。自分でも珍しいと思うほどの焦りを感じて灰田を振り返った。

「これは、あんたが仕組んだのね？」

灰田はまるで劇の観客のような無関心さの振る舞いで淡々と答える。

「人聞きの悪いことを言わないで欲しいね。僕がやったんじゃない。君がやったんだ」

「わた……し？」

灰田の言葉に私は思わず素で顔をしかめた。

「そう、君だ。確かに仕組んだのは僕だが、引き金を引いたに過ぎない。火薬と弾丸を詰めて指をかせさせたのは君。白椿風に言うなら因果かもしれないね」

「一体何を言つて」

「しらはつくれるなよ優等生」

空気が一変した。あの恐ろしい目だ。他人の奥底を断りも無くスコップで掘り出そうとするような気色の悪さ。だが本当に何のことだか私には分からず、口ごもることすら出来なかった。

「壊したいんだろう？ 白椿自身を。打開したいんだろう？ 満足の行かない現状を。ならば行けばいい。あそこにいるのは白椿菊乃にとって憎き両親だ。彼女を壊し、孤立させた張本人だ」

「黒住は、何故黒住がいるの」

「ふふつ、本当に顔の広い優等生だ。だがいささか思考が鈍ってるみたいだね。黒住は、白椿は何だい」

言われて私は黒住の言葉を思い出した。彼は確か自分のことを『刑事』だと表現した。そう、私には何らかの比喩にしか聞こえなかったが事実上今の光景は、白椿さんの言葉、『私の両親が昨晚の連続殺人の犯人』が本当だとするならば容易に状況の説明つくではないか。刑事と犯罪者。何ら不都合の無い組み合わせだった。白椿菊乃自身もその関係で私がいないうちに呼ばれたに違い無かった。彼女を救うと決めたというのになんという体たらくだと自分を貶めた

くなる。

もう一度彼らのほうを見た。四人の男女が睨み合い、一組の知らない男女が組伏せられている。そして白椿さんの背中と、何故か驚愕に打ちひしがれている黒住の表情が見える。

「黒住は、白椿の両親を殺すつもりでいるだろう」

「なっ」

「驚くことも無いさ。彼は敬愛していた師を白椿に殺されている。簡単に復讐と取れば納得の行くことだよ」

「黒住がずっと追っていたのは白椿さんの両親だったってわけ……。確かに酷い因果だわ」

「その因果を繋げてしまったのは他でも無い誰かさんだけどね」

「だからどういふことなの。遠回しにしないで言いなさいよ」

「言ってるだろう？ 良く考えれば分かることさ彼女の口癖であり人生であつた『因果』とは、原因と結果のみで構成されるんだ。起きるはずのなかった現状を作った変化、つまり原因があつた。彼女の人生の中で最も大きな変化とはなんだ？ 孤立していた彼女の横に立っていたのは誰だ？」

そこで私は一つの可能性に思い当たり、はつと息を呑んだ。

「……そんなまさか、有り得ない。上手く繋がりすぎじゃない」

「因果は基本的には閉鎖的だ。けどそれを人生と掛け合わせると話は別になる。肌を切れば血が出るのは因果。血が出れば収まるのも因果。しかし、他人と関わる因果はまるで大樹の枝分かれのような結果を出す。百も二百もある結果など誰が予想出来る。君と彼女が出会ったことは、中でも更に特異な原因だった。なら原因が特異であれば結果も特異である。言わせれば因果さ。肌を自分で切ることには実験でしかない。が、肌が切れたのが人生における偶然の産物だとするならば、それだけで死に至ることも可能性として提示出来る

ようになる。僕に言わせれば『運命』としか言いようが無いよ」

彼女が似合わないと言った言葉を平然と使ってみせた。

「彼女は人生における結果論を全て原因によるものだと思っている。しかしそれは間違いだ。さつき出した例もそうだけど、因果関係は物質的なものしかありえない。時間的なものに因果は決して発生しない。彼女の主張はとくに破綻している」

「定義そのものから間違っているわけね」

「そう。人間の時間的な結果は常に偶然でしかありえない。例えば昨日に約束を取り付けていても、本質的に考えれば『たまたま用事が入らなかった』に過ぎない。そこに確定した事象は絶対に存在しないのさ」

言いたいことは十二分に理解出来ていた。元より気付いていなかったわけではない。私が以前、白椿さんに何故そのような口癖なのかと問うたのはそういう意味合いも含めていた。彼女の言う因果とは、私の頭の中にある辞書とは差異があつた。若い人の良くある言葉の間違いだろつと見過ごしていた。

しかし、彼女はこうも言ったのを私は覚えている。

白椿菊乃には運命という言葉は似合わないと。

灰田が言うように、時間的な経過による人生の結果とは偶然しかありえず、偶然をロマンチックな言葉に変換するならば運命だ。彼女は運命は似合わないと言った。つまり、『運命』という表現が本当は正しいことを知っていた』に違いなかった。灰田のおこぼれとはいえ、私にも段々と白椿菊乃という人物が理解出来そうな気がしていた。

「なら何故彼女は因果という言葉を好んだのか」

灰田がまるで私の思考を読んだように続ける。

「もう一度言おう。彼女はそうして信じて疑わなかった。無論、本心は僕には察せ無い。だが一つ分かることは、彼女は運命に喧嘩を売っていた」

「白椿家の呪いね。彼女から話は聞いたわ。ついでに言っと、あんなたちのわけの分からない家の関係もね」

すると灰田は心底嬉しそうにほう、と相槌を打った。

「正直それを知られたところで僕には何ら問題ない。……話がずれたね。白椿菊乃は知つての通り自分の運命には半ば諦観していただろう。他人との関わりを極限まで断ち切り、自分を押し殺していた。あえて褒めるならあの元気っ子気質が失われなかったことかな。普通は根暗になってもおかしくはないんだけど」

「十分根暗だったと思うわあの子。あの年頃の少女にしては世界を達観し過ぎてるし、何より本気で悩んでみたいだしね」

「それを言うなら君はどうなんだい？ 達観し過ぎてるという意味合いで言えば君は究極的だ」

「私は優等生だから」

それだけ言うとき灰田は一瞬微笑んだ。まさに、その答えを待っていたと言わんばかりの満足げな表情だった。

「続けるよ。ともかく、彼女は一度白椿の運命に負けていた。……けど、彼女は君と出会って可能性を見出した。恐らくは因果なんて言葉を使い始めたのも最近だろう。そして彼女はさも当然のように無意識のうちに、『君という原因に自分の自由の結果付けた』」

「……それが、彼女の因果の全て、ってわけ？」

「そして彼女の運命の全てでもある。君は運命論はどう思う？」

「全ての事象は最初から決まっているって理論ね。ある意味では宗教の延長線上にある理論だと思うわ。……まあ、どうやっても知ることの出来ない不確定要素を結論にすることは出来ないわ。ノストラダムスの予言も外れたわけだし、正直納得するに値しないわね、勿論個人的意見だけど」

「十分だよ。なら僕の意見も言おう。僕は運命は存在すると信じている。いや、実際最近までは僕も君と同じだったんだけどね。見事に僕の目の前で予言を当てた人物がいたものだから考察し直したんだ。まあそんなことはとうでもいい。本題だけど、君の言うように不確定要素、しかも未来の出来事なんてもはや神にしか分からないだろう。が、逆に考えてみれば『運命が存在しないと云える根拠も無い』はずだ。元々運命は定義からして不安定なものだ。よって僕は運命はイコール未来だと定義した。つまり、今ある出来事、これから起きる全ての事象は運命と呼べる」

「……それは理論から逸脱しているわ。運命っていう存在自体の有無を聞いているんじゃない。その性質についてだわ」

「都合だよ」

「……都合？」

いきなりの言葉に私はオウム返しになる。

「都合さ。人間の世界は須く都合で構成されている。都合の良し悪しによって人は簡単に何かを曲げてくる。そんな絡まったケーブルのような世界に理論なんて入れる隙はない。つまりは運命自体の有無は人それぞれだが、運命論自体は破綻している」

私はついに頭がついてこれなくなり、手のひらを灰田に向けて待ったした。

「つまり何が言いたいわけ？」

灰田は急に真剣な顔になって答えた。

「人の都合によってところどころ運命は左右されるように、白椿菊乃の因果も同様に左右される。つまり、今の状況は果たして右と左、どちらに傾いていても、何が起きるかなど絶対に分らない。人、それを因果とは呼ばない」

「……」

「しかしここまで語っておいて何だけど、因果は存在する。九十九パーセントは完全じゃないが、不動と呼んで差し支えないだろう。これからの因果を作るのは君だ」

私は遠くを見た。夕日が地平線に沈む光景の少しこちら側、四人の男女が何かいざこざしている。一人は白椿さん、一人は黒住、そして今黒住に命を握られている一組の夫婦。その光景が、一刻一刻と動き出すのを待っている。

白椿の呪いの正体は定かではない。

彼女は目の前で起きた交通事故を自分と出会ったせいだからと言った。その時の表情は真剣極まりないもので、普段なら漫画の読みすぎだと笑い飛ばせるものも絶句するしか私には出来なかった。もしかしたらその時には既に私は何かを察していたのかもしれない。いや、もし気付くタイミングがあつたとするならば更に前だ。そう、初心に帰ればよくわかること。

ただ単純に、彼女らは普段ではないと。

と、私がもたもたとそのような思考を繰り返している時だった。突如、飛行機の轟音に引けを取らない鈍い音が空に、地に、耳に響いた。流石の灰田も首を上げて四人のいる滑走路中央付近に目を向ける。そして、その事態を見ていた私は一瞬の硬直のあと、大きく吐息を吐き出して走り始めていた。

拳銃が、発砲された。

25、終劇の白黒

何故、このような結末を迎えてしまったのか、私には全く解せなかった。息を上げて駆けつけた時には既に遅く、額から黒い血を流す一人の男性がか細いうめき声を微かに、呼吸しているのと何ら変わりない大きさを上げている。その横で顔面を青くした女性が悲鳴を甲高く上げた。耳も目も塞ぎたくなるような光景だった。

「……あ」

状況を未だ掴めていない少女が思わず無意味な声を発した。私すらも言葉を失っている。いくらなんでも刺激が強すぎた。白椿さんと同じようにアスファルトの上に膝を崩した。いや、崩れた。当の発砲した黒住は中で一番澄ました表情をしていた。自分がした行為に一点のミスも、間違いも、後悔も無いといったように目の前の惨状をなんでもなさげに見ている。彼の瞳は何色にも染まっておらず、強いて言うなら真っ黒だった。数分してやっと落ち着いてきたのか、体の震えは収まってきた。しかし黒住に何かを言おうとすると、力チ力チと歯が音を立てるだけだった。そこで初めて自分が腰を抜かしていることに気付く。

「何も今殺すことは無かったんじゃないか？」

後ろでいつの間にか灰田が静かな顔で黒住と対立していた。しかし当のこちらにも特に感慨は無いように見える。やはりどう考えても普通ではない。私と白椿さんを置いて会話は淡々と進んでいく。

「今殺すことは無かった、か。その言いぐさで行くなら俺は今殺しても何ら問題は無かった。だが正直俺には何故この男が死んだのか

理解出来ん」

「というと？」

「拳銃は二丁。一丁は未だに俺の懐の中だ」

ほう、と灰田が興味深そうに言う。黒住は私たちの目の前で懐から拳銃を取り出し、『六発入った弾を全て出した』。

「この拳銃には弾は最高六発しか詰められない。言いたいことはそれだけだ」

「つまり他の誰かが撃ったと？」

「違う。もう一丁はこの男自身の腰に下がっている。つまりは自殺だ」

段々と覚めてきた私は横で放心している白椿さんの肩を叩いて聞く。

「それは、本当？」

「……」

案の定答えは返ってこない。

だが、すぐにでも黒住に飛びかからないところを見れば予測はつく。自殺したのだろう。頭の混乱が次第に収まり、自分でも不思議なくらい冷静さを取り戻しつつあった。熱湯をドライアイスで冷ましたってこうはならないだろう。膝に力を入れて灰田の横まで下がった。今までの位置にいと血なまぐさい臭いが鼻につくからだ。

「何故彼は自殺したんだい？ 君が催促したんじゃないのか」

「催促したという点で言えば、誰だってこんな状況死にたくなる。

一部始終を見ていたのなら分かるはずだ」

「残念ながらそこまでは見てないんだよね」

「……どうでも良いことだ」

もはや興味も失せたのか、黒住は身を翻して空港に戻ろうと歩を進めた。

「呪いよ」

突然女がそう言った。黒住の足が止まる。たったその一言で、ここにいる五人全てが頭のスイッチを切り替えたように表情を変えて女を見る。私も同じだった。

女の顔はまるで甘美に震えているようだった。目の焦点が全く合っていない。ホラー映画に出てくる何かのウイルスに感染して狂った化け物に似ていると率直に思う。事実、彼女は『呪い』というウイルスにやられているようだ。

「夫は引き金なんか引いてないわ……呪いよ、白椿の呪いが夫を殺したんだわ……ほら、見なさい。見たでしょう？ 夫が血を吐く様を、白目を剥く様子を……！」

軽くヒステリックを起こし、勢いよく正面にいた白椿さんに飛びかかった。

「ひっ………！！」

「ねえ菊乃、今度はあなたの番よ。白椿のしきたりを守り、使命を実行し、私たちの『白の世界』を実現するのよ！」

「お、お母さ………止め」

本人は気づいていないのか、女は白椿さんの首に手をかけて大きく揺さぶっていた。私は流石にまずいと思い、即座に女を引き剥がしにかかる。が、ヒステリックを起こした人間はまさに火事場の馬

鹿力だ。全く離れる気配が無い。

「ほら見たでしょう菊乃！？ 呪いはあったのよ、私たちを殺す呪いは存在したのよ。どうしたって回避出来ない運命はあったのよ！」

女の馬鹿力に爪が痛んだ。今更切ってくれば良かったと後悔する。肘が顔面をかすめた。装飾で頬から冷たい血が流れるのを感じた。女の髪の毛から血の臭いがした。自分のものではないとすぐに理解した。白椿さんの表情が限界に近付いている。私は祈るような気持ちで後頭部を拳で強打するが、やはり倒れてはくれなかった。

コツ、と、革靴特有の音がした。

「いい加減にしろ。クズが」

拳銃の発砲音、一つ。

「良い歳して呪いだの運命だのほざいてんじゃねえよ」

拳銃の発砲音、一つ。

「その被害妄想がどれだけの人間を死なせたと思ってる。貴様らの身勝手な行動がどれだけの人間を叩き落としたと思ってる」

拳銃の発砲音、一つ。

「しまいには自分の娘すら手にかけるか？ 狂ってるのは、家だけにしろ！！」

拳銃の発砲音、三つ。

一つの音が鳴る度に私の前で鮮血が噴水のように上がる。最初に左腕が飛んだ。次いで右腕が飛んだ。白椿さんが咳き込む中で、女は吐血した。最後には花火のようだった。女は男と同様にアスファルトに身を打ちつけ、絶命した。返り血を浴びた私は自分が殺人犯のような錯覚を覚えながら後ろに下がる。もはや黒住に席を譲る他ない。今の彼は、私の私見であるが相当に怒っているように見えた。それが意外にも意外だったために、ある種の畏怖すら感じてしまうほどだ。これが本当の黒住なのだと、直感で理解する。

黒住は死に絶えた女と男の近くに寄る。が、何をするわけでも無く一瞥しただけで白椿さんの元によって手を差し伸べた。

「どれだけ人間が気張って、どれだけ人間が努力をしようと、天才と神には適わないものだ。俺はこの場で宣言する。俺は、黒住の名前を捨てよう」

そこにいた全員が黒住の方を見た。灰田だけは特に意外そうな顔はしなかった。白椿さんは何を言っているのか全く分からないと言った様子で差し伸べられた手を見ていたが、急にやわらかくなった黒住の表情に心を許したのか、おずおずと手を握った。そのまま立たされると、そのあとすぐに手を離れた。

黒住はそれに特に感想も無いように身を翻し、灰田の前で止まった。

「貴様の勝ちだ。俺は師のようにはなれなかった。やはり、どう考えても『正義』と『悪意』は相反する。客観的だろうが主観的だろうが、結果論だけ語れば無理な話だったのだ」

「なあと、僕としてはかなり近づいてたと思うよ。先代の彼女も黒住の血筋を完全に引き継いでるのに悪意なんて微塵も感じなかったからね。嫌な意味で、はね。いやらしい意味では塊のような人だったけど」

「ふん。弟は師に似るか」

「……最後に手を汚して、どうするつもりなんだ。君は僕らのようないわゆる『異端』じゃない。れっきとした一般人だ。罪が発覚すれば間違いなく務所行きだ。それにここじゃ発覚するのも時間の問題だろう」

「ならば問題あるまい。俺は貴様らとは違う。黒住のために築いてきたものを最後に行使すればいいだけの話だ」

「……それはそうだったね」

「結局、人間には貴様らのように完全に『自分を壊すこと』なんてできないということさ」

その後の話で分かったことであるが、黒住儀軋は白椿菊乃や灰田純一のように正統に血を受け継いだ家のもではなく、先代の黒住の弟子だったらしい。しかしその先代も白椿の『事故殺害』の巻き沿いをくらい死亡、跡取りがいなくなった黒住の家を引き取ったのが彼だという。元々黒住はいわゆる『賊』であり、他二家のような天才肌が揃ったものではなかったらしい。ゆえに、彼らの信条であった『自己破壊』とは、自分の善意と感情を粉々にすることに他ならなかった。人が嫌がること、人を嫌がらせること、そういう当然の感情を異端に与えるのが彼らの優しさであり、最大の自分への嘘だった。結局、黒住儀軋の言動は嘘しかなかった。ただ灰田が言うに、彼の褒められる点は、人間でありながらそれ以上嘘を重ねなかったことだという。汚く知能の歪んだ人間にとって嘘とは呼吸することと同じであって、人の世に生まれてきて嘘を百つかないものなんて珍しいのだと。むしろ、その点を取れば彼も立派な『異端』だったのかもしれない。

究極の善意の塊、それが黒住の悪意だった。

後日談であるが、あの殺人事件と成田空港での出来事は綺麗さっぱりと黒住の手によって処理されたらしい。元々本物の警察とも関わりがあつた黒住に成せるワザ、地位を上り詰めた人間特有のワザだね、と灰田はおかしく笑っていた。

成田空港の一件については、数年前の復讐のようなものだったらしい。黒住は『再現』と言っていたが、その事後を知る灰田に言わせれば全然違つたらしい。黒住の師は空港を全面閉鎖するという偽造を仕掛け、ジャンボジェット機で白椿をひき殺そうと企んでいたらしいのだ。それは失敗するだろうと私はユーモアのある黒住の師に脱帽した。

その後黒住の行方は誰にも分からなくなった。どこか辺境の地へ旅立つたのかもしれないし、その権力を使って人間らしく遊んでいるかもしれない。何はともかく、もう私と関ることは無さそうだった。

白椿さんは酷い親だったとはいえども両親を失った痛みは大きかつたらしく、その後数週間は家に引きこもりっぱなしだった。元々孤立していたとはいえ、一番太かつたつながりはやはり家族だったのだろう。それでも黒住を恨まないと誓い、自分の中だけで解決するのはある意味では本当に強いと思う。元気な声で学校で挨拶を交わしたときに私はそう思った。灰田に言わせれば白椿の家は固定観念に取り付かれたがゆえに、意識の力が強く働いていたのだと言う。つまりは火事場の馬鹿力だ。代々から呪いの内容を受け継いできた家は、まるで一つの宗教団体のような結束力と意志力の強さをつけていた。その間違いに気付くことすら許されないほどに、だ。そう思えば白椿さんが私との出会いでそのことに気付くというのは本

当に不思議な運命によって左右された因果だと思う。本当に、因果だ因果。

「いいんちよー！」

クラスのドア側のほうから男子生徒の声がした。委員長というのは私のことだ。昼ごはんを同席していた友人たちが行ってらっしゃいと私を催促した。ドア側にいる男子生徒に用件を聞くと、廊下で誰かが私を呼んだらしい。ニヤニヤとしながらそう言う様子が気持ち悪くて思わず引いた顔をしてしまったかもしれない。

「で、誰が呼んでるって？」

「ああ、灰田って奴が呼んでる」

どうやら私はついに、彼の劇に出演要請が来たようだった。

26、回り始める齒車

「全く横暴だと思いませんか先輩！ 高校生になってまで宿題宿題って、あたしももう子どもじゃないんですから。あー、あの教師の髪の毛何かの因果で禿げないですかねえ、思いっきり笑ってやるのに」

あれからもう一ヶ月の時が流れようとしていた。灰田は相変わらず何かとちょっかいを出してくるものの、特別おかしい出来事があったわけでもなく、私はこうして白椿さんと放課後の談笑を楽しむだけの坦々とした毎日を送っている。白椿さんは現在実質上一人暮らしとなっていたのだが、私が週に何度か訪問して食事などとともにしている。彼女のことであるから、犯罪に巻き込まれたとしてもどうにか出来そうではあるが、今まで関ってきたのだからついにと私もそのライフを楽しませてもらっている。黒住はあのあとから消息を絶ったと思っていたのも束の間、数日前の私が馬鹿らしく思えるほどに何事もなく姿を現した。彼曰く、一度は放浪も考えたらしいが、結局ある理由があつて戻ってきたらしい。ある理由というのは何だか分からないが、どちらにせよ私には関係の無さそうなことだった。

「というわけでマック行きましょう先輩」

「……どういうわけで？」

「いや、立ち話もなんですしね」

「でもあそこ、黒住が良く利用してるから危ないわよ？」

「あー……やっぱそこらのファミレスに」

と、言葉を濁したとき、後ろから声がした。

「なかなか酷いな白椿。コーヒーの一杯くらいなら奢ってやったというのに」

「うわっ！！いきなり出てこないで下さいよ！　っーかなんでこんなところにいるんですか」

「気まぐれだ。無論、この言葉に嘘は無いが、主に悪意で出来ている」

「……なんか怪しいっすね」

「クイズだと思え」

「ていうか、黒住の名前を捨てたのに、まだその口癖みたいなのは使ってるんですか」

その問いに黒住は少しだけ表情を濁した。何かものうつげ感じである。

「……癖になった」

「は？」

思わず私も黒住を見た。

「なに、五年も六年も自分を偽っていれば、自然と身に染み付いてしまうものだ。『自己破壊』がもたらしたものは少なく無かったということだ」

「ふうん。まああたしも『因果です』っていう口癖直ったかと聞かれたらそれは悩めますけどね」

つい一ヶ月前までは考えられないような談笑の光景だった。まず白椿さんと黒住が進んで会話を成立させていること自体珍しい。あの日以来、白椿さんはことなく丸くなったところがある。といっても人間性とかそういう問題ではなく、単純に黒住という人間に対しての話であるが。

しばらくそのまま歩いていると、ちょうど大通りに入る角に差し掛かったところで白椿さんのスカートのポケットから振動音がした。話し込んでいた黒住がそれに気付いて言う。

「おい、鳴ってるぞ」

「はいはいわあつてますよ。……もしもしー？」

一度立ち止まって電話に耳を傾け始める。内容からして何か目上の人と会話しているようだ、語尾が不自然に敬語になっていた。その光景を見て私は思わず笑みを漏らした。以前まで一人で生きていけると信じていた彼女がこうして誰かと会話をしているのを見るのはまさに変わった証拠を見せ付けられているのだ。私は黒住に寄って話しかける。

「ねえ、彼女変わったわよね」

すると黒住も感慨深そうに答えた。

「そうだな。正直に言えば、俺は奴の親を殺したことを多少後悔している。というのも、それで奴が塞ぎこんでしまったら逆効果だからな」

「そうね。……ぶり返すようで悪いけど、あの日のことを少しだけ聞いて良いかしら？」

「構わん」

「……成田空港での一件、まあどうやって秘密裏に処理したかは聞かないわ。そうしてもらったほうが私も有利に働かし。問題は、『白椿の呪い』についてよ」

黒住もその言葉には反応を見せ、ゆっくりとこちらに顔を向けた。真面目に話を聞いてくれるようだ。

「科学者思考……」ってわけじゃないんだけど、私も呪いとか神とかはあまり信じてない主義なのよ。いえ、その存在自体は多少認めても良いけれど、それが世界に影響を及ぼす存在かと問われればの話ね。それで、あの臼樫さんのお父さんの方は謎の死を遂げてる。まさか、あのまま呪いで片付けるつもりじゃないでしょう？」

「ふん、そんなこと考えなくても良いだろう。奴らの被害妄想であり、完全なる自害だ」

「いいえ違うわ。あれは自殺なんかじゃなかった」
「言い分を聞こう」

私は頭の中の光景を整理しながら自分の推論を披露し始める。

「まず、自殺に使われたのは間違いなく拳銃。それは確かよ。けれどあの場は自殺現場にしてはあまりにおかしかった。そのためには根拠が少し足りないのだけど、一つ可能性を挙げるなら『拳銃は二丁じゃなかった』。これは、まったく自信が無いわ」

「俺の持っていたものと、夫が持っていたものと、もう一つあると？」

「そう。何故ならあの時は安心してたから全く気付かなかったけど、彼女のお父さんは拳銃なんて持ってなかった。あったのは血の水たまりだけよ」

「それは貴様が単純に見落としただけではないのか」

「そうね、そうかもしれない。実際言ってしまうと、私がこう思っている原因はある一つの結果が付きまってる。逆算思考ね。私は臼樫さんのお父さんを殺したのは、彼の妻じゃないかと思ってる」

黒住が黙る。

「教えて欲しいことがあるの。もしも拳銃が二丁であったならば、

貴方はその拳銃を『どちらに持たせていたの?』」

「……………」

「女性っていうのは男性と比べて中毒性のあるもの、宗教的なものに対して多少熱狂的、いえヒステリックって言ったほうがいいのかしら。そういうものがあると思うのよ。だから貴方は元からこの結末を予想して、妻のほうに銃弾の入った拳銃を持たせていた……というのは過剰な演出の見すぎかしらね。お母さんが娘に『固定観念』という『呪い』を植えつけるための過剰演出、そう考えればすべての事象に納得が行くわ」

少しの間沈黙が流れた。黒住はゆっくりと吐息を吐いて胸ポケットから見慣れたミラーサングラスをかけた。夕日がまぶしい時間に入っていた。

黒住は今まで溜めたものを吐き出すようにして話し始める。

「つじつま合わせ……にしては異常な根拠と信頼性のある推理だ。そして問いに答えるならば、貴様の推理は大正解、ということになる。拳銃は二丁だったが、……まあ誘導尋問に乗せられたといったところか」

「……………やっぱり」

「だが、一つだけ違えている点がある」

「それは……?」

「俺がこの劇を調整したわけではないということだ。俺は二人ともを射殺するつもりだった。だが、一人は勝手に死んだ。ただそれだけの話だ。女のほうに銃を持たせたのは男に持たせるよりも勝機が高いと見たからに過ぎない。これは言えば、単なる因果応報だっただけの話だ」

「因果、応報」

言葉にしてみれば、実に納得の行く結論だ。目には目を、齒に齒

を。人を殺せば、人に殺される。なんという綺麗な回り方をした歯車だろうと私は思った。

人生は歯車に例えられることが多い。運命の輪、輪廻転生、人との関係、因果応報、何もかもが繋がって一つになっているという例え。自分という世界舞台にして様々な登場人物が自己主張し、他人を認め、そうして造られる本当の自分。

（なら、私は一体どの世界の歯車に巻き込まれているの……？）

それは勿論白椿菊乃の世界であり、黒住儀軌の世界であるし、学校のクラスメイトの一人一人の世界に私は歯車の一つとして組み込まれていることだろう。だが、それだけではまとめられない何かがあることも確かだった。

自分という歯車が必要とされている世界がどこかにある。そんな気がするのだ。それが最近までは白椿さんかと思っていたが、どうやら先日のでそれは思い過ごしだと知った。だとするならば……。

「そつえば」

思考を中断させるように黒住が声を上げる。

「最近誘拐事件が多くなっている。それも全国規模という稀のパターンだ。東京都でも何件か起きているが、何よりも北海道から沖縄、それどころか話によれば中国やハワイのほうでも起きているらしい。誘拐というよりも身内では神隠し、なんていうまた根拠も無い現象が挙げられてくるくらいだ。貴様らも若い女性なのだから、気をつけたほうがいい」

「全国っていうか世界規模じゃないそれ……」

「何、偶然というものは重なるものだ。ここに規則性を求めるのは砂漠の砂からものを探すのと同様、五里霧中も良いところだ」

「そりゃね。全世界に渡って誘拐事件起こして何しようっていうのよ。革命でも起こすつもりかしら」

「さあな。まだ身代金要求などの事件にはなっていないらしいが、時間の問題だろう」

「ま、忠告感謝するわ」

ちょうどこちらの話が終わったところで、白椿さんも電話を切った。途中から怒声が聞こえてきたような気がしたが、案の定重い空気を背負ってこちらに来た。

「バイトのシフト無理矢理入られました……。今日は先輩と沢山遊ぶ予定だったのに！」

「無理矢理って……断れなかったの？」

「はい……なんかバイトの子が二人くらい無断欠席してるらしくて、人手が足りないらしいんです」

「最悪ねそれは。んまあ、承諾しちゃったなら早く行きなさい。次その無断欠席した子に仕事押し付ければ良いわ」

「りょーかいしました。んじゃ、また明日会いましょう！」

風が通り過ぎるように素早く白椿さんは走り去っていた。相変わらずの構成材料十割が元気な子である。見ていて微笑ましい以外の何ものでもない。

さて。

「用件を言いなさい。黒住」

既に陽は落ちている。しかし、黒住のミラーサングラスには暁光が微かに光り、それを反射していた。彼は何を言い出すのだろうか。

「『気まぐれだ。無論、この言葉に嘘は無いが、主に悪意で出来ている』ね。結局、つけてたんでしょ？」

「……聡明すぎる人間は正直好かない。貴様のような人間は推理小説には存在してはいけないと思うのだが」

「良いじゃない別に。ここはリアルよ。それに私はあんな天才探偵じゃないんだから」

「ただの……優等生か。良いだろう、要件を伝える」

自己破壊。

自己殺害。

自己崩壊。

セルフディストラクション。

そして彼は言った。

「俺とともに、この世界を壊して欲しい」

27、村と扉

その日から、村には平穏が訪れていた。殺人鬼はいまだに佇む灰色の扉へと吸い込まれていき、それが残ったということ以外は、手の消失も加えて全てが丸く収まっていた。

私は村の村長であるからして、そのような不安要素を残しておくのはどうかとも思ったが、以前と比べれば大分ましになったことには安堵を覚えずにはいらなかった。事実、あの扉が現れてから何日か経っているが、特に危害を加えるような産物ではないようである。

ただ一抹の不安はやはりあった。というのも、最近になってあの扉の向こう側に何かがあるのかと村の学者が気にし始めたことだった。あの扉には禍々しい何かが存在していると占い師は言っていた。それが確かか不確かかを確かめるためにも調べる必要があるとは思っているのだが、その圧倒的な威圧感からある一定の距離以上を詰めることが出来ないでいた。まるで禁断の地へ近付けさせないための魔法のようである。事実、私を除いたすべての村人はそこに近付けないでいた。

ある日のことである。その学者が一つの結論を導き出した。私はそれを聞いて激しく憤怒した覚えがある。

学者は『あの殺人鬼に似通った人間ならば扉の向こうを確認できる』と言った。しかしそれはつまるところ『悪事をしろ』ということに他ならない。村長としてそのような行為を許すわけは無かったが、学者も頑なだった。

「あれは異次元とのつながりを持っている。扉には表と裏しかなく、そこに続く部屋が存在していない。つまり、あの向こうには新たな世界が広がっていると断定して良いだろう」

「馬鹿な。三文小説ではあるまい、そのような幻想が現実存在す

るわけがないだろう」

「だから調査をすれば、すべての結果が出ると言っているではないか！！」

均衡状態のまま時間だけが過ぎて行つた。何度か学者は血で手を染めようと試みていたが、その度に私は邪魔をした。もはや彼は放っておけるほど冷静さを持っていなかった。

そんな日々を過ごす中、事件が起きた。私の村で神隠しが起きたのだ。さらわれたのは小さな子どもで、親は大層に悲しんでいた。

学者はそれを根拠も無しにすぐ灰色の扉にこじつけ、確かめるべきだと今まで以上に奮起した。私は始めはそれを必死になって止めていたが、事件はそれだけでは終わらず、一日に一人ずつ、この村から村人が消えていき、その様を見ているともはや灰色の扉を疑うほかはなくなってきた。次第に私は学者の行動を許そうと思うようになり、ついに学者は村人の一人の命を奪った。その様子といえば、まさに狂気としか言いようの無い光景であった。

学者は扉に近づくことが出来た。これには私も素直に驚いてしまった。

学者をまるで迎えるように扉が開き、彼はその中に姿を消した。言うまでも無いが、それから彼は帰ってこなかった。結果としてあの扉の中に何かあるかを判断することは出来なかった。しかし、それでも神隠しは続いた。

これでは殺人鬼がいた頃と何も変わらないじゃないかと、私は非常に焦っていた。村人たちの不安も大きくなるばかりで、安心する表情を見る日は二度と来ないのではないかと錯覚するほどに緊張に満ち溢れていた。

そして私は、その状況に我慢の限界を感じ、ついに暴拳に打つて出た。

「この扉に生贄を捧げ、神隠しを止めてもらおうように頼み込もう」

この言葉に村人は絶望したことだろう。学者の一件があつてから、彼らの結束が崩されたことによつてそれぞれが疑心暗鬼になりつつある最中での決断だつた。もはや最悪としか言いようが無い。

私は自分を慕う村会のものの子を一人殺し、扉へと捧げた。心が痛んだという騒ぎの話ではない。泣き叫ぶ妻を見ると、罪悪感で今すぐ死にたい気分になられる。それでも私は、村を救うために小さな犠牲をいとわないと誓つたのだ。正直心身ともに潰れそうでした。そう、私は決してこれを生贄のための行動だと思つてしたわけではなかつた。単に、人を殺すための口実、逃げ口でしかなかった。すれば、あの学者のように扉の中に入り、確認できると思つたからだ。私はその日扉に近づいたが、やはり威圧感に押し出され、冷や汗と激しい後悔に襲われただけであつた。

そして次の日も次の日も、村人を泣かせた。その泣き顔を見るたびに、心を潰した。そしていくうちに、私は知らぬ間に自分を壊していた。

そして、願いが叶つた頃には、何も残つていなかった。

扉の前に立つ。夢を見すぎて、一体何が夢だったのかすら私は忘れてしまつていた。灰色の扉は私には天国に見えた。この先へと足を踏み入れれば、私は何もかもから解放されるのだと。

扉の向こう側から声がした。聞き覚えの無い男の声だつた。

「君の名前を聞かせてくれないか？」

優しい声だと思つた。きっと、この奥にいる世界の創造主は想像の通り慈愛に満ちた人物なのだろうと幻想すら抱いた。私は引き込まれるようにして、その扉に自分の名前を告げた。

その世界を見た。

世界は灰色で、言ってしまうば、壊れた人間の、壊れた世界だった。

『こわれたにんげんの、こわれたせかい』

私は黒住の言葉から昔読んだ本の題名を思い出していた。それは児童文学にしてはかなりグロテスクで難解な話であり、読んだ当時は出てきた女の子の怖さに泣いていたただだったような気がする。人気はやはり無かったらしく、その頃の友人にその本のことを聞いても知らないと言われ、一点張りに帰ってきただけだった。

本の内容はうっすらだが覚えている。暗い世界に血みどろの女の子、それに白と黒の手に、灰色の扉が出てきた話だった。かなり長い話で、確かその部分はプロローグな部分だったはずだ。村の村長が扉の中に入って、その後…… どのような話だったかは覚えていない。強烈なイメージがあるのはそのプロローグ部分だけで、あとはほとんど絵本の世界だったような気がする。 比喻するならば、そう、キリスト教の聖典、聖書のような……。

頭が急に痛くなった。ベッドに顔を埋めて思考を止めた。

黒住からの頼みは非常に抽象的で、聞いている私は理解に苦しんだ。 いや、もとより理解するべきものだったのかも分からないくらいだ。

彼の『世界を壊して欲しい』という願いの内容は実に簡単なもので、自分のする行動の邪魔にならないように白椿さんを庇護して欲しいとのことだった。一体どの辺りが彼の願いと直結しているのか分からないが、とにかく彼女が邪魔になるらしい。 正直意味が分からない。

今日はもう遅かったので白椿さんに一通メールだけ入れて帰宅したが、庇護しろと言われても具体的な内容が思いつかないのが現状だった。 邪魔になる、ということだから、白椿さんが何かをしてしまうのかとも思えるが、事実上彼女と人間的に繋がっているのはそ

う多くなく、黒住が対象にしそうな人は思い当たりが無い。それに加え、黒住と会ったのは本当に久しぶりだった。今更白椿さんとのつながりがあるとも正直思えない。

だとするならば、第三者の介入が最も可能性として揭示できるのだが、それでも思いつくのは偶然の産物くらいだった。

兎にも角にも、私は黒住の忠告を正面から受け入れることにし、明日から白椿さんを家に泊めることにした。

「……そういえば」

黒住、ということでもう一つ思い出した。いや、本来はこちらのほうを懸念すべきだ。

連続誘拐事件。

同一犯ではないだろうにしても、外国規模となってくるともはや黒住の言う偶然では恐らく片付けられない。犯人の動機も目的も全くの不明だが、猟奇的殺人事件があったのちの事件だ。疑念を抱かずにはいられない。

（でも、それにしただって……）

偶然という要素を抜いて必然にしたっておかしい。日本全国規模で誘拐事件が起こったのなら衝撃こそ大きいものの、まだ納得できる範囲だ。どこぞの大企業が謀反して兵でも上げれば無茶な想像ではあるが可能だ。しかし、これを世界全体と考えると難しい。食品会社であれ車会社であれ、全世界に店舗を広げる企業は少ないが、やはり意図が計りかねない。

（違う……）

違和感を感じた。違う、もっと根本的な面から見直すべきだ。

確かに今回の誘拐事件は不可思議な部分が多い。それゆえに一貫性が無いと言った黒住の言葉も肯定しがたい。
だが、それよりも重要なのは……。

気付いた。

私は思い立つと下の階のリビングに向かった。目的は新聞紙。優等生気取りの私であるが、実は世間には疎い。ゆえに新聞やテレビを利用することは少ないために、親に場所を聞くしかない。もしかしたら新聞紙を取っていないかもしれない。自分のそういう面の無頓着さに今更呪いをかけたくなる。これで優等生を名乗っていたのだから笑える。本当に微笑してしまいそうだった。

一階に降りてリビングに駆け込む……が、そこには誰もいなかった。時計を見る。夜中の十時を回っているために流石の父親も帰宅している時間だ。そうでなくとも母親はいる。コンビニにでも出かけたのかと思ったが、そもそも夫婦そろってコンビニに行くなどという暴挙に打って出るほどフレンドリーな家族ではない。

寝室だろうか。私は一度降りた階段を再び駆け上がる。そして両親が寝る寝室のドアを開けたが、やはり中は無人だった。整ったベッドがやけに寂しい。ランプも付いていなかったので、就寝前というわけではなさそうだ。

すれば、どこに行ったというのだろうか。私が風邪を引いていた時もそうだったが、大抵連絡が無い外出の時は置手紙が置かれるのが家の常識だった。それすら無いということは、……思いつかない。

とりあえずは通勤先で何かがあったのだろうと結論付けておくことにした。

新聞紙はリビングの端にまとめて置いてあった。紙の感触が妙に懐かしい。テレビ欄を裏に向けて、見出しが一番大きい順に見ている。政治経済から下らない話まで、マスコミは何でもネタにしたが

る。これを疎ましいと思う人が多いようだが、向こうも仕事なのだと割り切るべきだと私は思う。実際にやってきたら私も嫌がるだろうが。

ページをめくっていく。すべてのページを見終わった。無駄にテレビ欄まで見てしまった。しかし、それでも私の望んだ結果は得られなかった。いや、逆に捕らえれば得られたのかもしれない。

一番の問題は、そこにあった。

黒住の言葉を思い出す。

『東京都でも何件が起きているが、何よりも北海道から沖縄、それどころか話によれば中国やハワイのほうでも起きているらしい』

注目すべき点は前者だ。日本で東京で何件か、それに加えて北から南までときた。それほど重大な事件が新聞紙に載っていないかった。そこで思い出したことがある。白椿夫妻を殺害した成田空港での一件だが、あれもどうでもいいで片付けられるものじゃない。何故自分が疑問を抱かなかったのかは不明だが、成田空港を閉鎖し、さらにはその内部での殺人事件。いや、もっと以前に戻るべきである。都内での白椿夫妻が起こした猟奇殺人の方がもっと規模が大きい。町一つがゴーストタウンとなったあの事件が一ヶ月やそこらで解決した。黒住はそれは黒住が得た地位と権力の力だと言っていたが、『現実でそんなことが出来るわけが無い』。それに納得した自分こそもつとも現実から離れているのかもしれない。それもこれも、すべては灰田純一にまつわるもののせいだ。

（一体私は何を考えていたの？）

深刻な自己嫌悪に陥りそうになり、思わず頭を抱えた。齒軋りの音すら聞こえてくる。それに混じって、荒い呼吸の音も聞こえてきた。

結論は単純明快。異常だった。

朱に交われれば赤くなるということだ。異常と関ればこちらも異常

になったか、物事に疑問を抱かなくなった。何が優等生だ。どこが優等生だ。何もかもが、おかしい。

それだけか？ 本当にそれだけだったか？

一度湧き出した疑問の水は留まることを知らない。許容できる範囲をゆうに超え、頭を侵食していく。何が起きているのかまったく分からない。目の前の光景が回っているはず無いのに、ぐるぐると回転しているように見えた。

まるで、壊れた世界のようなだった。

「まだ気付かない。まだ気付かない。君にこうして出会ったのは二度目だろう。一体その間にどれだけの時間があっただろうか。それでもまだ気付かない」

いつもの通り、音は無かった。

「一人の男は音楽家だった。ある日彼は音楽に対して一切の興味を失ってしまった。彼はそのことに疑問を抱いた。自分はこんなじやなかった、もっと出来る人間だったはずだと。しかし、彼の疑問はおかしかった。それは何故だろうか」

それはあまりに抽象的な例だった。しかし、私には彼の意図するところが理解できた。

「そうだ、元々彼は音楽家じゃなかったんだ。ただ、そういう雰囲気の中にいただけだった。音楽を作って、楽器を弾いて、歌まで歌った。立派に音楽家と呼べそうだが、彼はそれでも音楽家じゃなかったんだ。理由は一つだ。彼は音楽をやっていただけだったからだ。ただ、そうしたいだけで、それ以上も以下も無かった」

だが彼はそんな自分に疑問を抱いた。自分はこんな人間ではなか

ったと。しかし、その疑問こそ破綻していることに気付けなかった。

「彼が音楽を止めた時点で彼は音楽家でないのだから、音楽が出来なくて当然だ。そして自分が音楽が出来ないと知った時、彼は自分がおかしくなっていることに気が付き、苦悩する。その問いがおかしい、と僕は以前言った。無論違う状況ではあったけどね。それは何故なのか。彼が音楽家ならば、彼が音楽が出来なくなること疑問を持つのは当然と言えよう。これは哲学思考が必要な問題じゃないもつと単純な答えが用意されているんだ」

そう知っていても、疑問は止まらなかった。何故なら彼は、音楽家ではなかったからだ。

「スランプ。これが答えだ。音楽家であろうがスポーツ選手であろうが画家であろうが、スペシャリストに誰しも訪れる壁さ。彼はそのことを理解しておきながら、自分が音楽が出来ないことに疑問を持った。これは、異常だ」

その瞬間から、彼は音楽を止めたことになる。完全な自己否定だ。

「だから彼は音楽家ではなかった。他の何かだったのさ。そうして嘘の自分を壊して、彼は世界の外へと飛び出した。そこが地獄か天国かは分らない。だが、それが彼にとっての真の世界であることには間違いないだろう。これを僕ら、灰色の世界の住民はこう呼ぶ。『セルフディストラクション』とね」

「……そして、それを補助するのが、灰田一家の仕事、ってわけ」

「さあね、正直僕の世界は僕でも計り知れないから」

「最悪ねそれは」

そうだね、と灰田は薄く笑う。そこにはもう何もかもが消え失せ、たった一つ残った真実だけが浮かんでいた。

「私は、その、貴方の仕事の対象だったわけ。私は学生で、何の得意不得意も無い人間なのに良く見極めたわね」

「その言い草、まるで自分が異常だということに気付いていたみたいだね」

「まさか、私はただの優等生よ」

「これでもなお、自分を優等生と呼ぶか。ま、僕も君がそんな簡単な人間じゃないと分かっていたけどね」

傍から聞いたら何の会話が解せないことだろう。そんな誰にも分からない会話が、きつとこの先も続いていく。彼と出会い、口を開くたびに。そんな気がした。

「今一度問おう。君にとって、優等生と天才の違いとは何だ」

その問いは、いつもと同じく唐突で意味不明で、ほんの少しの違いがあった。

「そうね……」

だから、私も今ばかりは少し違った。まるで、自分が優等生で無くなったみたいだった。

「勇者と、魔王。世界と、神。何よりも、私と、あんたのことよ」

案の定彼は笑った。大きく、顎が外れるんじゃないかと思うほどにその整った顔をゆがめた。嘲笑しているんじゃないとすぐに分かる。彼は、喜んでいる。

いつだっただろうか、私は彼といふ時間にたまに映画のフィルムに巻き込まれたような感覚がすると思ったことがある。それは、彼に感じる比喻でもあったのだが、今分かった。これは紛れもなく、彼の世界に巻き込まれていたのだと。

「たまごとにわとりという話があるだろう」

またも唐突に話を切り出してきた。もう慣れっこである。私はそれに静かに頷いた。

「たまごが先なのか、にわとりが先なのか……。その問いは簡単だ、にわとりが先だ。何故なら神がその前に存在し、神は生物を創造したからだ。それはたまごではなかった。

では、問題だ。『世界と神はどちらが先に生まれたのか』」

私はその問いに答えることを延期する。

「それは、私への挑戦と受け取って良いのね。真実に気付いた音楽家は何に化けるか分からないわよ、覚悟しておいたほうがいいわ」
「構わないさ。君が何であれ、僕の望む結果になるだろうから」

彼の望む結果とは一体どのようなものだろうか。悲しくも微笑む彼の表情からは全く察せ無い。私はその今まで見せなかった表情に思わずたじろいだ。これが、彼の壇上なのだ。今まで傍観することで恐怖を味わってきたその壇の上に、私は今立っている。

その私は、疑問を口にした。

「この物語は一体どういう話なの？」

脈絡の無い、自分で言っていてわけの分からない問いだった。し

かし、勿論彼には通じた。何故なら彼は。

「世界の始まりと、終わりの話だよ」

神だから。

異変なんてものはもう何も怖くないと思っていた。白椿夫妻が目の前で死に、連続誘拐事件が起き、灰田純一が現れ、様々な世界が壊れていったのを目の当たりにしたのだ。これ以上、怖いものなど無いと思っていた。

灰田は消え、就寝し、思いのほか良く眠れたその翌朝。リビングの光景に思わず悲鳴を上げたくなった。ボロボロにされたソファ。割れた食器。床に散らばるガラス。へしゃげた机。見る影も無い観葉植物。ノイズ音を撒き散らすテレビ。倒れている 両親。

家庭という世界が崩壊しているのを目の奥に焼き付けた。光景がゆがむ。涙なんかのせいじゃなかった。単純に壊れているからだっ

た。
一撃だったのだろう。両親の身体に外傷は少ないように見えた。しかし、その割には血だらけだった。特有の鉄分の臭いが鼻に付く。ここまで臭いものだとは思わなかった。

頭がふらふらする。足がもつれそうになるが必死に堪えた。ここで倒れてしまつてはダメだ、最悪でも、あの男を。

破壊された部屋の中心で男は拳銃を手中で遊んでいた。そういえば微かに煙の臭いがする。彼は煙草を吸わないだろうから、きつとあの鉛からこの臭いはするのだろう。まだ血の臭いのほうがましだった。

「……さけないでよ」

搾りだすような声だった。自分でも信じられないくらいの憤りを感じていた。何を、どういつふうに日常を過ごせばここまで理不尽な光景に出くわせるだろうか。

しかしそこで私は自分自身の思考のおろかさに気付いて舌打ちし

た。もう、ショックよりも憤慨のほうが勝っている。そんな自分が一番おろかなんじゃないかとも思う。一度深呼吸をする。こんな状況で落ち着けというほうが無理だが、目の前の男はそれを催促しているように思えた。

「……これは、流石の私も貴方に向けて包丁を向けかねないわよ……黒住」

信じて良いのか悪いのか、納得して良いのか悪いのか分からないが、そこには確かに彼の姿があった。見間違えようも無い。ミラーサングラスは光らなかった。彼がここにいて、彼が拳銃を手に持っていて、部屋は破壊されていて、家庭が壊れていて、このどこに接点が無いと言えるだろうか。私には無い。あつたとしても、認めない。冷静さなどとうの昔に忘れてしまったように、黒住にたたみかける。

「灰田が昨日現れて、きつと私の世界は変わってしまったんだとは思ったわ。日常なんか、もうどこにも無いんじゃないかって。思えば、白椿さんと一緒にいることすら日常とは違うんだから。でも、でもね、流石にこれは無いんじゃない？」

「……貴様は、悲しんでいるのか？」

「……なんですって？」

怒りはある。衝撃もある。だが。

「貴様の家庭という世界が崩壊したことに腹を立てているのは確かだろう。だが、そこに両親の死という悲しみはあるのか？」

「そんなの……当たり前でしょ」

苦し紛れにも聞こえただろう。だが、私自身どう答えて良いか分

からなかった。悲しいのか、悲しくないのか分からなかった。でも、多分悲しいと思った。それはどういう意味での悲しいなのか、やはり分からなかったが。

黒住は見れば異常な冷静さをかもしだしている。どこか遠くを見ているような視線に、拳銃を持った手は人形のように動かない。自分の犯した行為がまるでその腕の最後の仕事のようになり、終わった無機物のような雰囲気が出ていた。それでも彼が拳銃を床に落とさないのは何故だろうか。彼は首だけこちらに向けて言った。

「幻想だ……」

死んでいるのではないだろうかと思えるほど、気力の抜けた声だった。

「人を殺し、人が殺され、人が死んで……そんな世界に、悲しみが無いのは幻想だ。それは、ただ悲しみたくない人間が作り出した幻想世界だ」

「……」

「俺は優等生でも天才でも神でもないから分かる。本当の人間というものは、いかに自分を殺せたとしても、結局は悲しみ、後悔し、間違いを肯定し、成長していくはずだ。だがどうだ、世界は狂った。壊れた人間しか住めない、壊れた世界になってしまった」

私は終始無言だった。彼の言葉に我を挟んではいけないと思ったのだ。

「壊れてない人間はこの世界に住めば、壊れてしまう。だから殺した」

「どういうことよ」

「世界から追放したんだ。でなければ、世界は『異端』に満ちる」

意味が分からない。ファンタジーの世界ならば理解も可能だろうが、ここは現実だ。彼の言葉も現状も何も理解できない。それでも、冷静でいられる自分は間違いなく彼の言う『生き残れる異端』だからなのだろう。

思考の川は、意外にもゆるやかに流れている。

「だから、私の両親を殺した、ってこと？」

「そうだ」

「殺さなければ、異端になってしまうから？」

「そうだ」

……馬鹿くさくなってきた。早々に警察に連絡した方が絶対に早いだろう。私はため息すらつく余裕無く、電話に向かった。それを特に黒住は咎めはしなかった。自分の権力でも信じているのだろうか、その態度にも無性に腹が立った。

家の電話の子機を手取る。110を押して、電話の呼び出し音が鳴り始める。

……出ない。110番がどこに繋がっているのか知らないが、呼び出しに出ないとはなんという体たらくだ。何度かその後もかけてみたがコール音は一向に止まなかった。

思わず後ろの黒住を見た。この男が成田空港の一件の秘密裏に来たのは権力の力だと言っていたが、ならば警察を丸め込むことも可能なのだろう。あの余裕はそこから来ているに違いないと思った。奥歯を噛み締めながら、してやられた、と心の中で呟く。子機を置いて、リビングを出た。

ならば、隣の家に行って大人を呼んできてもらう。証人にもなるし、これならば確実だ。靴を履いて、玄関のドアを開けた。

瞬間だった。

「……………あ」

か細い声を思わず上げてしまった。見た目、なんでもない光景。広がっているはずの日常。それはそこにあった。なのに、強烈な虚無感に襲われる。

空が広がった。鳥は飛んでいなかった。道路は舗装されていた。車は走ってなかった。軒並みが連なっていた。人は中にいないようだった。

私は駆け足になり、隣の家インターホンを押した。しかし、予想通りというべきか、何度押しても反応は無かった。その隣の家、その隣の家と次々に近所を回っていったが、やはりどの家も扉が開かれることは無かった。

まさか、と思う。私は無理矢理門を飛び越えて他人の家の庭に侵入した。ここまでできてはもう自分を止められない。近くにあった物干しさおを振りかざして、ガラス窓を叩き割った。ガラスが飛んだ。言うまでも無いが、命は無かった。家の中に土足のまま入った。じゆうたんの感覚が新しい、掃除機をかけたあのような。しかし、掃除機はコンセントに刺さったまま、その使い手はどこにもいなかった。キッチン、リビング、玄関、トイレ、どこにもいなかった。階段を駆け上がる。焦りのせいか、一度落ちた。二階にも誰もいなかった。土足で入ったためについた泥が落ちていても、もはや罪悪感は無かった。

疲れ果てて庭に出る。割れたガラスの破片がやけに虚しく感じる。

「知っているか」

目の前から低い声がした。顔を上げる気力も無かった。

「世界はいくつもある。銀河、という意味合いではない。次元の問題でもない。『世界』という意味だ。神は何人もいて、争いあつ

ている。だから小さな世界はそれより大きな世界に喰われる。そうして、世界は変わっていく」

だからなんだというのだ、それで、私に何をしろというのだ。

「俺たちのいた世界は、喰われたんだ。だからそこに適さない『常人』は消えた。この世界の創造主が望む人間だけが残った」

「……でも、私の親は貴方に殺された。これはどう説明するの」

自分でも驚くほど無機質な音だった。

「因果だ」

は？

「因果を作る必要があった。誰かがこの世界で死を体験することによって、どこかを破綻させなければならなかった」

「……何よそれ。さっきと言ってること違うじゃない」

「嘘をついた」

「……そう」

意外だったが、彼も思うところがあるのだろう。

「宣言しておく。この世界が壊れたとき、貴様の両親は必ず戻ってくる。この発言に、『嘘は無い』」

悪意が、無かった。もう諦めたほうがいいのだろうか。この世界はとつくにおかしくて、私たちはとつくに壊れていて、そう認めるのがいいのだろうか。

「私の親は……死んだんじゃないの？」

「違う。追放したただけだ。言っただろう。悪意とは常に他の悪意に向けられるべきなのだ。貴様は悪じゃない。悪いのは、世界を喰らった神だ」

「分らない、分らないのよ。ここが現実で、それを信じて良いのかダメなのか、何も分らないのよ」

「ならそれでもいい。夢でも構わない。だが、破壊しなければ夢から覚めることは出来ないんだ」

「……誘拐事件は、これが結末？」

「恐らくはな。一晚にしてすべて消え去るとは俺も思わなかった。失態だ、許せ」

どうすればいいのだろうか……。

親を殺したこの男の言葉を信じて、わけのわからない話を信じて、ついていくのか？

本当に両親は死んでないのか？ あれだけの血を流しておいて、『追放』なんて二文字で納得して良いのか？

私は優等生だ。こんな、馬鹿みたいな話に付き合っている暇なんて……。

「白椿を助けに行かなければならない」

「……え？」

「やつは恐らく神の目には邪魔に写るだろうから、消される可能性がある。今や、よりどころを得た彼女は、神にとっては、な」

「……」

もう、いいや。

どうでもいい。優等生だとかなんだとかいっていた時期もあったが、所詮そんなのは嘘だ。私は私以外に有り得ないのだから、私でいればいい。

「……行きましょう」

最初、私はなんだったのだったか。

昔、私は何かが出来た。だが、隣にいた子がそれを私より上手く完成させた。だから私はそれを超えようと頑張ったが、やはり一歩足りなかった。そうして私は次のものに興味を持ち始め、それでも上手く出来た。だが、また違う隣の子が私より上手く完成させた。私はまた頑張ったが、やはり超えることは出来なかった。

だったら私はすべてのもので二番になろうと勤めた。それでも構わない。一億もいる人間の中で、私は常に二番ならば不満は無い。そうして学校では、常に五番以下を取り続けた。運動も、勉強も、趣味も。私に出来ないことは何も無かった。本当に、何も無かったのだ。

それを世間ではどうなのか知らないで、私は優等生を気取った。ずっと、そうだと思っていた。模範となり、他人を下に置ける人間だと思っていた。

しかし、その技術を真似できても、『私を真似ることは不可能』だということに私は気付かずに進んでいた。どれだけ遠くに進んだらうか。知らないうちに、闇の底にいた。

そんな幻想を、抱かされそうになった時期があった。

だが、私はそれでも優等生だった。ここだ、ここなのだろう。灰田純一が私に眼を付け、私がこの世界にいられる理由というのは、自分が異端か異端じゃないかと聞かれれば、勿論異端だと答えるだろう。天才と世間から呼ばれる分類は例外なく異端なのだ。他と違って桁違いの能力を持つ人間は異端に違いないのだから。

ならば、私は何だったのか。言われるまでも無い。
『優等生の天才だった』。

だから私は黒住と歩こう。この世界を壊した馬鹿を殴りに行こう。そして、私が救おうじゃないか。それが、模範となる答えなのだから。

「先に宣言しておくわ。天才はね、どんなに努力しても、優等生には適わないのよ」

もうどうでもいい。誰かが死ぬなら死ねば良い。誰かが助かるなら助かれば良い。その間、私は私でいればいいだけの話なのだから。それが、『優等生の天才』という異端の考えだ。

30、虚しい校舎

人はいない。けれど風は吹いているようで、髪の毛が右へと大きく揺れた。荒野に吹き荒れる風はこんな感じなのだろうか。排気ガスを吸っていない早朝の空気が昼過ぎになっても続いていたのは良いのやら悪いのやら。気分は最悪だが、世界はある意味最高に綺麗だった。

やってきたのは私が通う都立高校の校門前。門は閉じており、言わずもがなインターホンを押しても誰も出るはずがない。異端者と呼ばれる分類はこれほどまでに少なかったのかと拍子抜けも出来そうだった。それくらい世界からは人が消えていた。

黒住は横で黙ってじつと学校を見つめていた。彼の話ではここに白椿さんと『神』がいるらしい。舞台の選択としては成功だろうと思う。きつと、終わった場所から始めるのだろう。

まず黒住が校門を飛び越えた。私も持ち前の運動神経であとに続いた。つい一カ月前までは律儀にインターホンを押して謝って入ったというのに皮肉な話だった。

飛び越えると校庭だ。ここから校舎までは約二百メートルはある。地味に時間がかかる距離だ。普段は部活動で賑わっているのだが、無論今は閑散としている。

校舎に足を踏み入れた。今までの土の感触とは違う冷たいものだった。誰もいない校舎に二人分の足音だけがまるで雨音のように響く。

三階に上がった時、妙な威圧感を感じた。いや、きつと高圧的なものではなく、虚無感から湧き上がる近寄りがたい雰囲気を目指す威圧感だ。自分が今までいた世界とは違うという絶対的確信を持った。

「灰色の、世界ね」

思わず私はそうつぶやいていた。

世界にとつての色とはなんだろうかと考える。彩色豊かな自然の生み出す天然物か、初めて世界が創られてから今まで不滅かつ永久の姿を保つ海や空や大地か。いや、極端に言ってしまうえば人間の作り出したものだって世界にとつて立派な色となるだろう。

しかし、その全てがあるこの世界には色が無い。唯一灰色を除いて。単純に漫画の世界の解釈でいけば、白が光や善良を表し、黒は闇や悪を表す。間違つてはいないだろう。ならば灰色はと考えた時、人々は虚無と答えるだろう。まさにそんな感じだ。つまり世界に灰色しか無いこの世界はまさに虚無そのものの、優しく表現しても今まで体験した中で最も寂しい世界だった。

世界にとつての色とは、人々だ。賑わう人々だ。喜んで落ち込んで怒って悲しんで、時には人を助け、時には人を殺したりする。そんな人の彩色で世界は色付くのだろう。人のいない世界は、こんなにも寂しい。

「さて、ここからは別行動にしよう」

黒住が立ち止まって言う。私はその意図を掴みかねて何故と問うた。彼と別行動を取ることとは正直心情思わしくない。今からあの腐れ野郎と対面すると思うだけで、主に三つくらいの意味で震えが来るのだ。黒住がいるだけでも大分支えになっていたのだ。

「目的を忘れたか？　今は神の暴拳を止めるより白椿の救出が先だよ。そういえばそうだった。相手が相手なだけに緊張し失念していたようだ。」

「そういえば貴方、何故ここに白椿さんがいると分かったの？」
「聞くまでもないだろう。ここに神がいるからだ」

「なら何故ここに神がいると分かったの？」

「俺が俺だからだ」

なんと不思議に説得力のある言葉。黒住が言うのだから恐らく白椿さんはここにいるのだらう。いや、間違いなくいる。

「分かったわ。二手に別れて探せてことね。連絡は取れるの？」

「取れる。まさかジャミングを仕掛けるほど壊れてないだらう」

「要塞戦じゃあるまいしね」

「俺は北側校舎を探す。貴様は南を」

「了解したわ」

冷たい、本当に冷たい校舎だと菊乃は思った。こんな世界のどこに救いがあつて、どこに望みがあつて、どこに温かさがあつて、どこに、彼の結末はあるのだろうか。きっと間違っていた。望んでいたものときつと違っていた。

四階建て校舎の一階。そこに灰田純一はいた。購買部の前で、パンを片手に廊下の壁に背をかけていた。酷い有様だった。死人のよくな目で身体を押さえつけていた。しかしそれでも笑みは彼の顔に浮かび、時折くすくすと笑い声までも聞こえる。

途中、灰田は菊乃に気付いて顔を上げた。菊乃は灰田が招待した人物ではなかった。彼は落胆したように視線を床に戻す。その行為

が無性に菊乃にとって苛立たしかった。

「一体、何をしたんですか」

「……………」

邪魔者を見る目だった。用は無い、立ち去れと目が語っている。
だが、菊乃は下がらない。

「分かってますよ。あなたの望みも、この世界の仕組みも。気持ち
は全然分かるっていうか、前まではあたしの望みもあなたと変わら
なかった。だから分かります。でも、もう良いんじゃないですか。
あたしたちはかつて無いほどに結束できた。先輩を、先輩を中心と
して、何かが繋がれた。普遍を手に入れた。それで、何が不満だっ
たんですか？」

「……分かる？ ははっ、ふざけた言葉だね。何が不満か、そんな
ものを聞いてどうするんだい？ それが分からない時点で、君は僕
を、僕らを理解していない」

「理解させる気はあるんですか」

「無いね。そんな努力水の泡にしかないし」

「じゃあ多分あたしは間違ってるんでしょうね。でも、これだけは
分かりますよ。この方法は度を越えてる。今すぐ止めてください」

それを灰田は鼻で笑った。心底馬鹿にしたような笑顔で言う。

「何を、どう止めると？ これは僕の望みではあるが、僕の意志で
はないのさ。世界が、そうなってしまったただけの話」

「世界は、あなたじゃないんですか」

「……残念ながらね」

ふう、とため息を吐いて灰田は立ち上がった。大分長い時間座っ

ていたのか、かすかに膝が揺れているような気が菊乃にはした。灰田は背伸びをすると、視線を細めて廊下の向こう側を指差した。菊乃はそちらを一瞥したが、特別何も無い。

「君がここにいる必要は無いだろう。さつさと去るが良いさ。そこを真っ直ぐ行つた突き当りの階段を上つて三階、正面に図書室がある。君の仕事は、きっとそこにある」

「……仕事？」

「……………」

灰田はもう何も答えない。脱力したように再び廊下の壁に寄りかかって座った。本当に死人のようだと思ふ菊乃は思う。

もう一度灰田が指差したほうを向いた。虚空の彼方へと消え去りそうな遠い廊下。

（図書室……………ですか）

何があるのかは分からない。だが、彼女は進むことにした。

31、白椿菊乃（前書き）

大いにお待たせしました。最終章です。

31、白椿菊乃

菊乃は自分の目をまず疑い、すぐに納得に至った。図書室はしんと静まり返っており、人がいないのはおろかあるべき本までが見当たらなかった。本の匂いはまだ微かにするから、きっと世界が本だけを消してしまったのだらうと菊乃は思った。もうそんなことに驚くことすら出来ない。

菊乃の朝は早朝六時から始まる。両親を失った彼女にとっては朝の時間はとても閑散としたもので、早く人肌に出会いたいと思うばかりに、少し距離のある学校にいつもより早めに家を出る。

そこからの時間は彼女にとって1日で、いや一生と表現しても差し支え無いようなものになる。今まで存在にすら気付かれ無かった彼女に声をかけてくる散歩中の老人に犬を連れた人々、何分か移動もすれば子どもたちとも挨拶を交わす日々。こんなことが幸せと感じるのは世間では小さくとも彼女にとっては大きな変化だった。

しかし、その日は外も家も大して変わらなかった。自分一人が歩く音だけが聞こえて他には何もない。異常だった。学校に到着してそれは確信に変わる。生徒どころか職員までいない。車は一台も駐車しておらず、言うまでもなく自転車も無い。菊乃は険しい顔で校内へと足を踏み入れたのだった。

そして今、まさに異常が普遍に変わろうとしている光景を目撃したのだ。今更本があるとか無いと言えるほど日常を過ごしてはいなかった。

図書室の中を菊乃は散策し始める。灰田の言葉の意味は掴みかねるが、そのまま捉えればここには何かがあるはずなのだ。むしろ、『何もないことが何か』なのかもしれないとも菊乃は思う。彼女自身身震いを起こすほど凍り付いた世界である。

景観は本が無いために壮大としたもので、たった一冊残った本を見つけるのには苦労しなかった。まるで奇妙な演出家の施した罠に

も見えるくらい顕著な光景である。

やけに古く、落としてもしたらちぎれてしまいそうな本を慎重に手に取り題名を見た。そこには黒ずんだ文字で『こわれたにんげんのこわれたせかい』と記されている。聞いたことの無い題名だった。しかし、灰田が用意したと解釈すればやけに納得の行く題名でもある。菊乃のはカバーを開いて一ページ目を読む。

「彼女には夢があった。けれどもその夢は彼女の住む世界では叶わない夢だから、彼女は世界を飛び出すための扉を求めた……」

不思議な始まり方をする内容だと菊乃は思った。

だが、プロローグらしきものが始まると内容は冒頭とは一変、何やらグロテスクな表現をする異世界の小説だった。

その話は長くは無かったが、これ一つで十二分に物語が完結していた。第一章を開けば、唐突に物語はリアルに走っていた。街の風景が描写されている部分を読めば菊乃にも容易にそれが今の世界のものだと想像出来た。まさに都会そのものだ。ただ一つ違い、まさに一致していたのは、『人間』という生物が世界から欠落している点である。

木々は緑を生い茂り、空には鳥類の鳴き声、しかしそれでも地上の様子はビルの並木道のように、発展した今の日本を感じさせる。ページを進めれば世界情勢が記されていて、読めばまさにこの地球そのものの歴史だった。

これはまるで創世記のようだと菊乃は思う。

「けど、やっぱり人がいない……」

景観の変化、建物や文化、食の歴史、現在の環境問題、その他聞き覚えのある言葉が並べられているがその中心になった人物名はあるか、まるで『世界が自分で進化した』かのような文章で物語の設定

定について書かれている。加えてプロローグとどのような繋がりがあるのか全くとって良いほど理解が出来ない。

パラパラと適当にページを飛ばしてみる。何百ページ目かについて人が現れた。人形を二つ、男と女の人形を抱えた女の子だった。初めて人が現れたというのに、彼女については物語はほとんど触れない。説明された文は、毎日それしかない人形でおままごのような遊びを繰り返しているだけ、とのことだった。そのうち女の子は段々と大きくなっていき、人形も段々と使わなくなっていった。しかし、彼女にはそれ以外の方法で遊ぶものが無かったために、結局は週に一度ほどおままごをして遊んでいた。

まるで彼女自身が人形に見えないこともなく、菊乃は思わず身震いする。著者の心情が計り知れない。狂者の書く文はここまで狂っているのかと冷や汗すら伝る。古びたページに置いた自分の手が微かに震えているのを知った。

物語はそれまで狂っているにも関わらず普遍的に進んでいる。読んでいてそれが当然なのではないだろうかと思えるほど日常という空気に染み着いた異常。相も変わらず登場人物は一人のままだった。女の子は世界に一人。だが神様は彼女ではなく創世者であり、世界は世界として個々を持つ。そんな寂しい世界で彼女はひたすらにままごをして遊んでいたのだ。ページがいくら進もうとその状態は変わらず、次々に変化していく世界とは無理に合わせたパズルのピースのような浮き具合が女の子から感じる。

……というのも、第三部辺りに入ってから視点が変わった。普通の一般人だ。世界の風景は今の時代と全く変わらず、背広姿のサラリーマンや店先で客呼びをする店主、小学生の登校風景からなにもで急激な変化を遂げて世界は今になった。第三部はどうやら世界の今を表した物語らしい。しかし、菊乃にはそんなことよりも気になることがあった。今まで主人公であった女の子が本当に出てこない。またページを幾らか飛ばしてみるが、どうやら第三部では登場しないようだった。記載されている事の大半

を菊乃は知識として知っていたため、分厚い本の半分程度まで飛ばして読んだ。

すると、唐突に女の子は登場した。既に身体も成長し、立派な女学生となったようだった。しかし、やはり彼女はままごとをしていた。

（これ……もしかして）

皮肉な話に思い当たった。菊乃にとってそれは幾分の余地なく迷惑な話で、だからこそこれを用意した人物を考えた時、妙に納得が行ってしまったのかもしれない。

「新しい人形が欲しくてたまらなかった……。出来ればおままごとの相手も欲しかった。けど、けれども彼女はそれを望んでもどうしようもないって知っていたから、世界に一人だった……」

「そう、それが白椿菊乃という人間に与えられた運命」

突然声がして菊乃はそこから飛び退いた。

「だ、誰？」

警戒心を剥き出しにする。こんな場所に現れるのはよほど狂った人間だけだ。しかし、その姿を認めた直後、菊乃は理解した。このようなパターンも有り得るのだと。

「久しぶり……と言わねえかな。菊乃」

「覚えてるわよね、勿論」

「……」

菊乃の両親が、そこにいた。最後に見た血まみれの姿ではなく、

衣服も調った、まるで始めから何もなくそこにいて当たり前存在のように佇んでいた。別段不思議とも思わないのは、勿論彼女自身がここに理由に繋がるのだろう。同一の存在と扱われていることが菊乃には気分の悪いものだった。

小さく嘆息しながら言う。

「死人すら招き入れられるんですね、ここは」

意外ではない。ゾンビのような風貌を予想もしたが、両親がいずれは関ってくるだろうことを菊乃は予想していた。恐らくそれが、最後だということも。

「私たちがここにいる理由、菊乃には分かるか？」

唐突に父親のほうがそう切り出した。その表情は柔らかくない。子どもを叱る親のようだと菊乃は思い、そういえばこの人は紛れもない親だったと自分で苦笑した。

「さしずめ……しきたりのことですかね？」

「その通りだ」

やはり、と思わず視線を下に逸らした。昔から菊乃の両親が彼女に対して言うことは決まって白椿のしきたりのことだった。熱狂的な信者ともなれば、その元で育てられた菊乃も影響を受けざるを得なかったが、もう今となっては彼女の気持ちの蚊帳の外にある話である。だが、反して菊乃には自分の立場がもう既に縁を切れないレベルのものだとも分かっていた。だからこそ、両親という『しきたり』に対して遠慮はなくなっていた。

「元々あたしは白椿のしきたりなんぞに興味も関心も無かったんで

すよ。ま、言うまでも無いでしょうけど。ただ運命だから、あなた達の腹の中から生まれてきた因果だから従うしかないと思ってただけです。けど、あたしはもう違う人間だ。今更どうのこうの言われたって考えは微塵も変わりませんから」

「なら、菊乃の言う先輩がいなくなったらどうするのだ？」

「……え？」

予想だにしなかった問いが投げかけられ、菊乃の頭は軽いパニツクを起こした。父親の言葉は構わず続く。

「お前は私たちの言うことも聞かずに勝手に自立し、白椿の運命から逃れたと思っっているだろうが、それは違う。呪いは確かに存在し、そしてそれはお前を必ず蝕んで行くことだろう。すれば、最初にお前を襲うのは、『よりどころの消失』だ。そうなったとき、お前は一体どうするのだ？」

「よりどころの……消失」

頭の中でその言葉を反芻する。脳髓に響き渡る苦い感覚に思わず顔をしかめる。考えたことも無かったのだ。自分が先輩と呼ぶ彼女のおかげですべての因果の鎖から断ち切られたと乱舞するほど喜んだものだが、結局菊乃はその『^{はひ}缺』無しでは安心して眠ることも出来ないのだ。

なら、無くなったらどうだ。その光景を想像すると、菊乃は背中に嫌な空気が走っていくのを感じた。

「忘れたのか。私たちは常に孤立し、孤独している。人形が一つや二つ増えたところで何も変わらないのだよ」

「ち、違う。先輩は人形なんかじゃない。あたしを真っ向から見ってくれる、きちんとした人だ！！」

「自惚れるな菊乃。一度や二度助けてもらっただからと言って、向こ

うの気持ちなど分かるわけが無いだろう。私も人間と関ったことが無いわけではないが、その度に裏切られてきたのだ。だからこそ、この運命に従うことに決めた。ずっと先の未来が、幸せであるためにな」

菊乃は大きく頭蓋を揺さぶる。そんな言葉など聞きたくは無かった。どの口が幸せなどという美に満ちた言葉を吐けるのか診てやりたいくらいだった。洗脳だ、これは洗脳だった。幾度と無く繰り返されてきた観念を植え付けるための儀式。久しぶりに聞いたその言葉が、頭では必死に否定していても、心が甘美に受け取る。

「私たちには幸せが訪れない。温かみが無い。ならば、せめて未来へと繋げていくのが、業というものではないか？」

白椿家曰く、呪いは代を継ぐたびに薄くなつていくらしい。今までの白椿家はすべてその業に従い、自分と周りを巻き込んで大殺戮劇を行ってきたのだ。男と女の子を産み、近親相姦させ、生き延びてきたのだ。それでも家を潰さないだけの努力をするのは、一体どの根性のせいなのだろうか。

菊乃は終わりにしようと思っている。自分の幸せが無いのは嫌だ。他人を不幸にするのも嫌だ。だから彼女は必死に抗って、光を手に入れた。大体最初からこのしきたりは一から十まで破綻しているのだ。自分たちの未来を変えるために周りを不幸にして死ぬ。意味が分からない。

それに、その巻き沿いを食らうのは一般人だけではないのだ。一番破綻しているのは、自分の子さえも不幸にするということ。

「あなたが幸せにしたいのは、何代後の白椿なんですか……。少なくともあなたたちの未来であつたはずのあたしは超絶的に不幸でしたよ。もう、認識するのも嫌になるくらいに。それで、まだ続

けようつて言うんですか。この茶番にすらなりきれない腐った循環を」

「お前……っ」

父親の眉間にしわが寄る。憤怒しているようだ。

「あたしは自分の子どもなんて幸せにする気は微塵も無い。あなたたちと同じですよ。他人のために、次なんて見えないもののために自分を不幸にするつもりなんて無い」

「だからお前は分かっているんだ。そんなことをしても呪いはお前を不幸にする。だからこそ、幸せになれなかった私たちの分を未来に託して……」

「あたし　子なんて残せませんよ？」

その言葉に両親は凍りついた。一方の菊乃は艶美な微笑を浮かべている。勝った、とでも言わんばかりの自信に満ちた目だった。

今回と前回の大きな違いを菊乃はすべてと出会う前から知っていた。そう、今回は近親相姦の相手がいない。無言で母親のほうを菊乃は睨みつける。

「呪いは失敗したんじゃないんですかね？　白椿家は滅びちゃいますよ？」

「……ふ、ふふはっ」

父親が突然笑い出した。だが、その目だけはかすかに狂気の色に染まっている。その横で母親のほうは無機質に菊乃を見つめていた。あまりにも気味が悪く、菊乃は一步後ずさる。が、そこは壁だった。そういえば手に取った本は図書室の一番奥にあったのだ。

「私はここに、『しきたりを守らせるために』来たのだと言っただ

ろっ」

既に父親は笑っていない。どこか悲しんでいるようにも見えるが、錯覚だろう。彼は間違いなく喜んでいる。そう菊乃が直感できるほど、彼女の目の前の二人は無機質だった。

「私が、子を作れば良いのだ」

「……あっ」

叫んでいる暇も無い。父親は菊乃に突撃し、壁にその身体を押し付けた。

父親のオヤジ特有の吐息が顔に吹きかかる。そのぞつとする臭いに菊乃は激しく暴れ出した。しかし父親の力は強く振り払え無い。

「いやっ……止めてえー!!」

「暴れるな! 子が出来ればお前の嫌いな孤独は無くなるんだぞ、常に誰かと過ごすことが出来るんだぞ」

「そんなの違う! あたしには先輩がいるし、バイトの人たちがいるし、学校の人なんだって、黒住だっている!」

その悲痛かつ力に満ち溢れた叫びに父親の動きが止まった。信じられないものを見るかのような目で菊乃を睨みつける。しかし菊乃のも襲われているにも関わらず、力強い瞳で睨み返した。

「……だから、もうあなたたちはいらない。私はもう、寂しくないの」

因果の鎖から放たれた菊乃は未だに縛られる彼らよりも間違いなく強かった。父親が苦虫を潰したような表情になる。菊乃の言葉が

よっぽど衝撃的だったのか、視線を忙しく動かし口も何かが出そうなところで行き来している。だが、何を決意したのか苦悶の声を上げて菊乃の衣服に再びつかみかかった。

「そうだ……お前の意見など今更だ。黙って子は親に従えば……っ！」

「いやっ！ あたしはもう異端なんかに見られたく無い！ お願いだから、もうあたしに関わってこないで！」

「ならここで身ごもれ菊乃お！」

瞬間だった。

菊乃の鼓膜に父親の声以外の音が響く。一瞬それがなんなのか分からなかったが、目の前で騒ぎ立てていた父親すら首を曲げて動きを止めていた。だが菊乃彼女自身も抜け出すタイミングを失って音のしたほうに間抜けな顔で視線を送っていた。父親の口元がわなわなと震えているのが視界に映っている。菊乃はその先を見た。

「その、なんだ。情事はその死体とあの世で楽しんでくるといい」
「……黒、住」

父親は菊乃が口にしようとした驚きの言葉を震える声で呟くように言った。視線は黒住のほうを見てはいなかった。黒住の足元、そこには菊乃も父親も見慣れているはずの女の姿が無残な光景で映し出されている。思わず二人とも息を呑んだ。血まみれな女性の身体は不気味に妖艶で、黒住はそれをゴミでも扱うように蹴り飛ばした。

「貴様……なんのつもりだ」

父親がうめくような声で黒住に言った。流石の彼も悪い汗を流さずにはいらなかった。目の前の惨状はあまりに現実味が無い。

菊乃はそれを呆けた顔でしばらく見つめていたが、ふっと気付くとゆっくりと身を横に倒した。彼女も二度目といえど、縁を切りたい両親といえど、流石に堪えたようだった。

その中で黒住だけが一人冷たい目をどこにでもなく送り続けている。

「俺がなんのつもりでこのようなことをしたか、だと？ 脳みそが過疎状態なのは分かっていたが、よもやここまでとは思わなかったぞ白椿」

黒住は本気で絶望しているのか嘆息を漏らしていた。やれやれといった様子で話す。

「俺にとって白椿は敵かたきであり敵てきだ。それ以外に理由が必要とでも？」
「貴様の理由は果たされただろう。我々は今やこの世界ではまだしも本来では肉体のない魂。それすらも貴様は消し去ろうというのか」
「むしろそうしない理由を俺は問いたいな。積年の悪意がそうも簡単に無くなると思ったのか？」

「くっ……」

苦悩の表情を浮かべて言葉に詰まる父親に黒住は拳銃の銃口を向ける。

父親はしばらくそれを歯を食いしばって睨みつけていたが、ふいに諦めたように肩の力を落とした。瞳には死の色が移っている。完全に諦観したようだった。腹の奥から出すような重い声で、黒住に對してつぶやくように言った。

「黒住の行動は理解できない……私たちは同じ場所で生まれ、同じ場所で育っていったはずなのだ。それなのに、何故貴様らはそうして私たちの邪魔をするんだ。本来であれば、黒住も同様のことをし

なければならぬはずなのに……」

黒住はそれを鼻で笑った。

「そうだな、そちらの価値観で言えば、狂っているのは俺たちのほうなのだろう。だが忘れるな、俺の師がどうだったかは知らないが、俺は元より黒住ではない」

「……そうか。貴様は養子だったな。良く普通の人間でありながら、ここまで私たちと関ってこれたものだ。今更ながら感心するよ」

その言葉には黒住は苦い表情をした。首を左右に一度振り、何か名残惜しそうな仕草で拳銃をもう一度構えなおす。

「言うな……俺は師の意思を継いだまでだ。白椿などとは本当は関りたくは無かった。これは嘘だ。俺が俺自身についた最初で最後の嘘だ。最初で最後の……自分に対しての悪意だ」

「そうかい」

もう父親の瞳には生気が感じられないと悟った黒住は、ゆっくりと引き金をしぼる。これで最後だ、これで最後だと心の中で反芻する。自分が大嫌いな嘘をつき続けるのもこれで終わりにしよう、そう最後に呟いていた。

「人殺しをして悲しまない人なんていない。人を殺されて悲しまない人なんていない。そんな世界に、次は生まれてくるといい。貴様の娘も一緒にな」

「ははっ、そんなことにはならんよ。娘だけなら、可能かもしれないがな。その時は君に任せることにするよ、私たちはもう疲れた」

「ふん。難題だが、善処しよう。無論これに、嘘は無い」

パンツ。
軽快で、
重い音が鳴った。

32、黒住儀軌

黒住の目の前には何も無くなった。血みどろの女も、最後に言葉を託した男も、口うるさい少女も。ただ虚しさだけが図書室に残り、吹いてもいないのに風が通り抜けていくようだった。掴んでいた拳銃が床に落ちる。黒住はそれを目にも留めない。

思えばこの重みを手放したのはいつ以来だろうか。と黒住は記憶を巡る。師である人物の意志を継ぐと決めてからこの方、手放したことは無かったかもしれない。人殺しをするたびに重くなっていく一発一発を詰めていき、いつしか重みを感じないまでに重くなっていったそれは、思いのほか床の上では音を立てなかった。そんなものだったのか、と黒住は毒づいた。

身を翻して図書室を出る。と、長い廊下の先に見覚えのある人物が立っていた。

「貴方も……ここの人でしたか。黒住……」

「久しぶりすぎて忘れていると思っていたよ、儀軌」

ほろつと零すような笑顔を見せたその人は、黒住の師、黒住此処だった。最後に成田空港で見た、あの日のままだった。お世辞にも若いとはいえない皺くちやの肌にまともに整えもしないボサボサの髪、黒ぶちの伊達眼鏡。そしてやけに豪華に着飾られた不釣り合いな服が印象的だ。見かけは気にするが、手入れするのが面倒くさいといった様子の身なりだ。老婆のようなしゃがれた声が彼女の口から発せられた。

「白椿を……解放してくれたんだろ？ 良くやってくれたよ、儀軌。正直あたしは無理だと思ってたんだ。あんたはあたしたちみたいに異端じゃないからね」

「俺は、自分に嘘をつきました。一番嫌いな嘘を」

「良いんじゃないのか？　嘘をつかない人間はこの世にいない。あんたは真つ当な人間だったって証明された、ただそれだけのことじゃない」

「しかし俺は……黒住であること一度止めた」

ふう、と此処は距離を取っていた廊下を黒住に向けて歩いてくる。そして目の前数センチまで来たところで立ち止まる。身長之差か、黒住は自動的に彼女を見下ろすような形になる。それがなんとも申し訳なくて、黒住は思わずひざまずいた。

此処はその位置に黒住が来たことに思わず笑みを零し、優しく黒住の頭の上に手を置いた。

「あたしがあんなにして欲しかったのは黒住になることじゃない。それはもう諦めたって前に言っただろう？　あたしがして欲しかったのはただ一つ、間違った世界に生まれたあたしたちの存在を白樺にも知ってもらふこと。そしてこの世界から連れ出してやること。そうだろう？」

「はい……」

「あんたは良く頑張った。どれだけ手を汚してきたかはあたしには想像出来ない。でも分かる。あんたは頑張った」

数多の人を殺してきた。それが男であれ女であれ、老人であれ子どもであれ、人間であれ異端であれ。それは全て此処の後を継ぐための行為だった。彼女もまた数多の人の命を奪ってきた紛れも無い悪であつたのだ。

嘘という足を一步一步進め、真つ黒な階段を一段一段上がつていき、その頂上に見えたのはこの世界だった。そこで彼は、足を止めた。

「もうお帰り、儀軌。あんたの生活してた世界にさ」

なんと魅力的な言葉だろう。黒住は思わず顔を上げる。その先には優しそうに微笑みかける此処の顔があり、すぐりつきたい気持ちに駆られた。だが、黒住はあえてその気持ちを突き放し、立ち上がった。

「俺は、異端という階段の頂点を目指して、貴方という頂点を目指して今まで歩いてきた。しかし、もう限界を感じた。俺が立ち止まったのはまだ踊り場だったんだ」

「儀軌……」

「しかしその先に行く奴がいた。それもまるで苦勞してないような今までエスカレーターに乗ってやってきました。貴方は徒勞でしたね、とでも言いたげな顔で俺を見下して、だ」

此処は黙って黒住の言葉を待っている。弟子の成長を心から喜んでいるように。

「悔しいと思う。が、俺はこの先に進めないし進みたいとも思わない。だから、俺はこの踊り場でそいつの土産話を待つことにする」

「それは何故？」

「行く末を見たいからさ。創世者である、灰田が求めた結末のな」

「欲張りだね、行かないくせして結果を求めるのかい」

「レールを敷いたのは俺だ。その上を走るのは列車。人間は走れん」「そうかい……」

彼は一体なにを求めたのだろうか。壊れた人間の壊れた世界を創世した彼はどんな想いだったのだろうか。それを黒住は知りたかった。レールを敷く人間にもたどり着けず、レールの上を走る列車に

もたどり着けない。『レールを敷きながら走る列車』のみに許される先を、彼は知ってみたかった。

沈んだ廊下に二人の沈黙だけが蔓延る。その空気に耐えられなくなつて、黒住は何か話題は無いものかと頭を模索し、一つの質問を思いついて口に出した。

「貴女は、どこに行くんですか？ 奴らと同じ場所ですか？」

白椿は消えた。どこに消えたのかは分からない。人間の世界という現世とはかけ離れた世界に生まれた彼らの行く先もまた、黒住の知りえないところだった。此処は自嘲するような笑みを浮かべて答えた。

「あたしは地獄に堕ちる予定だよ」

「……地獄、か」

不思議と不可解なつつかえは残らなかった。むしろ妥当だろうと黒住は思う。

「あたしが殺し尽くしてきた人たち全員に土下座しに行くのさ。天国に行つちまつた奴には悪いけど、どう考えてもそつちには行けそつに無い。大体、『悪』を象徴する存在として生まれてきて天国に連れてつてもらえるつてもおかしい話さ」

「同意します。だが、『生まれることの無かつたはずの人間』を排除し、世界の均衡を保とうとした結末がこれというのも不遇な話だ。結果的に人を殺したことに変わりは無いんだが」

「そうさ。経過がどうあれ、破壊したものが何であれ、黒住はそういう立場だ。あたしたちは諸刃の斧、不要な木を切れば切るほど刃こぼれしていく。結果的な自己破壊。下らない、あてつけみたいな言葉さ」

白椿と何ら変わらない。そう此処は重苦しい表情で最後に付け加えた。ふう、と一度ため息を漏らし、言葉を続ける。

「連日の連続誘拐事件、犯人あんなんだろう？」

黒住の瞳に一瞬同様の色が写ったが、すぐに諦観する。気付かないわけが無いのだ、黒住の目指す師である彼女に。

「派手にやったねえ。あたしもジャンボジェット機に弾かれて無理心中とか考えた口の人間だからあんまり人のこと言えたもんじゃないけど、ものの数日で世界中の異端を片っ端から抹消していくとは思いつきもしないし、無謀ってmondだよ」

「灰田には妥協はしない。奴にどんな考えがあり、どんな望みがあるのかは知らない。だが奴が許されざる行動を取っているのは確かだ。それを許す理由が無い」

「それで異端を消した。で、罪悪感はある？」

「無い。無論、これに嘘は無い」

はつきりとした口調だった。

此処はその言葉に腹を抱えて笑い出し、涙目に言い放った。

「そうかい、それじゃあ、あんたも地獄行きだね」

黒住も似合わない笑顔で答えた。

「喜んで」

人を殺しても悲しまない世界。それが黒住は大嫌いで仕方が無かった。自分がそんな世界に足を踏み入れたことだけは、この黒住と

いう姓名を受け継いで唯一後悔したことだった。自己破壊については異論など何も無かったが、その先にある結果が殺人という狂気的なものであり、言うまでも無いが常人である黒住にとってそれが後味のいいものであったはずが無かったのだ。

人を殺したことに罪悪感が無いと嘘をつき、人が死んだことに悲しみを覚えなないと嘘を付き、そうしていくうちに黒住の身体は自分に対する悪意へと染まっていき、嘘が本当になった。よって彼は、嘘をつかなくなった。

大人になり、権力を手に入れ、黒住の目的は目前となった。そうしてそこまで来たところで、初めて黒住は気付いたのだ。自分が立っている世界がいかにか狂っていたかを。

「地獄なんて生易しい。今まで俺がいた世界に比べればむしろ優遇されてるといふものだ。もう、殺さなくて済むのだからな」

「ははっ、殺すのと殺されるの、どちらが辛い？　つつつてね。馬鹿げてるよ、本当に」

此処は何かを懐かしむような穏かな視線をどこともなく向けて、微笑していた。

うん、と背伸びを一つ、老人の身体には立ち話は堪えたのだろう、気だるそうに肩を回しながら身を翻して黒住から少しだけ距離を取る。

「さて、あたしはもう行こうかね。現世の未練は全部あんたが背負ってくれみたいだし、年よりは若いもんに任せてさっさと逝っちゃまうとしようか」

「そうですね……。師よ、最後に問うて良いだろうか」

背中を止めることは無い。黒住は送り出す気持ちを込めてそれ言う。

「俺は、貴女の背中に、追いつけただろうか」

目指したものは遥か遠く、加えて次元も違った。それでも黒住は目指さねばならんと自分を戒めて追ってきた。時には胃液を吐いた。時には血を嚙った。そうして汚れていく中で、一步近づいた気になった。しかし思い返すとまだまだ足りないことに気が付いて、もっと手を伸ばした。手を伸ばすたびに、普遍から遠ざかっていき、自分を見失った。そうするたびに、師に近づいていった。

けれども師はいなかった。死んでいたからだ。目指す目標の形を失くした黒住は、自分の中での最高の悪を定めて走った。それが師に近づく道かどうかなど全く分からないまま、血の雨の中を突き進んだ。

問いを投げかけた。自分はこれでいいのだろうか、無駄な殺生を繰り返しているだけで、何の結果も得られていないのではないだろうか。黒住の悪意に近づくか、犯罪者への道を辿っているのではないだろうか。しかし思いを振り切って、自分に嘘をついた。

安心感を得られたのはつい最近の出来事だった。白椿を追っていた先で見つけた一人の女学生。一見して普通の学生で、黒住は単純に『異常だ』と感じ取った。その学生が口にした言葉を思い出す。

『貴方は、正義を振りかざす悪意なのね』

それはまるで、師の言葉のようだった。そして次の一言で自分を定められたのだ。

『貴方みたいな人間ということね』

それはつまり、白椿と、灰田と似ているということだ。追ってきた道は間違いではなかった。今思えば、黒住はあの女学生に感謝し

てもしきれないほどの言葉を貰ったのだ。恐らく皮肉だったのだろう、女学生は黒住を毛嫌いしているように思えたからだ。しかしその一言で、黒住は自己破壊を完遂したと自信をもって言えるようになり、師に近づいたと胸を張れるようになったのだ。

そして今、たどり着いた道の上に師の背中があった。

「ごめんなさい」

此処は謝った。しかし黒住は黙っているだけで、口を挟む気など毛頭も無かった。師の言葉を待つ。

「あたしは寂しかったただけなんだ。白椿が、孤独で苦しんでいて、あたしが孤独なわけがないだろう？ 黒住には仲間が沢山いるなんていうのは嘘さ。本当は孤独で、孤独で仕方が無いんだ。人を殺すなんて有り得ない芸当をしているのに誰も攻めないし、何も起きない。いつそ警察に捕まって牢屋にでもぶち込まれた方がましなくらい虚しかったんだ、誰とも関れないってのはさ」

声にどもりが生じてきた。肩が黒住からでも分かるくらい上下している。

「仲間が欲しかった。誰かあたしが死んでも覚えてくれている人が欲しかった。だからあんたを見つけたとき、こいつをあたしと同じ人間にしてやるうつて思ったんだ。老人にありがちな悩みだろう？ 笑ってやってくれ……。今更だとは思うけど、あたしはあんたに對してやつちやいけないことをしちまったんだ」

此処は必死で謝罪していた。自分の欲望を抑え切れなかったことと、黒住を『普通』から遠ざけてしまったことへの罪悪感から、止め処ない涙を流していた。

「あんたがそうやって苦しんでいたとき、あたしは後ろで笑ってたんだよ。あんたに面倒なもん押し付けて死んで、満足してたんだよ……」

押し付けたものは重く、大きい。此処が今で考えれば、有り得ないほどのものを押し付けてしまったと後悔している。その様子が、黒住にはばやけて写っていた。

らしくもない。

黒住は思わずそう呟いていた。

「らしくもない。貴女らしくもない。貴女は黒住だ、常に悪意を向け、悪いことをしてればいい。俺に自分の重圧を押し付け、のうのと暮らしているが良い。それが貴女だろう」

「それでも、あたしは謝らなきゃならないんだよ……関っちゃいなかったんだよ、あたしたちは」

「言うな!!」

此処がビクツと身体を震わせるほどに大きく黒住が叫んだ。拳を握り締め、歯を食いしばり、言葉を繋ぐ。

気持ちには痛いほどに理解できた。一体何度黒住自身が挫折しそうになったかなど数え切れないほどの領域にあるほど、孤独の痛さを理解できた。だからこそ、彼はその発言が許せない。

「俺は貴女に確かに救われた。命だけではない、生き甲斐も貰い、道しるべを貰い、生きていく理由を貰った。それを全て間違いだと言うのか。ふざけるな、俺は、確かに貴女の後を追って良かったと思っている。これで良かったのだと、心の底から思っている！ 貴女に利用されていようがなんだろうが関係ない、俺はそうして、抛り所を得られたのだから……」

孤独だったのは此処だけではない。黒住もまた、孤独だった。

しかしそんな中に現れた女性が黒住此処であり、彼にとって最初で最後であろう敬愛する人になった。その背中を追って、何の後悔があるうというのか。その人物に重荷を背負わされて、何の不満があるうというのか。

「貴女の望みは俺が叶えよう。俺が死ぬまで、俺は貴女のことは忘れない。決して、忘れない。……だから、今度こそ安心して行つて下さい、黒住」

黒住は耐え切れなくなつて俯いた。懷からサングラスを出して、日も出ていないのにかけた。何かが、溢れないように。

「そうかい」

そして、此処は決意したように言う。背中は今だ黒住に向けたままで。

「じゃあ、あたしは先に地獄でパラダイスを満喫してくるとしようかね。弟子にそれだけ想われてるって知って、あんたの願いを聞かないわけにもいかないだろう」

「いつか必ず、後を追います……」

その弟子の言葉に満足し、此処はついに歩き出した。

一歩歩く音を聞きたびに、黒住は一つの思い出を思い出す。

黒住此処に拾われたこと。

黒住此処に育てられたこと。

黒住此処の姓名を襲名したこと。

黒住此処の後を追っていた時のこと。

そしてそのすべてが、今解放される。

優しい、とても優しい声だった。その発言は一体誰に向けた悪意だったのだろうか。此処自身なのだろうか、それとも黒住にだろうか。それとも、悪意自体なかったのだろうか。

生き甲斐を与えてくれた人物の最後の言葉。しかと、心に刻み付ける。

「お疲れ様。あんたはあたしの後をしつかりと付いてきてくれた。安心していいぞ、あんたは、あたしの最高の家族だ」

そうして、笑顔だけ残して、黒住此処はこの世から消え去った。その後を追うように、黒住は、一人涙を流した。

雨が降り出していた。家から出てきた時の天気などとうに忘れてしまったが、この虚空に取り残されたような廊下に雑音ながらも音楽を加えてくれるのは今の私には良いセラピーに感じられる。その騒音音楽の中を私は全力で走っていた。

そういえば灰田純一と初めて会話を交わしたのもこんな雨の日だった。白椿さんと出会ったのも雨の日だ。嫌らしい運命を感じてしまふ。嫌な風邪を引き始めたのも食欲不振になったのも、物事に興味を感じれなくなったのもあの日からだ。今考えれば妥当とは思えないが、あの日当時の私は今このような状況で廊下を走っているとは思っても寄らなかつただろう。

一つ一つ教室を回るが、どこにも灰田純一はいない。本当に黒住の言うようにここにいいのか疑問に思えてしまう。南校舎は大体回り、可能性が一番高いと踏んでいた屋上にも誰もいなかった。それどころか雨で服をぬらしてしまい、良い骨折り損だった。

とすれば、消去法からいって北校舎のほうなのだろうと予想する。私は南と北の校舎を繋ぐ渡り廊下を渡り、黒住がいるであろう南校舎へと移動した。南校舎には既に土足で踏み入ったとされる足跡が沢山残されていた。黒住が走った後なのだろう。合流するのが最もな策かとも思えたが、あえて私は足跡の方向とは逆に走っていく。階段に足跡は付いていない。渡り廊下付近で別れたのだから、こちら側には行っていないのだろう。だとすれば、今までの時間をどこで潰していたのかが気になる。もしかしたら白椿さんを既に発見したのかもしれないと思った。

二階から一階に一段飛ばしで降りていく。多少の焦りは私にもある。運動の後の発汗とは違う汗をかいているのは自分でも分かる。心臓の鼓動の大きさも同様だ。

何よりも、灰田と邂逅してしまうことへの緊張が一番大きい。

神との邂逅と表現すればその恐ろしさは直に伝わるだろうか。手に汗握るところの騒ぎではない。握り締めたら汗の雫が零れ落ちそうなほどに湿っていた。

校舎の一階にきた。窓から校庭が見渡せる。すっかり雲は灰色に染まり、雨が激しく窓を鳴らしている。その横を私は駆け抜け、正面にある購買部を目指した。

終焉は開闢、開闢は終焉、終わりは始まりで、始まりは終わり。理論でもなんでもなく、良く聞く言葉だ。輪廻転生から春の入学シーズンまで、幅広く当てはまる言葉。少しキザなような気もするが、ごもつともだ、と私は今呟きたくなった。

灰田純一はやはり、そこにいた。こういう粹なことをする人間であるからまさかとは思っていたが、予想通り私たちが始まった場所で待っていた。

しかしそこにいる灰田はまるで灰田ではないように思えるほどに衰弱している。元々おかしい人間ではあったが、まだハツラツとした青年らしき容姿は持ち合わせていたはずだ。だが、今はやつれて傍から見れば死人のようにも見える。廊下の壁に背もたれて、ぐったりと首をうなだれている。視界が定まっていないのか、意識が無いのか、魂の無い人形かのごとくびくりともしない。

私はわざと大きく音が立つように歩いて灰田に近寄った。雨音で掻き消されたかもしれない。もつと、もつと大きな音が欲しい。あいつに面食らわせてやる。

そう思つて、おもむろにうるさく鳴る窓ガラスを横殴りに拳で打った。同時に銀色の欠片が飛び散る音が鳴り響く。殴った手が熱い。欠片で切ったようだが、今更どうでも良い話だった。

灰田はその音に気付いたというよりも、入り込んだ雨音に気付いたとも言つようにゆっくりとこちらを向いた。相変わらず生気は無いが、ひょうきんな笑顔だけは残滓のようにかすかな割合で浮かんでいた。

「穏かじゃないね。校内の窓ガラスを割るほど、青春に浸って見たかったのかい？」

冗談を叩ける口はまだ健在のようだった。雨でわざわざ濡れる位置に立ったまま、私は同じように不敵な笑みで返した。

「そうね、ギリギリそんな気分でもあるわ。今なら何でも許されそうなもの。貴方の頭上の窓ガラス、割ってあげようかしら」

「構わないさ。物理法則上、僕にそんな危害は無いしね」

「雨でずぶ濡れになるわよ？ 今の私みたいに」

「それは滑稽だ。校内で何故か雨に打たれる二人。下らなすぎてむしろ笑える図だよ。素晴らしい、素晴らしいすぎる提案だ」

「そう……それじゃあお望み通り……っ！」

思いつきり灰田の頭上位置にある窓ガラスを素手で叩き割る。顔をしかめたくなるほどの痛みが走ったが、軽快に吹き飛んだ破片がむしろ爽快な気分になさてくれる。灰田の言うとおり、廊下にガラス破片はあまり飛び散らなかった。その変わり、私の血が辺りに水玉模様を作る。

「ついでに私の血液もプレゼントよ」

皮肉っぽくそう言い、傷ついた手をぶらりと提げた。正直動かせるほど痛覚を失っていない。何気に泣きそうな自分に嫌悪感を覚える。

「久しぶりに人間の血を見た気がするよ。本当に痛そうだね」

その発言に私は首をかしげた。

「久しぶり？ つい一ヶ月前、白椿さんの両親のどす黒い血を目の当たりにしたばかりじゃない。他愛の無い出来事だって忘れたの？」
「まさか。彼らの死は僕にとって忘れられないものさ。どうでもいいことではあるのだけれどね。……だが、君ももう知っての通り、彼らは人間ではないのさ」

「人間では、無い？」

「どうということなのだろうか。白椿の家も黒住の家も、無論目の前にいる灰田もみな普通ではない異端ではある。しかし、人間ではないというのは解釈すれば『地球外生命体』ということなのだろうか。

「ふふふ、君の考えてることが手の平の上の出来事のようにだ。僕らはエーリアンではないよ、この星の生物だ。だが、世界が違う。人間として分類される生物なのか、それが怪しい」

「……何？ わけがわからないんだけど」

「アニメの世界を想像でもしてみてくれ。魔法を使える世界では『人間の形をしていても、魔法を中心とした世界のために、人間の枠に収まっていない』わけじゃないか。それと同じさ。僕らは僕らの世界にいるがために、……そうだね、白椿の血は君たちで言うケチャップみたいなものなんだよ」

「ケチャップって……血糊を使ったとも言いたいの？」

それに灰田は首を横に振らずに、視線だけこちらに向けてうざったらしい雨から逃げるように立ち上がった。

「血糊……良い表現だね。人形の中から血糊か。リアルだなあ……」

馬鹿にしたような口調で恍惚に浸る。見ていて気持ちが悪い。私は会話を逸らすように話を変える。

「結局、白椿さんは、どうだったっていうのよ……」

問うのは恐い。だが、もう今更と言えるところまで来ているのだ。大体の予想も付いている。世界が変わったというのは、そういうことなのだろう。

私たちの世界にはとうに消え去った『仕来り』という独特の宗教的制度。それに苦しむ白椿さんを今まで見てきたが、私には正直漠然とした危機感しか感じられなかった。そうしなければならぬという強迫観念は現代にはほとんどなくなって、子育てにおける親のしつけというのも問題になってきた昨今、私にはその感覚が無いに近い。これが世界の違いということなのだろう。物事を自分の定規で測ることが出来ない。これほどに辛く、そして無関係なことも他には無かっただろう。

「白椿は、人形だよ。そういう意味で言えば黒住も」

灰田が真正面から私と向き合う形になる。雨で濡れた銀色の髪がやけに艶かしい。その歓喜と絶望を掛け合わせたような絶妙な表情がそれを顕著に表に出していた。とてつもなくそれが、嫌悪感を催す。

「そして それを作ったのが、僕だ」

「……」

ふん、と私はそれを鼻で笑った。

「神気取りね。胸糞悪いナルシストなんかよりもつと悪質に気持ち悪いわ。今の一言に三度『悪』って入ってたくらいに最悪にね」

「酷い言われようだなあ。僕は真実を語っているだけだ。僕は彼らを作って、世界を構成したんだ。悪と善と、それと人間をね」

嘘だと思う。この世界には人間なんていない。すべからく悪か善に偏った異端。もしくはそれ以外の『何か』しかない。恐らく酸性の欠片も無いだろう雨粒だって、そうして考えれば同じくして異端だろう。そういう世界に彼は生きていて、過ごしてきたのだ。

何一つ私たちの世界と同じ部分なんて無い。殻だけが似ていて、中身はとんだパラレルワールドなのだ。灰田の努力は認める。彼がどれだけの苦勞と苦悩を超えてこの世界を構成してきたのかは私の知りえる部分ではないだろうし、別段知ったところでそれもまたどうでもいい。重要なのは『そんな世界を作ってしまったこと』だ。

私が今立っているこの地面が空想のものなのか現実のものなのか判断する材料はどこにもない。もしかしたら地球は壊滅的なまでに温暖化が進んでいるかもしれないし、形だけ現代で氷河期に突入する前なのかもしれない。何にせよ、今までの場所と違う場所、違う世界を作ってしまったことが罪であり、罰せられるべきなのだ。

「頬っ面をしばいてやりたいわ」

ため息と同時に思わず考えていたことが口に出てしまった。灰田はそれに素で怪訝な表情をしている。

「僕のかい？ 何故？ この世界は君も望んでいた世界のはず。同属のみが集まる世界。何もかも自分と異なる生物はいない。すべからく異端だ。不満があるというのかい？」

「……待って、頭が痛くなってきた。貴方、私がこんな世界を望んでいると思って作ったわけ？」

「そうさ。実際は君のため、というのにはかなりの齟齬があるけれど、結果的にはそうだろう」

「有り得ない。貴方、何を勘違いしてこんな狂った世界を創造したの？」

すると灰田は突然自慢げに表情を綻ばせた。それは今までの灰田のものではない。まるで初めて作ったものを褒められた子どものような無垢なものだ。

「この世界は『世界初』だ。誰も疎外されない世界。今までどんな神も作ってこれなかったらう完ぺきな世界だ。人類は争わず、喧騒の声は存在せず、すべての人間が自分の何もかもをさらけ出しても生きていける世界。多少急ぎ足だったから綻びはあるだろうけれど、そんなものはあとで修繕すれば良い。そうだろう？」

わけのわからない問いを私に投げかけてくる。私は嘆息をつきつつ言う。

「そんな叶いもしない理想の前に、その人間とやらはどこにいるの？　ここに来るまでの間、残念だけど誰一人とも出会わなかったわよ」

それを聞いて灰田の態度が一変する。掲げていた手をゾンビのように垂らす。今までは有り得ないくらいの感情の応酬だ。こんな人間だったのかと思わず身を引いてしまうほどだった。

「黒住だ……奴が僕の世界の完成の少し前に、異端を片っ端から潰していった。理想郷の破壊者だ。白椿まで崩壊させやがって……何が自己破壊だ。あんなものは僕の望んだものじゃない……」

黒住の名前を耳にして思い出す。

連続誘拐事件。神隠しとも言えるあの事件の犯人は黒住だったのか。世界規模で誘拐が起きているにも関わらず、その関連性を追及するどころか新聞で記事にもならなかった特異な事件はやはり異端の

仕業だった。元々いなかったものを排除した、その程度のこととして黒住の中では処理されたのだろう。

だがそこで灰田を見る。彼の落胆の様子は思いのほか大きそうだ。私たちの世界に自分とつりあえる人間がいると知って、それらを迎える準備をしていたのだろう。焼いていた焼肉を横から取られるようなものなのだろうか。無残にもタレのみが残ってしまった世界では、あまりに味が無い。

「こんな、こんな世界が貴方の望みなのか？ 異端ばかりの味気ない世界が、貴方の望みなのか？ ここに他の人がいたって同じよ。知ってる？ 『理想郷ほどつまらない世界は無い』わ」

灰田が瞠目する。私が何を言っているのか理解が出来ないようだ。私はそこで一冊の本の名前を挙げた。

「こわれたにんげんのこわれたせかい。私の記憶の中にいつの間にかしまつてあつた物語の名前よ。おままごとだけをして、ずっと遊んでばかりの女の子の話。彼女が求めた理想郷。それがまさにここなんじゃないの？」

孤独に生きる少女は求めながらも諦観し、未来を見据えてなどいなかった。見つけるのはいつだって動かないおもちゃのみ。しかし、大人になるにつれその孤独も比例し、夢だと知りつつも再び求めるようになった。その理想郷。白椿家とまったく同じ考えの下に編み出された世界は、『自分と同じ人間だけの世界』だったのではないだろうか。

同族意識と言ってしまえば簡単だ。類は友を呼ぶのは現象ではなく意識だ。だから女の子は仲間だけを迎え入れる世界を作った。そういう力を持っていたから。

……というエンディングが、最も灰田にとって良いものなのだ。

この作品の著者である神の理想なのだ。

私は畳み掛けるように続ける。

「下らないわね。千差万別多種多様十人十色。差別もあれば偏見もあるように、相容れない人間なんてそこら中ごまんといるわ。寂しい？ ふん、雑魚のエゴな言い訳なんて聞き飽きたわ」

「……エゴか。君の言い分も分からないではないけれど、そういう風に生まれてきた人間に対する慈愛が欠けているね」

「……じ、慈愛？」

思わず吹き出しそうになるのを堪える。

「力を使い果たしたのか雨に濡れて風邪でも引いたのか知らないけれど、貴方、頭おかしくなってるじゃない？ そんな子どもみたいな人間じゃなかったでしょう貴方」

「完成間近の仕事を壊された気分なのさ。こればかりはどうでもいいで片付けられることじゃない」

「ふうん。ま、私には『どうでもいいこと』だけれどね」

すると灰田が心底憤慨したかのように額に青筋を立て、私の胸倉を掴み上げて、吐き散らす。

「何が、不満だ」

負けず劣らず睨み返し、心底うんざりだというように言う。

「何もかもが、不満よ。狂った人間も狂った世界も、狂ってるって思われていることも。そんな、貴方も勿論ね」

「自覚が無いのか？ 君は大いに狂っている。僕らと、何ら変わりが無いほどにな」

そんなことは分かっている。自分が如何に奇異で特異なものなのか、それは自分自身が一番良く分かっていることだ。だが、認めることは出来ない。私が灰田と同等の人物なのだと納得することなど出来るわけではない。

「私とあんたは違う。もう誇大表現すれば銀河系レベルで違うわ」
「それはこの世界に対する皮肉っぽいダジャレかい？」

「そうとも言っわね。けれど、あんただって気付いてるでしょう？だからあんな問いを私に何度も投げかけてきた。そう認識させるためと、『そう認識させないために』」

胸倉を掴まれている手を叩く。話すのには邪魔で邪魔で仕方が無い。灰田はその手を呆気なく離し、私は数秒ぶりの地面の感触にありつく。

「まったく。女性の胸倉掴むなんて失礼極まりないわね」

ゴミくずなんてついてもいないのに、払う仕草をしてそう言った。しかし、灰田からは返答は返ってこない。私は心配になって声をかけた。

「どうしたの……？」

「僕は、人選を誤ったようだ。どうやら僕の世界では計れない人物を引き入れてしまったらしい。まさか、そこまで聡明だとは思わなかった」

乾いた音が漏れている。灰田は私を憎らしいものでも見るかのように睨んできた。不快だ。なんて不快な視線なのだろうか。物欲しそうな目をする餓鬼と同じだ。もはや『天才』と呼ぶに相応しい人

物はこの世界から消え去った。

「君は、本当の意味で優等生だったんだね」

そう、私は真の意味で優等生だ。だからここにいます。

「今なら、今ならあんたの問いに真剣に答えることが出来るわ。聞きたい？」

「聞こうじゃないか」

灰田が私に終始投げかけてきた問い。

一度目は天才とは何かを問うた。次いで優等生とは何かを問うた。それはまさに灰田と私を比べる真理の問いであり、私はそれに対していつだってオブラートに包んできた。辞書で引かれる言葉を述べるのが優等生の役目ではない。それは国語の学士が述べることだ。今なら良いだろう。天才と優等生の違いはこういうことだ。

私は大きく腕を振りかぶり、灰田の頬に向かって思いつきりそれを放った。一瞬、廊下に物凄い音量の乾燥した音が鳴り響く。手がいじんと熱を持つてくる。この痛みが優等生の仕事であり、その痛みが天才が受けるべきものだ。

灰田は自分が何をされたのかいまいち理解出来なかったようで、頬を押さえることもなく無為に空中を見つめて呆けている。無理もない、あれだけの強さで叩かれたことなど無かっただろうに。

「私たちが同じ異端で、それがそれぞれ『天才の異端』と『優等生の異端』だとするわ。……まあ、この時点で大きな差があるのは明白だろうけど、あえて分かり易く行動させてもらうなら今みたいな感じがしらね」

「僕が叩かれて、君が叩く、かい？」

「そういうこと」

「……不服だけど、理解が出来ない。今ばかりは君の思考が読めないね」

当然だろう。この程度で理解できたならば、灰田はこんなにも狂わなかったはずだ。

「外に出ましょう。お互い、頭を冷やした方が良いわ」

踵を返し歩き始める。足音から灰田があとをついてきているのが分かる。

雨に濡れた服がべったり肌にくっつき、気温も低いことから身体を冷やしている。しかし、身震いすることすら忘れてしまうほどの使命感が私を突き動かす。自然と歩幅は大きくなる。

昇降口を出て、強い雨音の世界に入った。濡れることも厭わず私は直進する。前髪から雫が滴り落ちた。今はその感触がやけに気持ちが良い。

ふと二階校舎を見上げると黒住がこちらを見下ろしていた。何故だか非常にやつれた顔をしているように見える。しかし、私に気付いたのか窓ガラスを開けて自分の懐から何かを探って、それを私に投げた。校庭の土が盛り上がるほどの衝撃でそれが落ちた。灰田はまだ来ていない。私はそれを拾って、黒住に視線を送った。

しかし黒住はそれには何も返さず、黙って窓ガラスを閉めてしまった。

後は任せた。そう取って良いだろう。

「そんなこと、頼まれなくてもやってやるつもりよ……」

空を見上げた。相変わらず、晴れる予定はないようだった。手の平の中で、冷たい鉄の重みだけが私に決断を迫っていた。

34、世界破壊

おままごとしか出来ないのは、友達がいらないから。

おままごとしか出来ないのは、それ以外の遊びを知らないから。

それ以外の遊びを知らないのは、ずっと一人のままだから。

物語には続きがあつた。女の子はただ一人世界に取り残され、寂しく遊んでいたのだが、そのうちその孤独に耐えられなくなっていた。少し別の世界を覗けば、そこには溢れんばかりの人がいるというのに、自分はただ一人。一体何の恨みがあつて自分をこのような世界に閉じ込めたのかと、毎日枕を濡らしながら神を呪つたくらいに。女の子は世界の理不尽さに気付き始めていた。

だから、女の子は他の人を招待しようと思つた。私自身、その考え自体は否定できない。だが、女の子はホームパーティーの準備をただだけで、招待状など一通も出さなかった。それでは勿論人など集まるわけがない。人と触れ合わない女の子の知能はもはや幼児以下だ。

しかし、そんな日々も長くは続かず、女の子は不特定多数の人に招待状を送りつけた。送つた人物がどのような人物かも知らずに、とにかく沢山の人に来てもらおうと思つたのだ。だが、身元も分からない招待状には人々は目もくれず、ゴミ箱の中に全て消え去つていった。

女の子は諦めない。ぞつとするような努力の量をこなし、本を読み、人の世界を知つた。そうして彼女は『自分に合いそうな人物だけ』を招待することに決めた。そうすれば無下に断ることもないだろうと予想したのだ。

集まつたのは、女の子と同じ、『おままごとしか遊びを知らない人たち』だった。招待状には「一緒におままごとをしましょう」とだけ書いた。それだけの文で人が集まるとは思えないが、物語ではかなりの人数が集まつたようだった。

「でも馬鹿だと思わない？ 結局その面子でおままごとをして遊んだの。何のために人を呼んだのか、全部忘れてしまってるのよ、その子は」

心底馬鹿にしたような口調で後ろを歩く灰田に言う。依然として灰田は死んだ魚のような目をしている。先ほど宿った子どものような瞳の輝きも瞬く間ということか。名残惜しくも無いが、囚人を引導しているようで気分は良くない。

勝手に言うといい、と灰田が口から言葉を零した。もうダメなのだろうか。力なくぶら下がる装飾の腕は何も掴もうなどしていない。雨と一緒に排水溝に流れ落ちてしまいそうだった。

「立場逆転…… どころの騒ぎじゃないわよ、もう。どうしたの？ 確かにあんたの世界は不安定な形で、それもあんたの望まない形で出来上がってしまったけど、それでもそんなに落胆することは無いんじゃない？」

「むしろ僕としては、その世界に巻き込まれた君がそれだけ冷静でいられることが驚きだよ。さすが選ばれた異端ということかな」

「別に私は巻き込まれたとか思っちゃいないわ。どうせ夢でしょ、とかそんな風にしか思っていないもの」

「樂觀的なのか聡明なのか……」

「優等生だもの。常に冷静にならなきゃやってられないわ」

実際は口だけだ。これは夢でもなんでもないだろう。先ほど窓ガラスを素手で割ったときの痛みは夢にしては痛すぎる。忘れていたが、手の甲からは血が滴り落ちているようだ。雨の上に落ちて路上にふやけた模様を作り出していた。

雨が冷たい。これ以上歩いても何にもならないと判断し、長い校庭の半ば辺りまで来たところで私は立ち止まる。ちょうどここなら

ば、校舎の中から傍観している黒住にも良く見えるだろう。

「……さてと、天才と優等生の話だったかしら。あんだ、何か言いたいことはある？」

私はそう灰田に催促した。灰田の考えていることなど手に取るように分かるが、あえて一応聴いておくことにする。

「僕は……この世界を作ったことを後悔はしていない。完成形とは程遠くとも、それはまた集めなおせば良い話だ。けれど、君が僕らと違ったということがあまりにも衝撃が大きかった。僕が落ち込んでいる理由はただ一つ、それだけだ」

「ふうん。何、私に惚れでもしたの？」

そう微笑を浮かして冗談めかして言ってみる。

「そこまで固執していた、という意味合いで言えば間違っではないだろうね。僕とまともに会話できたのは君が始めてだ。他の人は全て一言一言交わして異端へ還って行った。僕との会話で自分の何もかもを失い、破壊され、自分が異端だと認識することが出来た。しかし、君はいつまでたっても『自分を見失いはしなかった』」

それが灰田純一の『自己崩壊』の手口。白椿が殺し、黒住が破壊するという能動的なものに対しての唯一相手に対して受動、いや自動的なものとして相手を壊したセルフディストラクション。

唯一、彼らの中で『待っていること』を選んだ人間の手口だった。

「多くの異端を扉の中へと招き入れたつもりだったんだ。でも、ふと辺りを見回すと誰もいない。最初はどうしてか分からなかったが、きつと自分と同じものではないのだと思った。だから、君を見つ

たときは飛び跳ねて喜んだものだよ。それでこんな結末とは……残念すぎる」

語る表情は懐かしいものを見る目のよう。もしくは、自分の死を悟って走馬灯に身を任せて何かを待つ者のよう。憂鬱、というものだろうか。

「私は……私は残念だけでもそういう風に思われても迷惑にしか思わないわ。大体私の平穏な日常をぶち壊してくれたのはあんただしね。むしろ腹立たしいわ」

「そうかい……。でも、君と僕の、何が違うんだ？」

灰田はそう問うた。その問いは間違いじゃない。正しく、清い質問だ。単純な疑問。彼の得意な理論なんて何も存在しない。

天才と、優等生の違いとは何だったのだろうか。何故、私は灰田とここまで関りあいを持ってきて、今更あんたとは違う、などと口に出来たのだろうか。

事実、私はつい一ヶ月前までは灰田の自己崩壊の餌食となっていた。

森野医院での一件。虫嫌いな私は虫を踏み潰してしまった。記憶に薄いが、熱中症で倒れたわけではなかったことは確かなのだ。勿論虫嫌いな私がそんな気味の悪いことを成し遂げられるわけが無い。言えば、あの時は『壊されていた』のだろう。わけのわからないことも口走っていたかもしれない。

灰田は会うたびに私に問いを投げかけ、ある種の比喻で何かを伝えようとし、全てはぐらかしてきた。

織田、豊臣、徳川の図。白椿、黒住、灰田の図。誰が強かったとか、誰が弱かったとか、そういう問題ではなかったのだ。彼は単純

に、『自分が待ちに徹していた人間』だということを伝えたかったのだろ。いや、加えて他の二人の立場をも説明していた。

また、彼は問うた。

世界と神はどちらが先に生まれたのだろうか。今考えれば、あれは灰田自身の立場と、その存在について誰かに問いたかったのだろと私は思う。そして、これこそが全てだった。

神が先か、世界が先か。そんなことは全世界の生物という生物の最もあとに生まれたとされる人間には創造も付かないことだ。だから私のあの時の問いの答えは『分からない』が正解だった。事実それは灰田にも分からないことだろう。

だが、それでも言えることがあるのだ。

神がこの世界に生を受けたわけ。何故、神が生まれたのか。

世界が、寂しいから、神が生まれた。

そしてその神が、寂しいから、生物が生まれた。

灰田純一はその生まれた神の一人だった。彼の望んだ世界は、自分が寂しくない世界にも関わらず、生み出すことを最初から考えず、誰かを他の世界から招くことだったのだ。

物語の女の子のように、自分とともに無意味なおまごことをしてくれる無機質な友達ばかりを望んでいたのだ。

天才は世界を作ることが出来た。だが、天才がゆえに、世界を作ることしか灰田純一には与えられなかったのだ。数式を編み出す、解く事において天才がいたとしても、その人物が日本の古語や石版に記された謎の言語の解明の天才には成れないように、世界を作り出すことという偉業を成し遂げることが出来た灰田には、他人と関りあうことへの才能が一切無かったのだ。

だから、「こわれたにんげんの、こわれたせかい」だったのだ。

そして、対する私は、そんな天才からはかけ離れた世界にいた。

どこの誰が生み出した世界かは知らない。だが、平穩で、日常で、何も無くて、全てが揃っていた世界だった。

喜びも悲しみも、死も生も、普遍も狂気も存在した。

そしてそんな中で私は異端だった。何がどう異端なのか分からないほどに異端だった。

私には喜ぶことも悲しむことも出来た。死ぬことも生きることとも左右するほどの力があつた。日常を過ごすことも狂気の世界に住み込むことも自由だった。ただ一つ、世界など作れなどしないということを除いて、何もかもが出来た。

レールの上を走ることが出来たし、レールを作ることでも出来た。ゆえに道は多数あり、そうして枝分かれした道を作ったからこそ、私には『寂しい』という感情は一切芽生えなかった。

私は、世界を作ることが出来ない代わりに、『扉』を作ることが出来たのだ。他人との架け橋、塞ぎこんだ世界の解放。そうして、私は優等生を名乗っていった。

「あんたが世界で、私が扉。そこまで差は開いていたのよ」

いまや世界は黙りこくっていた。灰色の雨を降らすのみで、それ以外が死んでいた。灰田は濡れた髪を払おうともせず、そうか、と小さく呟いてうつむいたままだった。

「一つ言わせてもらえば、あんたは神になんか向いてないわ。さっさと止めて人間にでもなっちゃいなさい」

「は？」

いつか私が灰田の言葉に大口を開けたように、灰田もそうして珍しいものでも見るかのような目で私を見た。

「だからあんたには神なんて向いてないの。全知全能であらせられ

る神が、寂しいとかそんな下らない理由で、世界一つ作ってんじゃないわよってこと」

「馬鹿にしているのか君は？」

「馬鹿にしている？ そうじゃなくて馬鹿でしょ、あんた。天才と馬鹿は紙一重……変態だったかしら。まあ、どちらにせよ同じね。おままごとで遊んでる青年なんて変態そのものじゃない」

「君って人は……一体何をしにきたんだ」

怒りをあらわにして灰田が吐く。何をしにきたと言われても、灰田に呼ばれたからとしか返しようが無い。

……というのは嘘だ。言い訳だ。ここまで来たら、意思に従うしかない。

私は黒住から譲り受けた鉄塊を胸の高さまで上げて、弾が装填されているかを確認する。残弾は一発のみだった。安全装置を下げ、その女子の腕には負担が大きい重さを灰田のほうに向けた。

「……僕を、殺しに来た、ということかい？」

怖れている様子は微塵も無かった。覚悟を決めた、ということだろう。

「殺しても良い、とは思ってるわ。私が元の世界に帰れるならね」

「保障は無いよ。少なくとも、この世界からは出られるだろうけど。異次元の話なんて所詮人の形をしている僕には予想も付かないことさ」

「ま、だろうと思ったわ。だから、ここであんたに選択肢を与えることにした」

雨脚が弱くなった。ポツポツと、誰かの涙のように私の頬に雨粒が落ちる。灰色の空は段々と青色を取り戻しつつある。日差しはま

だでない。

「ここで死ぬか、扉をくぐるか。この二択よ」

引き金を絞る。逃げはしないだろうが、私は灰田に選択を迫るために、そうせざるを得ない。

「扉をくぐるというのは、どういう未来の話だい」

ふん、と私は鼻を鳴らす。口元を吊り上げて、精一杯いやらしく答える。

「あんたみたいな寂しい子のために、私が特別に招待状を送ってやるって言ってるのよ。普遍的で、残酷で、とても楽しい世界へのね。勿論条件があつて、あんたはきつと神を止めなきゃいけないわ。人間の世界に神なんて場違いな生物じゃないもの」

灰田は黙る。頭の中の細胞という細胞をフル活動させてさぞかし悩んでいることだろう。そのさまがやけに面白くて、私は不意に笑みを漏らしてしまった。

それに釣られたのか、灰田も似合わない笑みを浮かべて言った。

「どうすれば、神を止められるんだろうか……？」

「それはあんたの仕事でしょう？」 セルフディストラクション 『自己崩壊』さん？」

「そうか……そうだね。これは僕の仕事だ。君に頼むべきことじゃなかったね」

「ええ。でも、馬鹿なあんたのために、私も少しでも手伝ってやることにしたわ。一応あんたに了承を取っておきたいのだけれど、良い？」

灰田は静かに頷いた。私もそれに返すように頷く。

空から日差しが覗いた。雨に濡れた路地が光を反射して輝く。とても眩しい。私は思わず目を背けて、手で影を作った。灰田の姿が見える。だらしのない、びしょびしょに濡れた服で立っている。その背後には扉があった。

握ったものに力を込める。

「私があんたの世界に生まれて、黒住や、白椿さん、それにあんたみたいな変な名前をつけられるのだとしたら、こう呼ばれていたかもしれないわね」

灰色の空を切裂くように、銃弾が飛び出す。

「『セルフディストラクション
世界破壊』。とかね」

世界に亀裂が入る。灰色の空はどんどん青空へと変わっていく。

ここまで長かった。孤独に飢え死ぬ神との世界へ架け橋をかけることが、これほどまでに難しいことだとは思わなかった。それをなしえたのも、私が優等生だからだろう。私の後ろに、一つ、世界が出来る上がる。

まとめて全員に招待状を送ってやる。狂った世界も狂った人間も、白椿家も黒住家も。そうしてまた一つ、私たちの世界は面白くなっていくのかもしれない。

灰田がこちらに歩み寄ってくる。相変わらずの綺麗な顔に、紅葉模様が一つ。滑稽な光景だった。

「君に、聞きたいことがあったんだ」

「何？ スリーサイズなんて教えてやらないわよ」

「安心してくれ。そんなもの後から何度でも調べてやるさ」

「変態ね……。で、何？」

彼は手を差し出した。私は、それを握った。それで世界は繋がった。

「君の名前を、聞かせてくれないか？」

エピソード

夏の日差しが降り注ぐ。降り注ぐ、という意味合いで言えば、夏の日差しよりも蝉の声のほうが大きいと私は思う。虫嫌いな私にとつては、稀に部屋に飛び込んでくるのはご遠慮願いたいところである。

道路の中から吹き上げるようにして陽炎がゆらゆらと町をゆがめている。夏季長期休暇に入り、町並みには人が溢れていた。親子連れから制服姿まで多種多様。強いて言うなら背広姿の男性女性には敬意を支払わざるを得ない。お勤めご苦労様です、と知らずに呟いていた。

「先輩聞いてますかー？ 陽炎なんて見つめてたって何も見つかりませんよ？」

横から少女の声が割り込んできた。少女の名前は白椿菊乃。可愛いらしいポニーテールが特徴であったが、夏場は暑いとのことではショートになっている。

私たちは今マクドナルドで昼食を取っていた。相変わらず白椿さんのトレイの上には身の毛もよだつ量のジャンクフードが顔を並べている。よくこれだけ食べて太らないものだと感じる。いや、運動をしているわけではなく、単純に体質の問題なのだろうが。それならばそれで羨ましいというものだ。

「それ、毎度思うけれども少しは自重出来ないのかしら。見ていて気持ち悪くなりそうなんだけど」

「あ、あれですか。このなんとも言えない香りがダメなんですか。分かります、あたしもピクルスとか見るだけで吐き気しますもん。漬物だかなんだか知りませんが、ジャンクフードなんですからジャ

ンクで良いじゃないですかをあたしは業者に文句いいたいですね。
レタスとかは大歓迎なんですけど」

「単なる我侭じゃないそれ……」

「いいーえ！ これは日本の国民調査によって出された統計ですよ先輩。『ピクルスは必要か否か！？』という質問に対して、80%の人が『いらない』と答えています。美味しくないものには人気は出ない。因果ですね因果」

「絶対嘘でしょう。少なくとも私はピクルスいる派よ。理由は無いけど」

「先輩……ご愁傷様です。あとごちそうさまです」

「早い……」

何度見ても慣れない。胃袋が宇宙というよりも、口内が宇宙だろう。どれだけ詰め込めばそんなことになるのか全く理解が出来ない。近日体験した異次元旅行よりもこちらのほうが大いに謎過ぎるように思える。

「……で、何の話だったかしら」

下らないことに頭を使っても仕方が無い。白椿さんに視線を戻す。

「ああそうでした。なんとですね、黒住が一週間無人島生活を体験させてくれるらしいですよ！ 離れの孤島……バカンスですよバカンス。素晴らしいじゃないですか」

「それはバカンスじゃなくてサバイバルっていうのよ白椿さん。あとそれ、貴女の親に外出許可取ってるの？」

「勿論ですよ。へっへっへ、うちのお母さんもお父さんも、あたしの言うことには逆らえませんかからね。可愛い娘の頼みですし」

「そっ……なんか、色々大変ね……」

白椿さんの家は全てが元通り、になれば良かったのだが、白椿家のしきたりを全て失ってしまった両親は今までの奇行を悔い、過剰とも思えるほどに白椿さんを大切にしようになっていた。溺愛とはまた違うのだろう。繋がれた犬と表現するのが正しいのだろうか。一時期はその錯乱した記憶のみが残ってしまい、警察に出頭しに行こうとしたことがあった。そうすれば白椿さんはまた一人に戻ってしまう。私はそれを全力で止めに入っただ。世間で罪にならないのが奈落の底の奇跡か。あの日殺害された多くの人たちも、まるで夢を見ていたかのように平然と日常を送っている。

「黒住の野郎、無駄に資金とか権力だけがありますからね。利用しない手は無いですよ」

「般若がいるわ……」

いっひっひ、と下品に白椿さんは笑う。手元にあったジュースを取って、一口飲む。どうやらむせたようだ。

「ごっほごほ……。んまあしかし、つい数ヶ月前までの出来事が嘘みたいですね。先輩の前で号泣したのが今更恥ずかしく思えてきました」

「そうね。本当に夢のようだったわ」

つい、数ヶ月前。

私は目の前の白椿さんと出会い、他に黒住と、そして灰田と出会った。あの頃はまだ互いを互いで試しあうギクシャクした仲だったが、今では家族のようだ。彼らにとっては繋がりを持てたことが何よりも嬉しいのだろう。黒住は黒住で自分の使命から解放されたとか何とかで、すぐにどこかへ旅立ってしまった。何経由かは知らないが、白椿家とはちよくちよく連絡を取っているらしいが。

灰田純一は今もどこにいるかわからない。どこかで作業着を着ているかもしれないし、黒塗りの車を乗り回しているかもしれないし、橋の下で震えているかもしれない。彼とはあの世界で手を繋いだ後、一度も会っていない。彼が拒んでいるのか、単純に見つけられないのか。せめて生死の安否くらいは確認したいと思っている。

ホント、どこに行つたのやら……。

空は余計なくらい晴れ渡っている。あの日から一度も灰色の空を見ていない。梅雨の時期も過ぎたというのに、どうしたことだろうか。

「灰田純一……」

白椿さんが唐突にその名を口にした。呆けていた私はどこかに灰田の姿が見えたのかと思い、急いで辺りを見回した。しかし、あの目立つ銀色の髪の毛は見当たらない。

「あ、いえいえ、違ふんです。ちょっと思い出しただけで」

「そう……。一体どこにいるのかしらね、あいつ」

「……先輩。人と、繋がれるっていうのはとても素晴らしいことですよね」

「急に何？ そりゃ良いことでしょう。それとも性的な意味で？」

「そんなセクハラ発言求めてませんよあたしは！ その、なんていうか……いつまでも、一緒にいられるっていうことですよ」

赤面することも無かったので、きっと良い意味で言ったのだろう。

「あー、あたしもそういう人欲しいなー」

なんだか棒読みで白椿さんが物欲しそうに言った。ちらちらとこちらを盗み見ているのは気のせいではないだろう。

「私になつてあげてもいいわよ？」

「え？ マジっすか！？」

「勿論冗談よ」

「うわっ、今の結構ショック受けましたよあたし。一瞬涙腺緩みましたもん」

「白椿さんにも良い人見つかるわよ。……と、私も人のこと言つてられないんだけどね……」

「あーあ、あたしたちの中でそういう幸せモンは一人だけですか。悔しいですねー」

「一人？ 誰？」

「んにゃ、なんでもありませんよ。それはそうと、無人島の件ですけど……」

あの日、降っていた雨が、誰かさんの涙だとすれば、こうして雨が降らないのも良いかな、と私は思った。

きつとまた、誰かが雨を降らす。その日まで、どうかこの平穏が続きますように。

エピローグ（後書き）

どうも初めましてごぶさたしてました。蜻蛉です。

放置から役二カ月……？経って、やっと完結させることが出来ました。そのあとがきとして、不肖蜻蛉がお送りいたします。

この『セルフディストラクション』という作品、実は3万文字程度、話数にして8話辺りで終わる予定の作品でした。したら何があったのか、こんなことに……。

プロットもテーマも構成も何も決まっていなかった状態での執筆開始。

正直完結までの道のりは程遠く、かなりの苦難がありました。

まあしかし、結果としてあいつたエンディングにたどり着いた限りです。いやはや、綺麗なのか綺麗じゃないのか、それは私には分かりません。

なんだか大分力オスな物語なので、多少おかしいなーと思う部分があるかもしれません。そこはなんというか、寛大な心で私に知らせてくれるとありがたいかと。

では、この半年あたり、お疲れ様でした俺。そしてこの作品にお付き合い頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1562c/>

セルフ・ディストラクション

2010年10月11日02時03分発行